

人物を中心とした

北海道教育郷土史

山 崎 長 吉

北海道の夜明けを担う人脈

えぞ地における初学の始めは、徳川家康開府のころとされている。花山院大納言定好の公達羽林忠長、後水尾天皇の勅諭を蒙り、えぞ地上ノ国に配流されて、子弟に教育したという。

アイヌに手習を教えることは、意外に困難であった。天明六年探検家の最上徳内が、ウルップ島まで渡航の途次、いろいろを教えたという。『蝦夷草紙』は最上の探検記録であるが、最上の学識は、シーボルト著『日本』によって、逆輸入され、高く評価されるに至った。

藩学は元禄四年以来、藩主の掟書によって兆しはあったものの、藩校は文政五年、松前章広が、岩代国梁川から帰封して、始めて徴典館を設立した。藩士教育機関は、それより十年ばかり前、文化九年から十二年の間に、松前奉行服部伊賀守貞勝によって、倡教館が設けられ、平沼蘆平は督学として教授した。世にいう貞勝学校である。

徴典館は松前城内外に、支校六校を有し、朱子学をもって主学とした。教授の平沼蘆平、山田三川らによって、それが実証される。また、梁川から帰封のさい、下野の黒羽藩から、六万個の木活字を購入し、持参した。本格的な印刷は、これから始められ、藩校教科書『古文考証』は、その印刷時期は不明であるが、藩校最初の教科書として現存する。

支校は郷学に属し、藩において経営し、藩士子弟のみでなく、庶民子弟も入学を許した。徴典館において学び、幕末から明治の始めにかけて館藩の郷学校の学監になった新田主税や、松前正義隊の勇士で、江差において尾山塾を設け、公立柏樹学校ができて、なお名声高く柏樹学校を上廻った尾山徹三など、藩校の出身である。

藩校は、のちに増設され、文学は徴典館、読書は明倫館、医学は済衆館、武芸は威遠館西之丸道場は直真景流、荒町道場は神道無念流、柔道諸流、銃術諸流、唐津内道場は砲術諸流、江差学校が設けられ、五十年間維持された。藩校の教育振興に努力したのは、藩主松前崇広である。崇広は外様大名で異例の老中格、海陸軍総裁になった名君で、洋学教授にも力をいたした。

安政元年日米和親条約が締結されて、箱館は物情騒然たるものがあった。箱館奉行竹内保徳、堀利熙は、外国に目を開くためには、教育機関設置の要を察し、泰西諸術の研究ならびに教育を目的として、箱館奉行支配諸術調所を箱館に創設した。これが世にいう総館である。

教授に白羽の矢を立てたのが、文政十年伊予大州藩士武田敬忠の次男として生をうけた武田斐三郎である。斐三郎は早くから緒方洪庵、佐久間象山、伊東玄朴について蘭学を学び、その学識は早くも知られ、ロシアの使節プチャーチンが、開港を求めて長崎にきたとき、蘭学者箕作阮甫に従って接衝した。もちろん蘭語通詞ができたからである。

斐三郎は、すでにカラムルス著『万国地理新誌』から北方關係を抜いて「北地略記」を著していた。北地関心の深さがわかる。

安政四年、江戸に藩所調所ができ、すでに昌年疊は儒学の総本山として名をなしていたが、これらと経営目的は本質的に相違し、地位・身分・学閥・門閥の差別を撤廃し、実力本位の教育をした。学力の程度により訳書生と原書生に分け、成績評価をもとに科学的・実証的教授をした。「学制」頒布以前、すでに学制の理想を発揮している点、福沢諭吉とらび称する人物と評しても過言ではあるまい。元治元年、五稜郭の完成を見、その設計施行に技術を発揮し、名残り惜しく箱館を去った。その教え子から鉄道事業の創始者井上勝、郵便制度の創始者前島密、海運業の先達者蛸子米次郎、工学頭山尾庸三、開拓使測量技師村田万太郎、その他今井兼輔、水野行敏らの人材を輩出したことで、その成果は十分うかがえる。

幕末の箱館は、各国が優位を確保するため競って来航し、貿易・宣教・施療・學術などと会わせて教育に力を入れた。それは従来の漢学・国学とは本質的に相違したものであった。洋学によって得た世界の情勢は、驚異以外の何物でもなかった。その恩恵を受け、やがて、茶道はもちろん日本の教育は目覚めていった。

ペリーの来航に一足遅れて、ロシアからプチャーチンがゴスケウイチ、レーマンらに乗せて来航した。ゴスケウイチは橋耕斎と帰国後『和魯通言比考』を著わし、和露辞典の嚆矢となっ

た。レーマンに教えを受けた横山松三郎は、洋学を体得し、明治の画壇に花を咲かせた。写真術もレーマンから教えられた。

安政五年、領事館付司祭イワン・マホワは日本の子どもたちのために『ロシアのイロハ』を箱館において出版し、子どもたちの教育に刺激を与えた。

マホワの後任ニコライ大主教イワン・デミトリは、箱館においてギリシア正教会のニコライ堂（別名ガンガン寺）を建て、のち東京に転じて、駿河台のニコライ堂を建てたことは、あまりにも有名であるが、宣教と教育を表裏の関係において仕事をした。

デミトリの語学教師が新島襄で、福士成豊の援助で、元治元年箱館脱走に成功したが、デミトリから世界の知識を得て、おおいに役立てたものと思う。米船ベルリン号に六月十四日の夜半乗船し、下僕として働き、ついに万里を航する大志と、その決死行を成し遂げた。渡航の場所に彼の詩

里児決志馳千里 自管辛苦豈思家



武田 斐三郎

却笑春風吹
雨夜 枕頭尚
夢園花
を刻んだ碑が
建てられてい
る。かくてキ
リスト教の奥
義をきわめ、

同志社創立となるのである。

文久元年、英人ブラキストンが来航した。彼は商人でありながら、測量・測候・生物の学問に秀で、津軽海峡にブラキストンラインを設定し、また福士成豊は彼に教えられて、日本最初の函館測候所を設けた。また、彼の収集した鳥類標本の一部は、函館博物館に展示され、米人エドワード・エス・モールの函館付近で採集した貝類標本、同行の矢田部良吉収集の植物標本などともに、社会教育に大きく貢献した。

フランスは、国交とともに、安政六年メルメ・カシェン書記官が着任した。カシェンはある程度日本語に通じていたから、英仏和辞典を編集したり、私塾を開いて仏語教授をしたり、医師代わりもした。最初の元町の天主公会は、彼の手に成るもので、栗本範庵は、彼に日本語を教え、逆に仏語を教えられた。これが栗本の日仏外交の立役者になる素地を作った。栗本は、塩田順庵とはかり、町医の協力を得て、箱館医学所を建設し、本道の医師養成、治療の先鞭となった。函館病院医学所には著名な田沢春堂、下山仙庵、深瀬洋春らが医師として在任したが、ケブロンンの幕僚の一人スチャルド・エルドリッチが明治五年招かれて、医師養成、治療に当たり、『近世医説』を著わし、開招使から出版し、斯道発展に役立てた。

箱館奉行は、調査役格名村五八郎に命じ、文久元年から通訳養成の目的で、英語稽古所を設けた。そこで学んだもののなかから益田孝や三田佑らが輩出した。

山東一郎は、イワン・デミトリに日本語を教えながら、彼からロシア語を習得し、国内で重きをなす素因をつくった。秀才ある山東は、豪商柳田藤吉、政治家では学問兼備の岡本監輔らとはかり、東京に北門社を設立し、みづから学頭となり、かたわらと漢英辞典いわゆる山東辞典を編集した。明治三年、山東の援助で、柳田と藤田文蔵が函館に郷学校を設けた。対象は一般子弟にし、その存在意義は十分あった。英漢二語を教え、鈴木陸次を塾頭とした。これが明治四年十一月官立函館学校開設されるとともに廃止され、近代的教育への橋渡しの使命を完うした。

箱館奉行は、慶応元年遣露伝習生を派遣することにした。これは志賀浦太郎の奔走による。しかし、選ばれた七名の代表格の志賀が日露国境問題が起こって、通辞であったから出発直前はずされ、山内作左衛門、市川文吉ら六名が出発した。市川は滞露八年、帰朝して東京外国語学校ロシア語科教師となり、樺太・千島交換条約には、榎本武揚全権を授けて条約成立に貢献した。



エルドリッチ

万延元年、ロシアのマキシモヴィッチが来航し、箱館付近の植物を採集した。その成果がのちに東亜の植

物学研究で、世界的な学者になった宮部金吾の研究におおいに裨益したという。

藩校図書館としての万巻楼は、漢籍の収蔵庫であった。それより早く、一民間人の浜田利右衛門は、書籍館を設けて公開した。読書好きでは天下一品な彼は、箱館代々の船問屋で、漁場の仕込みもしていた。したがって箱館屈指の財産家であった、若冠二一歳から請負人からの決済、貸金の始末で江戸に行き、書林須原屋や古本屋文七の店から和漢書はもちろん洋書、医書に至るまで、毎年六百両ずつ買込んで、これと箱館の私宅にはこんだ。そのため天保年間には万巻の書を備えた。武田斐三郎もこの洋書を借用したという。『開物瑣言』は彼の著述である。

箱館の名医下山仙庵は、名村五八郎の私塾に学んで大成した人であるが、浜田を「胸中万巻の書あり」といわしめたのも蔵書の豊富なこととこれを世に公開し尊敬されていたからである。彼の親友勝海舟は、彼の安政五年の死去にさいし、その知遇に感激し、訃報に接したときは、生まれてこれくらい残念なことではないと嘆いたという。

利右衛門は、嘉永四年鳥取藩士西川晩翠がきた折に、大年寄松代伊兵衛とはかり、心学道場松栄館を開庭した。この心学道場は、心学の歴史上では、終末期といえるものの、その存在意義は大きかった。安政三年姫路の儒者菅野白華が箱館にきたので、これを道場に招き、孟子篇一章を講じたという。いわば記念講演であり、箱館奉行堀利熙は、これを祝して、誠終舎の額を贈った。

へと急がしいテンポで流転していったのである。

道名設定後の人脈

明治二年七月、開拓使被置、職制を定めて、八月十五日えぞ地を北海道と改めた。道名は松浦武四郎の名付けであるが、幕末から開拓使治政とその教育の橋渡しは、当時当代随一の探検家松浦に負うところ大きいものがある。彼は北海道幕明けの人物であるばかりでなく、『箱館往来』『新板蝦夷土産道中寿五六』『新板箱館道中名所寿語六』などを著わし、道民はもちろんその子弟にも親しまれ、教科書にも使用されたといわれている。探検記録の著書は『東西蝦夷地山川地理取調地図』を始め十数編を数えるが、その教育・学術に及ぼす影響は大きい。彼は津藩の儒者平松榮齋の私塾に学び、天性の雄大広遠な性格と好学精神とを合わせ、この大業を成し遂げたのである。

開拓使下教育行政の最高責任者は、いうまでもなく、黒田開拓次官であるが、その部下島義勇、岩村通俊、松本十郎、岡本監輔ら開拓判官も教育には強い経綸をもち、その部下西村貞陽らもよくこれを助けた。黒田によって助命された反乱軍の首領榎本武揚、荒井郁之助らも本道教育のために尽力した。

明治三年十二月二十四日、開拓使庁仮本陣内に仮学校を設け、官員子弟の教育を開始したが、開道後の近代教育の嚆矢であるが、それはやがて予定されている資生館への仮校舎に過ぎなかつ

誠終舎

誠終舎額

道場では浜田の淡齋如水らが多く講じた。浜田に幕末における代表的な文化人であり、社会教育の先覚者でもあった。さらに明治二年、西川晩翠に師事していた町方頭取代島剛平が心学道場明正会を設けて学を講じ、私学も開いて子弟教育をも行なった。

幕末四、五十年はあわただしい教育・学芸の変転であった。その間にあって庶民教育も次第に根をおろし、嘉永安政年間が第一期の隆盛期、慶応・明治当初が第二期の隆盛期であるが、寺小屋・私塾は箱館、福山、江差を結ぶ三角地点がその初学発生地で、他は海岸入江に限られた。

アイヌ教化は、有珠善光寺、様似等樹院、厚岸国泰寺の三官寺を尖端にすすめられてきたが、馴化はすすまなかった。そうしたなかであって道東端標津で、文久二年から慶応三年まで、南摩綱紀が会津藩代官兼普請方勘定所勤として在勤し、「孝経」をアイヌに教え、その教化をはかったという。

寺小屋・私塾は学制頒布までに一〇七校を数えるが、今後の調査でもっと増加するであろう。こうして藩士、庶民が新天地形成の一翼を担い、至極圧縮した形において、明治新政下の近代教育

た。

士族集団移民には、伊達藩が他藩に先んじて入植したが、朝廷の汚名を着せられた会津藩士は、日新館で学んだ学識をもって来道し、個人的には教育の初発に大きく貢献し、会津魂は開拓精神の根を培った。

資生館初代館長大庭恭平は、和漢学にすぐれ、書と剣をよくしたが、持前の奇士的人格から在職短かく、あとをついで会津藩士上田又作が館長になって札幌本府草創の教育を担った。上田はのち岩内に転じ、御鉢内学校の教育に名をとどろかせた。資生館より十一日早く官立函館学校が開校したが、著名な教育者を発見できない。

黒田次官の遠大な教育計画は、大略つぎの四点にしばられる。

- 一 みずから渡来して、ケブロンら幕僚を招いたこと
- 二 男女の留学生を派遣して、新天地に人を求めようとしたこと

三 アイヌ教育をし、和人と同等の扱いをすることを理想としたこと

四 普通教育を入植地域に開始しようとしたこと

などがあげられるが、なかでも札幌農学校を教育機能の中核とした。

男子留学生は、森有札駐米弁務公使の世話で、黒田が渡米のさい、山川健次郎、服部敬次郎ら三名の青年を伴ったのが開拓使最初の留学生であったが、直接本道の教育には貢献しなかった。む

しろ米国アマスト農学校費留学生から開拓使官費留学生になった橋口文蔵は、のち札幌農学校長となった。マサチューセッツ州立大学に最初に留学した湯地定基は、開拓使から根室県令となり、さらに道庁の高官として、教育の進展に貢献した。

女子留学生は、明治四年十一月、津田仙の次女津田梅ら五名がわが国最初の女子留学生として、開拓使から派遣されたが、帰朝後本道には来なかった。

開拓使仮学校は、始め東京芝罘上寺方丈跡に設けられ、明治五年三月開校した。当時開拓使庁東京出張所も増上寺山内威徳院にあり、ここを本拠に行政が行なわれた。初代校長は荒井郁之助で、教頭にはケブロンら幕僚で意見の合わなかった地質・鉱山・化学専攻のアンデルセル、それに測量のワッソン、その他邦人教師を合わせて七〇名が当たった。生徒は男子九六名、女子四五名で発足した。

しかし、入学生は年齢層の相違、語学に通じなかったこともあって校規は乱れ、一年にして黒田は開校を命じた。右学者中のにちに枢密顧問官になった元田肇、文相になった江木千之、東京女高師校長になった中川謙二郎、宗教家になった安川敬一郎、大阪市長になった池上三郎らそうそうたる人物がいたわけである。

再建された開拓使仮学校では、調所広丈を校長心得にし、やがて札幌に移り、札幌農学校創設となる。一方、仮学校に設けた女学校は、わが国三番目のもので、イ・デロイトルが最初教授に当たったが、後任にエリザベス・デニスが着任した。その点オラン

ダ人から教えを受けたわけである。

黒田は、札幌農学校設立にさいし、外人教師招へいを、吉田清成駐米公使に依頼し、ウイリアム・スミス・クラークら三名を得、以後、外人教師がつづいた。明治九年画期的な札幌農学校の設立となる。

クラークとその精神は、帰するところ学問的造詣と教育的経験をもとに力強い人生の指針を与えたもので、自由な、校則にしばられない生活をゆるしながらも、学生の自覚をうながし、そのきびしい学問・生活訓練にたえられない者は容赦なく退学を命じた。

明治十三年、第一期生が、演武場（時計台）において、わが国最初の学位授与され、目出度く卒業したが、クラークに直接指導されたのは第一期生だけで、卒業生十三名中

荒川重彦（演劇家）、田内拾六（測量）、中島信之（中年死去）

渡頼寅次郎（農業）……勸業局

伊藤一隆（水産学）……物産局

内田澁（測量技師）、佐藤勇……工業局

佐藤昌介（北大総長 農政学）、黒岩四方之進（日高名馬育

成）……学校農場

小野兼基（農業行政）、柳本通義……七飯農場

大島正健（中学校長 音韻学）……予備科教師

〔（ ）は専門、一名不祥〕

が開拓使に配置された。

第二期生は一〇名卒業した。直接クラーク教頭から指導されな



内村鑑三(右)と安部金吾(左)

が去って、佐藤昌介が校長、ついで南鷹次郎へと昭和八年まで、クラークの教え子によって経営が受け継がれたこと

かったが、クラークの教え子でペンハロー教頭のもとに、クラークの指導精神は十分受け継がれ、聖書講義・学科指導は踏襲され、雰囲気は以前と変わらなかった。その中から第一期生同様傑出した人物が輩出した。内村鑑三（宗教思想家）、新渡戸稲造（農政、植民学、一高校長、東大教授、国際連盟事務局次長）、宮部金吾（植物学、北大教授）、南鷹次郎（農学、畜産学、北大総長）、広井勇（土木工学、東大教授）、岩崎行親（英語学、七高校長）、町村金弥（酪農・農業）など多士彩々であった。

不思議な因縁か、矢内原忠雄元東大総長が日本を代表する教育者で教養人になり得たのは、神戸一中在学中鶴崎久米一校長（二期で卒業は三期）に師事し、内村鑑三、新渡戸稲造の薫陶を受けたことである。その意味で矢内原はクラークの孫弟子といえる。

クラークからペンハロー、ブルックス、ブリガムと教頭がつづくが、いずれもクラークの教え子であり、明治二十六年ブリガム

は、北大の建学精神の継承者であつたわけである。

新しい先生の誕生

「学制」の施行は、本道の初等教育開始と時を同じくするが、師匠から先生へ、往来物から翻訳教科書へ、それは本道の場合、割合スムーズに切り替えられた。「学制」に基づく新教育は、スコットの教授法を体得した人物の招へいと、その持参する教科書に依存するしか方法はなかった。明治七年東京師範学校第一期卒業生中の一人城谷成器は一年同校で手伝っていたが、その先輩者として来道し、明治八年から函館の小学教科伝習所の教師となり、ペスタロッチ主義の実物教授法は、直接本道に導入されたわけである。ウィルソンリーダー訳の「小学読本」を始め、翻訳教科書は潮のように流入し、学習形態は一変した。

小学教科伝習所開設時の教師陣は、城谷と中里方精、坂本重勝の東京師範出身者と、藩校（会津藩士——会津北学館）出身で令名のある吉田元利の四名であった。その後、逐次東京師範卒業生を迎えるが、多くは本道にとどまらず、また新しい卒業生の繰り返しであった。僅かに残った卒業生と内地府県で著名な教師になって、本道に迎えられた代表者によって、本道の初等教育界を支えた。前者では村岡素一郎（明治十一年東京師範卒）、後者では長尾舎（明治八年東京師範卒）らは、その例としてあげられよう。

一方、札幌でも明治九年公立第一小学校（資生館の後身）に教

員速成科を置いて、東京師範第二期生橋本安恵、大滝修三を招き、また、小樽の量徳小学校（小樽最初の代表校）に教員速成科を置いて、大阪師範卒業生の浅野源蔵を招き、新教育を指導した。それに函館の小学教科伝習所で講習を受けた金三穂らを加えて、新しい教師が養成された。

その間、依然として寺子屋・私塾は衰えたとはいえ存続し、あるいは寺子屋式教育機関に姿容して師匠の名残りをとどめた。明治九年の函館の手習師匠一覽を見ると、若山保平、佐々木作左衛門、十津川五山、富原九一郎ら一四名の名を連ね、御家流を始め、大橋流、山民流、広用流、長尾流、溝口流、青連院流などそれぞれの流派の伝授に力をいたした。

若山保平の若山堂は、天保五年若山太蔵の開いた私塾で、若山藤兵衛を経て三代目に当たり、明治十四年若山学校と改名し、明治四十一年まで正則の小学校教育を続け、公立小学校に遜色がなかった。佐々木作左衛門の藤村堂、のちの藤村学校の二校が明治以前からの私塾で、私立小学校として存続した稀有な例である。

小学教科伝習所は、明治十三年函館師範学校と改称し、村岡素一郎を監督（校長）に経営したが、十六年函館県師範学校になってから、同窓後輩の素木岫雲に校長を譲って、ひとまず本道を去り、道庁時代になり根室花咲小学校長として返り咲き、本道用小学読本の編集にたずさわり、その功績は後世にも賞讃された。函館師範学校になってから、やがて本道教育界を背負って立つ人物が輩出し、女子教育の先覚者で、初代札幌高女校長としてその基

礎づくりをした小林到、函館弥生小学校長となり、全道小学校長の代表と目され、ペスタロッチの再来といわれた佐藤市弥らがある。

函館師範学校教師陣には、吉田元利らはさておき、英国領事ユースデンの夫人が、洋式洗濯法を教授したことがあげられる。桜井か子は、桜井女学校の創設者で、明治六年桜井昭恵と結婚し、開拓使管理の宝永丸に乗船していた夫を助けていたが、海軍士官の昭恵は、明治十四年辞して赤心社委員として函館に赴くことになり、ちか子は十四年七月二十二日東京で採用されて、函館師範の助教諭となった。同校に女生徒が一〇名官費で採用されていたから、原かねの裁縫教員につぐ、二人目の女教師となった。おそらく英語を教授したものと思われる。ついで神谷みちら女教師が任用されたが、ちか子は二〇円という高額で任用された。しかし十七年七月、夫が札幌に転じたため、函館県師範を辞し、札幌県師範で再び教諭になった。在道三年三県廃止のころに退道し、大阪に居を移し、一致英和女学校を創立し、渡米帰朝後も女子教育に尽力したのである。

また、明治十六年三月、新保盤次が函館師範の教諭をしたことも見のがせない。ちか子が在職中、かつて東京女子師範附属幼稚園で豊田英雄のもとで幼児教育に名をあげた武藤やちが同校に赴任した。武藤は明治十四年皇后の台覧授業をしたほどの力柄もち、本道の幼稚園教育の先覚者として活躍した。同校が明治十九年廃止になるに及び、素木校長を園長に、保母として幼児教育を

みずから行ない、再三の火災にあいながらも、素木園長転任後、武藤は園長として経営し、大正初期までこの教育に当たり、その間函館市内の教師には音楽講習会の講師をしたり、初等教育の指導者として、あるいはフレイベル流の幼稚園教育の啓発者としてその功績は大きい。

士族移住と教師たち

明治二年六月、版籍奉還を許し、ここに失祿武士救済は新政府の解決しなければならぬ重大な責任を負わされた。北雲必ずしも暗れやらず、北門の鎖鑰として士族集団の本道移住を開始されたのである。つぎにその藩名、藩主または開拓責任者、時期、移住地を列記する。

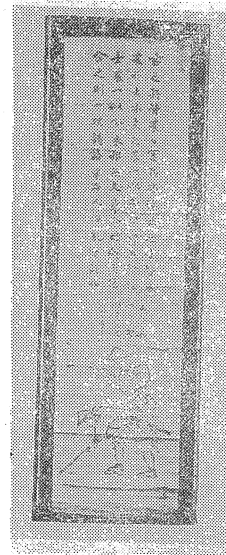
- 1 〔亘理藩〕 伊達邦成・三年・伊達紋範、2 〔岩出山藩〕 伊達邦道・四年・当別、3 〔角田藩〕 石川邦光・三年・室蘭郡、4 〔白石藩〕 片倉邦憲・四年・幌別郡・白石・手稲、5 〔会津藩〕 宗川熊四郎・四年・余市、6 〔徳島藩〕 〔洲本城〕 稲田邦植・四年・静内、7 〔名古屋藩〕 徳川慶勝・十一年・八雲、8 〔山口藩〕 毛利元徳・十三年・大江、9 〔佐賀藩〕 鍋島道大・十四年・当別、10 〔福岡藩〕 大野東・十五年・篠路、11 〔金沢藩〕 前田利嗣・十六年・前田・正部・長万部、12 〔和歌山藩〕 岩橋徹輔・十二年・岩内・手稲、13 〔三田藩〕 鈴木清・十三年・西舎・秋伏、14 〔徳島藩〕 仁木竹吉・

十六年・仁木

そのほか結社集團の開進社(12)、興産社(滝本五郎 徳島県)、赤心社(13)、晩成社(依田勉三 静岡県)、起業社(11)、北越殖民社(関矢藤左衛門 石川県)、必成社(西田天香 新潟県)、興復社(二宮尊親 福島県)、北光社(沢本楠弥 高知県)とか、屯田集團、團結集團などが続々つづいた。

これらの士族移民は藩主みづから藩士一族を引き連れた1、2、3、5、6などと、家老に引率指揮させ一族を引き連れた4、7、8、11などに大別されるが、いずれも藩主擁護の主従関係を軸にしている点共通し、その成否は家老の手腕と教育にたいする熱意によってきまるといっても過言ではない。それは生死を賭けたきびしい自然との闘いの中から生まれる尊い開拓者精神以外の何物でもない。ここにその二、三をあげる。

当別と伊達とは兄弟直と弟邦成の關係、そのもとに両青年吾妻謙と田村顯允という傑出した家老がおり、采配を振った。当別には上席家老鮎田如牛が相伴した。如牛は北条流の兵学を学び、漢



兵農一理の書

学において一門に及ぶ者なく、よく藩主を助け、藩の團結のため邑則四十九条を定め、男女五歳から学校に入れ教育することとし、みづから自宅に鮎田塾を設けて読書・習字・算術を教えた。開校日に賦した一詩に「今日開塾喜新云々」とあるように、その意気たるや壮たるものがある。鮎田家は小隅、熊年、懋夫の四代にわたり戸長、校長としてその人望は現在もさらに衰えを見せない。

白石と手稲とは片倉藩の出光移住の兄弟分領地、片倉邦憲の家老佐藤孝郷は白石に家老三木勉は手稲に引率して移住した。佐藤の添役杉山順は筆学教師の肩書で私塾の教師として、教育の全責任を負い、渡辺丹助はこれを助け次代発展の素地を作った。佐藤は白石戸長さらに實生館の漢学助教、改称の札幌学校の助教授兼舎監となり、衆望を一身に集め、明治十八年大蔵省に転じるため本道を去った。白石には明治五年三月、移住して三か月目に村学舎を設け、杉山順が教師となり、六年三月善俗堂と改称し藩精神を柱に、村づくりと子弟教育に一身を捧げ、善俗堂の定めを教育方針に、師弟、長幼の序などをきびしく示した。

松本十郎判官は、手稲、白石の教育に関心をもち、来訪しては激励した。明治七年一月七日、佐藤は松本と村内を廻わり、その拓殖のすすみ方に意を強くし、村民を善俗堂に集めて兵農一理の書を贈って激励した。すなわち

古之兵皆農 農富メバ 兵亦強 古之士皆農 農朴士亦良(云云)

がそれである。この書は下に精農の絵を描いたもので、手稲の時習館にも同じものを贈った(絵は違ふ)。佐藤も松本に感激し、村民の志気を鼓舞した。

三木勉は佐藤とともに取締となり、手稲に入地したが、伊藤信正、三木の弟菅野格は旧臣として三木を助けた。いわゆる己を捨て仁を為した人であった。

明治四年入地した三木は、翌年時習館を創設し、子弟の教育をみづから担当した。茅屋建築には湯村生幸、山岸惟孝が協力した。教科目は読書、習字、筆算で、特に国史を重視し道徳の大本を熱烈に説いた。また筆算を行なったことは珠算万能の時期に、進歩的な考えを示したものと思われる。三木は取締兼務では、本務がまぎらわしいとして、伊藤信正に取締を譲り、専心教育にたずさわった。当時三木は三四歳、剣道も達人、学徳、気骨三拍子揃った円熟した人物であったから、子弟に多くの感銘を与えたのは当然で、明治十一年上手稲教育所となった。

稲田邦植は洲本城代、蜂須賀藩主の家老職として、代々淡路島を領していた。版籍奉還で稲田家は一万四五〇〇石から千石へ、家臣は四等士族より低い郷付銃卒とされ、生計は立たなかった。しかも分藩運動、流血の稲田騒動が起り、一六歳の邦植は静内郡と色丹島の支配を命ぜられ、調査の結果静内移住地ときめた。曾我部元速、内藤勇平、瀬川芳蔵ら重臣と協議し、一三七戸、五四六人、それに先遣四七人が静内に移住し、雑穀と藍・麻の生産を始めた。明治四年入地の秋から、順生寺に仮教室を設け、稲田

私塾益習館と名づけ、さらに英語教師まで招いて教授したので別に英学校とも呼ばれた。こうして新天地に菅野の基礎が固まるのを見届けて、邦植は郷里に帰った。その間二十五年涙ぐましい移住者の苦勞の連続であった。

尾張藩主徳川慶勝といえ、御三家のひとつ尾張支藩高須、松平義建の次男として生まれ、名君の誉高かった。薩長が日の当たる場所なら尾張は日蔭者、それが藩内思想を支配し横溢した。その首領と見られる吉田知行は角田弘業、片桐助作とともに、本道の調査を始め、山越内閣所のあったところ、遊樂部を選定、慶勝は資金を出し、開拓使の許可を得て、八雲開墾は発祥した。第一回移住者一〇戸、ほかに独身者一〇名で開墾を始め、新技術導入に着目して、独身青年四名を七重勸業試験場に現術生として派遣、外人教師の指導を受けて、いち早く洋式農法をとり入れた。さらに函館支庁から製鋼教師を雇い管農を開始するかわら、教育を開始した。また士気を高めるため松探会を設けたり、農事改良を論ずる攻玉会を設けたり、青年党を結成して新知識と技術の修得に当たり、一二歳から一六歳の少年を集めて幼年舎を作り、長じて青年会と改称した。学校教育と社会教育とを一体にして開拓者の養成に当たり、酪農八雲は次第に作られていったのである。

人物を中心とした

青森県教育郷土史

—加藤源三の全村教育にみる

明治の教育者像—



県花・・・リンゴの花

男 武 地 米 苜

はじめに

青森県にも教育者といわれる人物は数多いが、なかでも、教える子はもとより、地域住民から今なお慈父のように敬慕されている教育者といえば、ここに紹介する「加藤源三」をおいてないだろう。青森県は藩政時代から津軽と南部に大きく二分され、人びとの気質も風土も今日においてもなお相当な違いをみせているのであるが、津軽、南部の別なく、「彼こそ教育者の鏡」と異口同音に評されているのは彼だけといってよい。

加藤源三は、慶応三年三月二十四日、津軽北方新田の穀倉地帯、中里（現在の北津軽郡中里町）の豪家、加藤定四郎次男として生まれ、明治維新の新教育を受けて師範学校を首席で卒業し、南部の一小学校に奉職したまま生涯をめとることもなく、文字どおり地方の教育に一生をささげたという、津軽人の一徹さを代表するような人物であった。

生家は地主として商業を兼ね、代々庄屋、代官手代などをした郷土であったが、むしろ五代にわたる初等教育の従事者ということで名が知られている一族である。もともと、中里にも寺子屋はあったのであるが、寺子屋にも行けない者を主として教育していたものである。彼の家には、明治八年に中里小学校が設置されるまで、男児二十四、五名、女児五、六名の手習子どもが常時さしていたという。

加藤源三は、青森師範学校卒業後、戊辰戦争に敗れて荒廃の極に達した南部三郡（現在の上北、下北、三戸の各郡、いわゆる南

部地方)の中心に位置する藤坂村相坂小学校(現在は十和田市の一部)に赴任した。明治十八年十二月のことである。書を友として暮らすことができれば、自分には津軽も南部もないと、このへき遠の地に足を踏み入れたのであった。当時のことを回顧して、彼は後年次のように書いている。

——自分が相坂(藤坂村大字相坂)に来るには、馬を七たび継がせ、五泊しなければならなかった。生徒には生気が無かった。ただ気に入ったのは、村には商店が無く純農村で、水の清いことであった。

十二月二十六日、午後一時相坂小学校に着任した。学校に入ろうとしたが、人が居ない様に静かであった。玄関の戸を開けば入口の右手一間半ばかりの所に在る大きな炉に、三十人ばかり生徒があたってゐて、一斉に立って敬礼した。男ばかりで女がなかった。旧い民家を改造した古校舎だが掃除がよく行届いてゐた。先生はと聞けば、お昼に帰へられたといふ。

三十分過ぎて先生は未だ来ない。生徒二人湯を飲み茶碗を取りに立った。獨って転げ落し、一つを毀はした。二人は色を失ひ他も愕然とした。二人は恐る恐る自分の所に詫びに来た。自分は、何も心配が無い、此の床の上の机の上に茶碗を上げておくのだから、皆が元気が有れば毀はれるのは当り前だと一同に向つて話して居た所に先生が来られた。——(加藤源三遺稿「教育回顧録」加藤先生報恩会刊行から)

藤坂の子どもたちとの最初の出会ひであった。彼を迎えた村人の目は親愛にみちていた。彼がまだ十八歳の若年教師であるにも

かわらず、新知識として敬意を表してくれた村人の心根にひかれて、ついに五十九年間、宿がえをすることもなく、故郷に帰ることもなく、この地の土となったのである。小学校教育、社会教育はいうに及ばず、村政に、経済に、産業振興に、信用組合の結成に、軍人団に、消防団に、念仏講に、婦人会に、村内のことで一つとして彼のあずからないものはなかった。

青森県誕生の前後

青森県を評する他国人は、異口同音に青森県は貧乏で寒くて、政争の激しいところという。県民性についても、後進性、追隨性が強く、猜疑心があり、閉鎖的で慎重、頑強だという。このような批評が本県の特質の一端を物語っていることはたしかなようである。

政治的にみると、津軽地方は天正十八年から明治維新まで二百年間の津軽氏による治政があり、南部地方は、建久三年以来六百八十年間の南部氏の治政が続いているが、反面、被治者からみれば、津軽地方には阿部比羅夫、坂上田村麻呂の征討以来、安倍氏、平泉の敗者、安東、曾我、葛西、北畠の敗者、九戸残党の流入者等があり、南部地方にも小川原記の瀝世から安倍氏、平泉の敗者、鎌倉の敗者、九戸残党すなわち七戸櫛引の敗者、明治維新の南部氏、斗南藩の流浪敗残者(会津藩)があるといふように、青森県は苦難の人びとの歴史によってつづられていたのである。

維新から今日の青森県ができるまで、県名も広さも、またずいぶん複雑に変わった。

津軽地方は弘前藩と黒石藩が藩置県でそのまま県になったが、維新で敗者となった南部地方は、二十万石を没収されて白石(宮城県)に転封、後ふたたび盛岡(岩手県)へ復帰したものの、北部、三戸郡、二戸郡は分断されて藩と県が置かれた。この間に、七戸県、北奥県、九戸県、八戸県、三戸県、斗南県と転々し、ようやく明治四年九月二十三日、館県、七戸県、八戸県、斗南県と黒石を弘前県に合併して青森県と称し、県庁を青森に置くことになった。後に館県を開拓使に、九戸、二戸地方を盛岡に移管され、本県の地図が今の形に成立したのは明治九年七月以降である。

このようにして、青森県の誕生は維新の懲罰的行政の区域編成に始まり、旧南部二十万石から北部の荒地のみを切り離して津軽に隸属させた形をとっているため、その後も長く津軽、南部の対立、あるいは政争の続く遠因ともなっているのである。一般行政と同様に、明治の教育もまた、ことに南部地方にとっては強制的に威圧的に進められたといえよう。それゆえに、加藤源三が津軽の人間でありながら南部の子弟の教育に一生をかけたことを、土地の人びとはことさらに称揚するのである。

明治初年の青森県初等教育

明治期の青森県教育については、前野喜代治氏(国士館大学教授、前・弘前大学教授)の調査研究がくわしいので、それによつて近代学校発足当時の青森県を紹介しよう。

青森県には学制頒布以前に「小学校」と名づけた児童教育機関

を発見することはできないが、これにかわる「寺子屋」は、明治以後も元年に四校、二年に四校、三年に六校、四年に三校、五年に一校の新規開業をみるなどきわめて盛んなものがあつた。消長不明のものも含めると、累計六百八十七校、明治元年の時点で二百二十校の存在をみる事ができるのであるが、学制頒布の明治五年には百二十四に減少し、さらに県から私塾廃止の布告が出された同六年には五十四に激減、その後は七年三十一、八年十八、九年十二、十年七校と、近代学校制度の発展に伴って寺子屋はその姿を消すことになる。

青森県で最初の公立小学校は、明治五年八月十五日、学制頒布の十二日後に誕生した上北郡七戸小学校であった。これは村内の寺子屋を吸収して教員数五名、児童数二百名で発足したものである。翌六年には下北郡大畑小学校をはじめ二十八校、当時の管轄区域であつた岩手県二戸郡を加えて三十一校の開校をみている。

ただ、県が文部省に報告したところによると公立小学校二十四校となっているから、残る七校は県の公認にまで至らなかったものである。また加藤源三が生涯をささげた上北郡相坂小学校は明治七年十二月の発足、彼が入学した北津軽郡中里小学校は同八年九月の発足である。

明治五年の学制頒布を境に、青森県においても小学校の設置に全力をつくし、同七年には三十四校、同八年には二十五校、同九年には百十九校、同十年には八十九校と新設小学校はしだいに増加して、この数年の間に県下全小学校の約半数が開校した。これと併行して、明治九年十一月には青森師範学校の開校もみ、学制

頒布後の小学校教育を支えてきた元寺子屋師匠群と年若い有識士族群にかわる、新時代にふさわしい教育者の養成が始まるのである。加藤源三もその一人であった。

(前野著「青森県教育史・続」による)

加藤源三の学歴

先にもふれたように、加藤家は教育者一族であった。彼の家は寛政年間に分家して一家を立てたが、第一代の加藤久右エ門は文学趣味を有し、書を能くしたので、村の寺子屋とは別に親類や出入りの者に依頼されて読み書き算を教えた。二代加藤久四郎も読書趣味を有し、村の子弟を教えた。三代加藤定四郎すなわち彼の父も読書趣味を有し、多忙をきわめながらも村の子弟の教育にあたった。したがって、彼は生まれながらにして教育者たるべき家庭環境に育ったといえよう。



加 藤 源 三

明治八年九月に中里小学校が開校されると兄直四郎とともに入学。明治五年に学制が頒布されたのに、学校ができたのは八年であったため、子どもたちは待ちに待って、一時に百余名も入学したという。生徒は寺子屋にはいっていた者、加藤家で手習いをしてきた者などで、受持ちの教師は会津藩士であった。

小学校時代の彼は、成績抜群であった。もっとも、自分の家へ手習いに来ていた子どもたちにまじって、五歳ごろから片仮名、平仮名、数え方、天神七代地神五代天皇国忌し、実語教、童子教、百人一首等と教えられていたのだから、当然の成績抜群であったろう。明治十一年に金木(現在の北津軽郡金木町)の雲祥寺で行なわれた金木、中里、武田、嘉瀬、喜良市の各小学校合同の学力試験では、「学業抜群ニ付云々」という賞状を授与され、同十三年に五所川原(現在の五所川原市)で行なわれた郡下の集合試験でも「学業優等ニ付云々」という賞状を授与されている。学事年報によれば、この時の集合試験参加者は北津軽郡下で八十四校、三千二百二十三名で、及第率七六・二九であったという。十四年十月には小学校を卒業しないまま五所川原初等中学校に入学し、中学二年で父の命により師範学校中等科に入学(明治十六年)、十八年に卒業して赴任したのが相坂小学校である。彼は三代目の訓導であった。

家族主義教育を貫く誠愛熱

加藤源三の教育は、彼の言葉を借りていうと「家族主義の教育」であった。「私は児童を家族と思ふてゐるから、善い児童は愛す

るし、悪い児童は是非善くする様に力め、又出来る児童を愛するし、出来ない児童を是非出来る様に力め」という彼の言葉がそれを示している。自費をもって傷病児童の治療にあたったり、放課後熱心に勉強している生徒には煎餅を与えることもしばしばであった。このような家族主義的な教育をするには、相坂はかっこうの部落であったようである。戸数三百戸のうち、二百五十戸までは苦米地、栗山苦米地、小山田苦米地、竹ヶ原苦米地、亀田、江渡、竹ヶ原の七家で占められているのである。生徒の戸籍簿を座右において大いに活用したというが、具体的な利用のしかたは明らかでない。しかし、「私は小学校教育を経営するに、敬神、崇祖を精神とし、読書を生命とし、家族主義をもって生活した」という言葉は、彼の教育の特徴を端的に物語っているように思う。

また、「生徒には前途あるを忘れるな」という言葉が示すように、子どもたちの可能性を信じて、その開発に務めたことも忘れられない。この村からは内外に活躍する多くの人物が出た。村長となつて日本一の村、校長となつて日本一の学校、農会長となつて日本一の農会、産業組合長となつて日本一の産業組合、その他各種団体長となつて日本一たらしめたいという彼の願ひにこたえた人物は枚挙にいとまがない。しかし、彼は単なる立身出世主義者ではなかった。なんらの抱負なくして村長となり、校長となろうとするのを厳にいましめる。彼はこのような人物を村の発展を阻害する「道徳的罪人」だといいきる。各自にふさわしい道を選んで、実力を養成することが第一だと人にもいい、また自らも実行した人である。

彼は生涯を通じて自己修養にきびしい人であった。生徒の実力養成には教員の実力がなによりもたいせつであるとして、献身的な努力をしたため、明治二十七年、八年ごろには、児童生徒のみならず、村民の信望を一身に集めるようになった。民家を改造したこれまでの校舎から現在地への移転新築の話が出たときには、村費をいっさい使わず、千二百五十円の建築費すべてを村民の寄付金でまかなっているが、これは村民の教育に対する熱意もさることながら、募金に歩いた彼への村民の期待がこめられていたからではなからうか。

このころから藤坂の教育は県下に広く知られるようになってきた。視察者も多くなつてきた。木村、永田、豊島、大賀、福永、大竹、内海の各視学官も続々訪れ、表面よりも内容の充実をという彼の教育方針の実態をみて、真の小学校教育は藤坂においてみることができると絶賛し、川村、道岡の二知事をして、小学校教育の実際は藤坂においてみるべきだと語りしめていることから、彼の教育がすぐれたものであったことがうかがえよう。

読書活動で村民開発

彼の教育活動を支えていたものは、書籍であった。記紀万葉から四書五経、仏典にいたるまで、あるいはブルタック英雄伝からギリシア・ローマの古典、カント、スペンサー、ペスタロッツ、ヘルバルトなど、実に幅広いものがある。明治十九年から購読した新聞は東京日々、日本など、雑誌は東洋学芸雑誌、日本人、国民の友など七、八種、講義録は実業の日本社発行の農業講義録な

どとなっている。当時は藤坂に新聞をとっている家は一軒もなし、雑誌を見ている人は一人もなし、新刊の図書を取り寄せている人は彼の前任者ただ一人であったというから、いかに彼が読書家であったかが知られよう。

彼の影響をうけて読書に興味をもつ青年男女も多かったらしく、彼は自分の蔵書で図書館をつくり、自ら館長と称して貸出しを行なっている。また明治二十三年には「以文会」という読書団体を組織して、積極的に青年の読書趣味の養成に努めている。村内に読書人口がふえるにしたがって、かねてから産業と教育は国の大本という彼の持論を具体化するために、読書趣味の人びとを集めて「学友会」を組織した。これはお互いに農業の知識を吸収し、共同、団結の精神を養成するために討論し、あるいは演説会、座談会を開こうというものであった。明治三十一年のことである。またこの年には三本木（現在の十和田市）に県立農学校が設立されると、彼は校長、教諭をしはば自分の学校に招いて講演を依頼している。

大正十四年に彼が藤坂小学校（明治二十二年の市町村制施行に伴って、隣村の藤島小学校を相坂小学校に合併し、藤坂小学校となる。）を退職すると、教え子たちはこれを記念して各自が図書を持ち寄り、小学校の中に「加藤図書館」をつくった。これは当時としては郡下で二番目の規模をもつものであったという。後年、これが母体となって「紀元二千六百年記念文庫」へと発展し、村内に独立の図書館を建設する気運が起こったが、戦争、敗戦と混乱が続いたため、集められた資金もそのまま、ついに実現できなかった。

徳化校の内外に及ぶ

彼は大正三年一月二十六日に、「明治三十八年文部省令第十一号、小学校教育成績状規程第一条」により選奨され、硬箱を下賜されている。また、文部大臣の表彰を受けたことから、二月十一日付で青森県からも金百五十円を給与された。そのときの「成績大要」には、およそ次のようなことが記されている。

「明治十八年十月上北郡相坂小学校訓導に任ぜられ全二十二年十月藤島尋常小学校を合併し現校名に及び全三十一年五月全校に高等科を併置し引続き全校の訓導兼校長となり以て今日に至る其勤続年数二十八年に達せり資性温良にして清静闊達を求

めず名利に奔らず至誠一貫其の職務に精励し児童に対する懇切にして父兄に接する又丁寧なり事毎に躬行実践以て他に臨む故に人の之に服せざるなく徳化校の内外に及ぶ

明治四十三年一月八日黨陶を受けし子弟千有余人相計り勤続二十五年祝賀式を挙行せり其の際謝恩として金百二十四円外に日本百科辞典一部（代五十円）を贈る景慕せらるる以て知るべきなり

現時在校の職員児童は皆何れも教を受けたる父兄の子孫にして校内和氣藹然たり就て之を見れば一家団樂の観あり従て教授訓育の徹底する他校に見るべからざるものあり十許年前児童の教育は卒業後に於ける修養を監督指導するに非ざれば其の効果の完きを期するを得ずとなし意を社会教育に致し其の成績頗る顯著なり其の施設経営せる事項の概要を挙げれば左の如し

- 一、教育の方針確立と講堂訓話
- 一、児童作業の規定及表彰規定の制定
- 一、就学出席の奨励と同窓会の指導
- 一、実業思想の養成と勸業に関する諸施設
- 一、勤儉貯蓄に関する諸施設と青年夜学及娯楽の施設
- 一、教員互助に関する規定と文庫設立の準備

農業と教育は国の大本

彼が大正十四年に藤坂小学校を退職するとかつての教え子の一人、苦米地義三（前出）が五万円の資金を寄せて彼に育英事業を起こさせた。今上天皇陛下の御即位の大典を奉祝し、児童生徒の

かった。筆者も昭和七年から十一年まで「加藤図書館」の管理を仰せつかったが、村ではこの図書館係に村費で特別手当を出すなどしてくれた。この村から出た人物は、苦米地義三（元・民主党幹事長、運輸大臣）も苦米地四樓（軍人）も、読書によって人物を大ならしめたというのが、村民の実感なのである。したがって、図書館は農村文化の殿堂であるという彼の考え方に異議を唱える村人は一人もいないのである。

彼の書籍にまつわるエピソードも多い。三本木町（現在の十和田市の中心部）全部に配達される書籍よりも、加藤先生一人の書籍がはるかに多いというので、郵便配達夫がしばしばこぼしていたとか、岩波文庫の既刊分をそろえるのに、青森市の今泉書店が店員を三度も東京へ派遣したなどと、今なお語り草となっている。

善行を奨励することが目的であった。「昭和謝恩会」である。県出身の一戸兵衛大將を顧問に迎えて彼は常務理事となり、二人の書記を置いて準備を整え、昭和三年一月十日に発足した。昭和十三年には資金を十万円に増額し、晩年までこの事業の事務処理に当たった。この間に表彰と奨励を受けた者延五百九名、育英資金貸与者延五十二名となっている。試みに当時の藤坂村の予算をみると、昭和四年が二万六千五百九十四円、昭和十三年が三万一千三百九十五円であるから、一村の育英団体としてはいかに大きな規模のものであったかが知られよう。

ところで、彼が実業の日本社発行の講義録で最新の農業の知識を得ていたことは先にもふれたが、この地方の農業振興は彼が明治十八年に赴任と同時に思いついたことだといわれる。藤坂村は上北郡下では人口の割に水田が一番多いところであるが、津軽の穀倉地帯に比べると、この地方の稲作はあまりにもみじめなものであった。上田で反当たり四俵、中田で二俵半、冷害は五年に三回の割で訪れる。人びとはあわ、ひえ、そばを常食とし、津軽出身の彼に「米飯では腹がへって困らないでしょうか。」と、まじめに問う者もあったという。

明治三十一年に三本木農学校が設立されてからは、この学校を最大限に活用して農民の啓蒙に努めている。四十年には小学校卒業後の青少年を対象に、農業の研修と実践をかねた「夜学会」を組織し、農業はおろそかにできないものであることを覚悟せしめたという。この夜学会は毎夜開かれ、出席者は必ず縄を一把握参することにしたため、薬工品に対する関心も高まり、近隣に「相

坂の札つき繩」として好評を博すようになった。またこの年には自ら中心となって青年団をつくり、県立農事試験場長を招いて農事指導を受けたりしている。彼に招かれて訪れる講師はいずれも、藤坂の農民は程度が高いと舌を巻くほどであったが、これは彼の農民教育、全村教育の成果といえよう。

同じく四十年には、彼の首唱によって信用組合（現在の藤坂農協）を設立し、農民の組織化をはかっている。これは上北郡下における最初の信用組合であった。この信用組合（農協）も今日では米の販売取り扱い七万俵、農産物取り扱い五億七千万円、購買額一億八千万円と、県下有数の優良農協となっている。

この地方の冷害は慢性的なものであるが、なかでも明治三十五年、大正二年、昭和六年の大凶作は、この地方の農民を完全に打ちのめしてしまった。彼は、この冷害を克服するためには第一に品種改良、第二に栽培方法のくふう以外にないとして、耐冷品種を求めて津軽方面、秋田、岩手方面へと足をのびしている。北海道旭川の松岡農場で温床苗代に成功したと聞いてさっそく訪れ、帰ると報告座談会を開いてその結果を農民に普及している。これが、この地方で温床苗代に成功した最初となっている。

また昭和八年からは自らも農場経営にのりだした。この農場は苦米地義三が提供したものである。日ごろの理想を自らの手で実現すべく、果樹、大麦、小麦、大豆、小豆、あわ、ひえ、そば、とうもろこし、なたね、ばれいしょの栽培を試み、小麦は反当たり六俵、大豆は六俵、なたねは六俵、とうもろこしは十俵、ひえは十俵、ばれいしょは五十俵という成績をあげている。この地方

しかし、明治七年の半事年報によると、教員総数二百六十九名中、有資格者は三名のみであったというから、教員組織は急速度に充実していったことがうかがえる。

ところで、これら明治の小学校教員は、どのような気質をもっていたのであろうか。

明治初期の教員は、元寺子屋師匠や食禄を失った有識士族が多かったのであるが、彼らは必ずしも教職を生涯の職場として定着してはくれなかった。志ある若年士族教師にとって教職は政界あるいは官界へと雄飛するための足がかりにすぎなかった。したがって在職年数も短く、ある学校などは三十人の教師中、一年未満が六七％、五年以上勤続する者は一人もいなかったという調査結果も出ているほどである。

また、彼らは確かに有識階級ではあったが、近代小学校が求める教育方法など、まったく知るはずもなかった。中里小学校開校当時の教師について、加藤源三は次のように記している。明治初期の教師像の一端を知ることができるように思う。

——中里小学校の先生は笠尾先生で資格が無く、漢学の素養あるのみで、算術は整数の四則が出来る位に過ぎないが、感情が熱烈な人で寒中猶頭より湯氣を立てて教へらるる人であった。先生の傍に居れば人が小さくなる感じがしたが、生徒が好く出来た。勤め的人であった。

隣校の小野先生も資格が無く、漢学の素養あるのみであったが、意志が鞏固で、飯令大山が後に崩れ大海が前にわいても動ずることが無い様に見えた人であった。先生の傍に居れば人が

では平均反当たり六俵の稲作よりも、畑作の方がはるかに確実な収入をあげたために、水田から畑作に転換する者も少なくなかったようである。しかし彼は米を常食とするわが国では、損得をぬきにして稲作を守らなければならないとして、この地方に冷害試験地の必要性を説き、昭和十年には本県唯一の農林省冷害試験場（現在の青森県農業試験場藤坂支場）が藤坂村に生まれた。この間にも九年、十年、十六年と冷害は続いている。昭和十六年にはこの試験地から耐冷品種藤坂一号が誕生し、続いて二号、三号、四号と生まれたが、藤坂の名を全国にとどろかせて今なお記憶に新しい「藤坂五号」が完成したのは、彼の没（昭和十八年）後の昭和二十三年であった。

明治の教員気質

明治五年の学制頒布を契機に、本県においても各町村に多数の小学校が誕生したが、これを担当する教員の養成は、本県の場合明治九年十一月からであり、第一回の師範学校入学者、本校（青森）五十六名、分校（弘前）三十名が卒業し、「本科免許状」を得て「訓導」として就職するようになったのは十一年秋であるから、その間を支えてきた教師群は元寺子屋師匠、有識士族あるいは医師、神官、僧侶たちであった。師範学校卒業者が出はじめた後においても、激増する新設学校に教員養成は追いつけず、明治四十五年度においてもなお二千三百二十三名の教員中、正教員一千四百三十三名に対して代用教員は五百八十二名というように、本県の小学校教育は長く無資格教員におうところが大きいのである。

伸びれない感じがした。静め的人であった。

笠尾先生の留守に補欠をされた松田先生は無論資格が無いし、又長くやる人でも無いが、温厚な人でさっぱりした弁舌のさはやかな人であった。此の人に接すればのびのびして大きくなる様な気がする平和な人であった。歌も読む、句も作る、詩も吟ずる、剣舞もやる、和学は勿論、四書五経も教へた。外に教員は入り代り数人入って揃はないが、何れも熱心であったから生徒は出来た。

明治十年代以降、師範学校卒業生が教壇の第一戦に参加するようになると、小学校教育は世間的名利にとらわれることなく、ひたすら「忠良ナル臣民ノ育成」に誇りと責任をもつ天職型の教師にとつかわられるようになる。加藤源三もまさにその一人であった。

彼は四十一年間の在職中、三十七年間は無遅刻、無欠勤、早退もせず、県外視察などで学校を離れることを極度にきらい、夜となく昼となく子どもたちと接する生活を送ってきたのである。郡視学などは彼の実績を高く評価して大規模校への転任をしきりにすすめるのであるが、一度も応じなかった。

児童は学校にいて先生と学校生活を送り、家に帰って親たちと家庭生活をするけれども、学校にもおられず、家庭も親たちが留守にしがちだとすれば、だれが子どもをみてくれるのか。学校はできるだけ休みを少なくし、在校時間を長くして家庭教育の不備を補い、教化、感化、徳化をはかることが必要だというのが彼の持論であった。子どもたちの中には、「おら方の学校ばかり休みが少

ない」「どこへも連れて行かない」「朝から晩まで勉強させる」など不平をいう者もあったようだが、正宗の名刀も鍛えなければ利れないとして、彼は耳をかさなかった。その成果は当然のように現われて、中学校に志願すれば全部合格、師範学校には一度に十名もはいれる、農学校も高等女学校も同様であったから、親たちの信頼は絶対で、生徒が帰省すると、まず彼の所へあいさつしてからでないと家に入れないほどであった。

彼が退職すると、この学校も校長の交替が激しくなり、大正十四年から昭和十八年までに七人の校長が代わった。彼の在職中は誠、愛、熱の精神を「正直己を持ち、親切人を待ち、勤勉事に当る」という三か条に盛り込んで校訓とし、親子三代にわたる藤坂の人びとを教育してきたのであるが、彼の後任者はこれを「正直、親切、勤勉」に改め、さらに「礼儀」を加えたことを、生氣のない徳目に改め、藤坂の人びとを貫く「表面よりも内容の充実を」という精神が稀薄になったと、ひどく悲しむのである。

彼が生涯教師のあり方をきびしく追求し、自らも忠実にその信ずるところを歩んできたのは、祖母の感化によるものではないかと思われる。彼が中里小学校に入学の際、祖母は、「小学校は大そうよいけれども、困ることは生徒は先生を選ぶことは出来ないし、先生は生徒を選ぶことが出来ないことだ」といいきかせたのであった。子どもたちにとって師を選ぶことができないとすれば、教師はどうしなければならないのか、「誠と愛と熱を信念として生徒に臨んだ」彼の生き方が、すなわちその解答ではなかったろうか。

(参考資料)

- ・前野喜代治著「青森県教育史・続」青森県文化財保護協会刊
- ・前野喜代治著「明治期の初等教育の研究——特に青森県を中心として——」成文堂刊
- ・加藤源三遺稿「教育回顧録」加藤先生報恩会刊

(元小学校長)

次号目次

わが国の教育研究の動向……………海後宗臣
＊座談会＊

「教育研究体制の諸問題」

(出席者) 遠藤五郎、大嶋三男、岡津守彦、佐藤睦治、

平塚益徳、(司会) 西田亀久夫

長期教育計画のための調査・研究 大臣官房企画室長

国立教育研究所の使命とその研究成果 平塚益徳

地方における教育の調査・研究活動

○教育研究所……………東京都立教育研究所長

○教育委員会……………大臣官房調査課長

教育研究団体の活動状況とその発展傾向

初等中等教育局高等学校教育課々長楠佐

新しい小学校教育の方向 初等中等教育局初等教育課長

——教育課程審議会の答申について——

人物を中心とした千葉県教育郷土史

人物を中心とした

岩手県教育郷土史



果花……南部洞

山 本 忠 壮

はじめに

明治九年の明治天皇の巡幸は、岩手の明治の学制実施に一時期を画したものであった。

また詩人、歌人としてのみ見られがちな石川啄木を、教育の窓から見たゆえんのものは、人道的国家主義者としての、教育に対する火玉の様な情熱、高まいた識見、教育理想像の卓見にひかれたからである。

大正年間では、盲啞教育の父、柴内魁三、岩手教学の父、菅野義之助、世界は一なりの宮沢賢治を挙げた。

柴内魁三は明治三十八年三月六日楊子屯の戦闘で午前一眼、午後一眼を失い、不自由な身をもって盲啞学校の創設期から果移管に、それから義務教育の完成まで、まことに不惜身命、言亡慮絶の心魂を傾注した。

菅野義之助は、教育のバックボーンにキリスト教を持ち情父子を兼ねるものであった。師範生の誰もが親父と称していたほどで、大正年間の岩手県下の町にくり広げられた教育は、その源流を親父に汲むものであった。

啄木と同じく宮沢賢治を教育の窓からとり上げたゆえんのものは、啄木の鋭角的な鋭さを内に包みながら、ふんわりと出していること、物事の見方、考え方、行い方が、「按上に人なく、按下に馬なし」という感じを持たせられる、教育の高い高い段階に魅せられたからである。

昭和期には紙面の制限もあって、岩手の教学に一新紀元を画された、千喜良英之助ひとり挙げた。四十年前の恩師の墓参にか

けつけて、余りにも偉大なりし師の、教育の源流を突きとめ得た感があった。師の教育の裏には、上杉鷹山が、さらにはその上、上杉謙信の「不識」に源流を殆どするものがあつたのである。

○明治天皇巡幸

— 岩手教学の開頭 —

明治九年七月三日、一関から胆沢郡金ヶ崎学校に立ち寄り、七日には盛岡仁王学校と伝習場に御出でになった。この間、磐井胆沢、江刺、気仙など新たに岩手に統合された四郡の各校優等生を奉迎させたほか、その成績表や習字などの作品を行在所に陳列してお目につけた。

盛岡仁王学校と伝習場では、仁王、盛岡、中野、鍛冶町、長町、山岸、厨川、仙北の八校から計三十人（男女半数）の優等生を選んで、読書や暗算、問答の授業を、また体操は日語、花巻など管内各校から五百人を選んでお目につけた。天皇は体操参加の教員生徒に四十六円七十銭を、また優等生には、四郡下の四十一人と盛岡の八校三十人、合わせて七十一人に、計二十五円を、さらに管内学校生徒に百四十一円七十銭をそれぞれ贈られ、教育の奨励に努められた。

天皇をお迎えした岩手県教育界の影響は大きかった。巡幸を機として教育の充実整備に官民あげて努力した結果、本県の教育制度もどうやら形態を整えるようになった。教育専門家が、「本県の学制は明治九十年をもって最初の一時期を画した」と見るのを例としている。少なくとも各学区ごとに、すべて小学校を置くという学制下第一の事業は、明治天皇巡幸を契機に、ようやく固

まったと言える。特に下閉伊、九戸、二戸などの県北地帯が、学校開設機運になったことは、その証左である。

○石川啄木

— 真の教学とは何か —

啄木は明治十八年十月二十八日の晩、岩手県岩手郡玉山村日戸、常光寺に生まれた。明治三十一年四月、岩手県盛岡中学校入学、三十五年十月同校第五年級修業中退学、明治三十九年四月十一日岩手郡浪民尋常高等小学校尋常科代用教員となる。この年の十一月二十二日、啄木は自らを人の目から隠れた草の根の石塊のような男と称し、「遠い者は耳で聴け、近い者は目で見よ。余はこれ林中の人なり。」と言い、林中書と題し、盛岡中学六百の健児の前に、石塊の叫びとして校友会雑誌に寄せている。その教学に対する真の見識、人生に対する真情と気魄に傾聴しよう。

曰く、日本の教育者には、高俊、或は偉大なる人格によって、其子弟に、「人間の資格」を与えるような人が沢山あろうか。はた又、彼等「諸先生」は、上級の学校に入り、若しくは或職業に就くため、資格をのみ与うる一種の機械でなからうか。如何。

曰く、日本の教育者には、月給の高い所へ転任するためには、泣いて別れを惜しむ子弟をさへ捨てて顧みぬような人はいないであらうか。如何。

曰く、日本の教育者には、子弟の不品行を社会から攻撃されて、「我等は之れ教官なり、願くは我等をして唯教官たる立場を守らしめよ」と泣訴する人はいないであらうか。如何。

曰く、日本の教育者には、規定の時間内に規定の教材を教えられ

ば、それで教育の能事終れりとして、更に他を省みぬ人がないであらうか。如何。

曰く、日本の中学校には、他の学科が如何に優秀でも、一学科で四十点以下の成績を得ると、落第させるという学校はないであらうか。如何。また然るに生徒は成程全科卒業という証書を貰う資格はあるまいが、人間という資格も矢張りそれで欠けているであらうか。如何。

曰く、人には誰しも能不能のあるもの、得意な学科もあり、不得意な学科もある。そして得意な学科には自ずと多量の精力を注ぐものであるのに、一切の学科へ同じように力を致せと強うる教育者一ツマリ、天才を殺して、凡人という地平線にこうがっている石塊のみを作ろうとする教育者はないであらうか。如何。

曰く、日本の教育は、凡人製造を以て目的としている。日本の教育は、その精神に於いて、昔の寺小屋教育よりも劣っている。日本の教育は、人の住まぬ美しい建築物である。別言すれば、日本の教育は教育の本乃伊である。天才を殺す断頭台である。吾等の人生と無関係な閑天地である。

そして、日本の教育者は一種の社会主義者である。貨幣製造者である。何故なれば、彼等は、人は其頭の違う如く心も同じでない事を忘れてゐる。そして、何の懸隔もない。五尺二寸と相場の決定した凡人のみを養成して置いて、大平無事な、「従是以後記事無矣」と世界史へ記されるような、汚水的新時代を作ろうとしている。

予は月給八円の代用教員である。代用教員といえども、生徒に「先生」と呼ばれるからには矢張教育者の一人である。予は何故平

生呪詛している教育界に自ら身を投じたか？

諸君、新建設を成就せむが為めには、先ず大破壊を成就せねばならぬ。破壊を始めるには、先ず其目的物の最も破壊し易き箇所を偵知する必要がある。

今迄に予の偵知した所を綜合して報告すると、人を倒すには矢張り足を斬るのが一番よいようだ。教育の足は小学校である。木乃伊へ呼吸を吹き込むには小学校の門から入るのが一番だ。

諸君、予は茲で満身の声を擲って諸君の前に次の如く叫ぶ。諸君、此の林中書から次の語を抜き去ってしまえば、残るのは林中書の骨許りになる。

曰く、諸君が中学を卒業して他の学校に入らむとすれば、僅か百人足らずの定員へ何千人という応募者が現われる。それらと競争して勝とうとするには、勢い百科全書的な勉強を、少くとも一年位やらねばなるまい。そんな下らぬ勉強をすると、かの怠惰者と同じく進むも退くも人生に些かの影響なき壊れた時計となるではないか。それよりは、今日日本の小学校教師に三万人の不足がある。此の不足は十五ヶ年の後でなければ補充することが出来ぬと、恥かし気もなく当局者が云った。何と諸君、諸君は此空席に向って突貫する勇氣はないか。そして余と共に、かの神の如く無垢なる、然も各々或の特長を具えた幾十という少年少女の顔を、教壇の上から一瞥して見給え。其一刻那に、諸君は、三十年の百科全書の勉強よりも優る、一の或重大なる教訓を得るであらう。そして或極めて嚴肅な恰も神の審判の庭に引き出されたような感情の、渾身に漲り渡るを感ずるであらう。その時は乃ち、諸君が一躍して「理想の戦士」という肩書を買って、天帝の近衛兵となる

時であるのだ。どうか諸君、諸君は伴食大臣よりも代用教員の方が偉いと感じないか。僕がこういうと、諸君の大多数は、恐らく大憤怒する事であらう。然し諸君、諸君に怒る位の元氣があるなら、どうか壊れた時計になってくれるな。代用教員でも何でも構わぬから、何か人生に些少なりとも影響を与えるような考えを起して呉れ。と言っている。

以上は青年教師啄木の、ほんの一素描に過ぎないが、日本一の代用教員と自称した高い理想と、現実分析の鋭さと、家、国、個、さらに広く大きく、全世界もろともに救われるところに教育の道をふまえているあたり、教育に対する彼の情熱と識見には見るべきものがあるう。

○柴内魁三

——盲、聾教育の父——

本県盲聾教育の先駆者、柴内魁三は、明治十二年九月十日、盛岡市に生まれた。陸軍士官学校を卒業し、陸軍中尉として日露戦に参加中、明治三十八年三月六日、揚子屯の戦闘において、不幸弾丸のため両眼を失明した。その後の自己の生活体験から、盲聾教育の必要性を痛感し、明治四十二年四月一日、東京盲聾学校教員練習科に入學した。そこで乃木希典と会った。そのさい乃木は、「お前は どうしてここに來たか」と問うたのに対し、柴内は、「盛岡には盲聾学校がないので、ここを卒業したら盛岡へ帰って盲聾学校を設立したい。」と答えた。それに対し乃木は、「盲聾学校を建てることはやめろ」と言った。察するに両眼を失明し、その上、学校創設などで苦勞することは、容易なことではないと



柴内 魁三

の、親心からであつたろうと思う。けれども柴内はついに初心を貫き、明治四十四年八月二十五日、盛岡市仁王小路二十八番戸に、岩手県盲学校を創設した。当時、盲生男十六名女二名を収容して授業を開始した。次いで同四十五年四月一日には、生徒三名を収容して、聾部の授業を開始した。同時にその経営を維持発展させるために楽善会（岩手県盲聾教育後援会の前身）を組織し、大阪のメリヤス問屋に、葉書一枚で、メリヤスシャツを卸してもらふ予約が成立し、それを軍隊の除隊兵に買ってもらふようにしたのであった。一番資金を得たのは、この事業であつた。またいろいろな名士に書をかいてもらったり、一般には石鹸などを売って資金を得た。

以来着々内容を充実し、大正十三年には、勅令第三七五号盲学校令、及び聾学校令が公布され、各県ごと必ず一校以上の盲聾学校を設置することになった。本県では、柴内経営の私立盲聾学校

を県立に移すことになり、大正十四年四月一日、告示二〇九号をもって、岩手県立盲啞学校に改め、さらにその内容を充実改善した。

創立以来、大正十五年に至る本校卒業生は男生五十三名、女生十四名で、これとは別に技芸科が設けられ、竹細工（大正三年）按摩、鍼灸（大正六年）等を授け、多くの卒業生を世に送った。

なお、この時点における生徒卒業後の状況は盲生卒業生中、大法院盲啞学校に奉職するものあり、多くは自宅開業をなし、月収四、五十円から百円ぐらいで独立自営し、中には結婚生活にはいるもの数あり、聾啞生は盲生に比し遜色ありながらも、鉄瓶製造業工場、裁縫等に従事し月収十五、六円から八、九十円ぐらいで、父兄から余分の物質的援助を受けるものが少なかった。

昭和十年ごろ、盛岡市平山小路に、盲啞の福祉施設としての授産施設を設置し、岩手県盲人福祉協会の会長、岩手県鍼灸、按摩、マッサージ師会連合会の会長となりまったく縦横無尽、東奔西走、席あたたまる暇もなく、社会福祉のために貢献した。

昭和二十三年四月一日から、岩手県条例第三十二号により岩手県立盲啞学校、岩手県立聾啞学校と改称し、盲聾は発展的に分離した。

しかし、血涙をもって盲啞学校を設立し、真個に盲啞教育の振興を願ひ、日夜苦闘し続けた柴内に昭和二十三年七月、追放令が下った。本人の感慨、実に言亡慮絶、筆舌につくし難いものがあった。昭和二十四年解除になったが、それ以後復職はしなかった。

だが、その後も盲聾の名譽校長として、文字どおり最後の一呼

吸まで、盲啞教育のために、身命を捧げ、昭和四十一年三月九日、急性肺炎のため、夢多き多難の生涯を閉じた。法名を「天寿院顯教魁傑清居士」と称し、盛岡市北山恩流寺に眠る。

○菅野義之助

——岩手教学の父——

奥羽切支丹の研究者として有名な菅野義之助は、明治七年一月八日、気仙郡気仙町宇中井に生まれた。明治二十二年、岩手県師範学校に入学、同二十八年卒業したが、直ちに東京高等師範学校本科第二部に入学、同三十六年に同校を卒業し、教育、地理、歴史の中等教員免許状を受けた。小樽中学校に一年在職の後、さらに明治三十七年、東京高等師範研究科に学んだ。岡山県津山高女教諭を経て明治四十一年十二月母校に転じ、岩手県師範学校教諭に任ぜられ、翌四十二年一月、同校附属小学校主事、舎監を兼ね



菅野義之助

た激務の間であって、なお孜孜として奥羽史の研究に精進し、郷土教育史料の研究に大きな功績をあげた。それから本県師範教育ならびに初等教育のために尽瘁すること十数年に及んだが、大正十五年四月、盛岡高等女学校長に抜てきされて、それから約十年間女子教育のために尽力した。

昭和十一年、盛岡市立青年学校長ならびに県立図書館長に任ぜられて、青年教育、社会教育方面にも努力したが、この間また歴史学研究に専念し、平泉、志波城址、弘多柵址（秋田県内）、厨川城址などの遺跡を考定立証した。

ことにも奥羽切支丹史研究には、異常な努力を傾注した。氏が切支丹研究に興味を持つようになったのは、明治四十五年にさかのぼるといふ。水沢に後藤寿庵の遺跡をたずね、クルス場という墓場からポルトガル語が刻まれている多数のメダイ（メダル）を発見し、さらにこの観音堂に同様のメダイが祀られているのを見て、じ来本務のかたわら、これが研究調査に心をひそめることになった。そしてこの研究のためには、ほとんど心魂を打ち込んでかかれたもので、みづから洗礼を受けて旧教の教会にも通われ、またそれを機としてフランス語の研究にも手をひろげられた。ことに当時は、これらの研究手引書は、いずれも原書によらなければならなかったで、八十の手習と苦笑しつつも、なお欧州所伝の日本切支丹史資料に頼しんだ。こうして欧州側の資料と対比しつつ、日本側の史料、遺物、遺跡の研究を進めるにつれて、次第に彼此吻合するものが多いのを見だし、勇気を鼓していっそう深く奥羽切支丹史の研究を進めることとなった。そして昭和十五年ごろから、みづから筆をとって研究の結果をまとめて稿をな

し、さらにこれを東北帝国大学の村岡典嗣教授に送り、草稿の修正を仰いだ。しかし昭和十八年七月十三日、氏は他界し、相次いで村岡教授もまた加筆することなくして他界した。せつかくの原稿もただ埋れるにまかせていた。ところが昭和二十五年、菅野先生顕彰会の手によって初めて「奥羽切支丹史」が出版され、じ後七年になって畢生の労作が世に出たのである。

○宮沢賢治

——世界全体の幸福を願ひ——

宮沢賢治は、明治二十九年八月二十七日、岩手県稗貫郡花巻町に生まれた。大正四年四月、盛岡高等農林学校農学科第二部（大正七年農芸化学科と改称）に首席で入学。（現在岩手大学農学部）大正六年四月一日、高農三年生。引続き特待生、級長、旗手を命ぜらる。大正七年三月十五日、高農本科を卒業。二年間を特待生、級長として通した。予定どおり研究生として残ることとなる。大正九年五月二十日、高農、地質学部研究科を修業した。助教推薦があったが、辞退して月末帰宅し、それより家業を手伝い、読書に励み、地質調査を続ける。

大正十年十二月三日、稗貫郡立稗貫農学校教諭となる。（大正十二年四月に県立花巻農学校と改称）

大正十五年一月、花巻農学校に国民高等学校が開設された。岩手県が二、三か月の短期間に農村指導者を養成する目的で行なったもので、専任は県から高野一司、講師も県から派遣されて各地に移動した。この時農学校では教諭が期間中嘱託となって講義を受け持ち、賢治は農業科学や芸術概論を教えた。生徒は二十八人ぐ

らいてあるが、各村の代表のような優秀な者が多く、平来作のよ
うに、農学出もおれば、小学校だけのものもいた。朝早く起きて
体操のあと、授業があり、午後も勉強し、夜は座談会といった講
習会風なやり方である。

同僚、白藤慈秀は、「宮沢さんの教授法の一つの方法は、
ここは大して必要でないところ、
ここは要るところ、
ここは是非知っておかねばならないところ、
というように教える。そして実地にすぐ役立てなければならぬ
ところは、急所、かんどころを懇切にねいに教えるというやり
方で、あり余る、よほど力がないと、とても出来ない授業であ
った。」といった。

同僚の阿部繁は「私はまだ遠野の実科女学校にいたが、花巻農
学校の研究授業を見に行った。県下の実業学校や中学校や女学校
の先生方が、四十人近くも花巻農学校に集まった。その時、宮沢
先生の公開授業を見た。宮沢先生は、硫酸アンモニアの性質、施
肥法などを一年生に授業しておられた。その頃の中等学校、殊に
実業学校などで、イオン記号などを使う授業などは、どこでもし
ていなかった。宮沢先生は、それをどん／＼使っているのに驚い
た。何と立派な先生がいるものだというのが、私の第一印象でし
た。」といっている。まことにその授業は、森に湖水の神秘を探
し、緑の丘に赤い花を摘むように魅力的であったようである。だ
が大正十五年三月二十一日、花巻農学校を依願退職した。

また、これは社会教育の生きた事例の一つであると思うが、安
太郎という労働者がいた。酒は飲む、バクチは打つ、けんかはす

る。しかし義理人情はわきまえている。この男が金に困ってやっ
て来た。質草は腹がけで「このどんぶり金で金を貸してくれ」とい
うのである。三十銭欲しいという。賢治はその倍額をつかませて
「この腹がけはあなたに入学なのでしょうからお使いなさい。私
の家におくのも、あなたの手にあるのも同じことだから」と受けと
らない。安太郎は、頭を下げて出て行った。そのあと、町で賢治
を見かけた安太郎は、店に内緒で貸してくれた金だから、と思っ
て追っかけて行った。そして金を返そうとすると、賢治はどうし
てもとらない。その時「安太郎さん、あれ（バクチ）だけはやめ
ましたか。」と言、賢治が言った。安太郎は思わず、穴があれば
はいりたい思いでおじぎをした。賢治はすたすた行ってしまった。

教育とは、「言葉に格することなり。」とは、西普一郎博士の言葉
であるが、そのような厳しいものを、賢治は創作の態度として持
っていた。それが法華文学という言葉になって表現されている。
法華文学とはおのずと仏意を明かす文学であるが、名をあらわさ
ず、報いを受けず、おごりの心を去り、筆をとる時は、祖師を礼
拝すると同じように奉請を行ない、仏意にかなうよう心を澄ま
し、それから全力をもって書く。ただ純真に、一意法の喜びの中
にあって、教化を目的とするような、目前のことにとらわれな
い、自分の小才にたよることなく、ただひたすらに、諸仏菩薩の
加護によって書け、と自分に言い聞かせている。ここに「たび心
の決定を得ると、賢治は猛然と書き出した。その猛烈なこと、月
に三千枚も書いたという。そして、これからの宗教は芸術であ
る。これからの芸術は宗教である。」と言っている。燈明のローソ

クは、我が身をつめて闇を照らすが如く、生き抜いた賢治は、多
くの人たちに惜しまれながら、昭和八年九月二十一日、「国訳妙
法蓮華經」千部を作って知己に分けるよう遺言して、静かに此の
世を去った。

○千喜良英之助

—— 為す事によって学ぶ ——

本県の師範教育に深き影響を与え、本県の教育に一新紀元を画
した千喜良英之助は、明治二十九年九月十五日、山形県南置玉郡
南原村大字芳泉町に生まる。ここは原方といって貧乏士族の町で
ある。

大正十年、東京高等師範学校（後の文理大、現教育大）卒業
後、いったん長野県下の中学校に奉職したが、大正十二年四月五
日、東京高等師範学校専攻科、修身教育科に入学。紀平正美先生



千喜良 英之助

等に深く私淑し、ジョン・ジュニーの教育哲学に傾倒した。大正
十四年三月十五日、東京高等師範学校専攻科卒業。卒論は、「実
踐行としての教育と科学としての教育学、特に教育目的論に就い
て」を紀平先生に提出した。師範学校、中学校、高等学校修身
科教員たることを免許された。卒業後岩手師範学校教諭となった。
担当は教育学だったが、ちょうど「知性論」で注目され出したジ
ョン・ジュニーの教育理論を日本化し、実学、実地、実験、実験
を重んじた。教育は生活に結びつき、人間性に根ざしたものでな
ければならぬ。子どもの教育は、過去を伝えるためではなく、新
しい価値を創造するにある。これを実行するためには、これをば
ばんでいる経済組織や社会制度を改良すべき知性を必要とする。
知性は、人間が環境に挑戦して行く手段であり、神から与えられ
た実体としての理性と区別すべきだといふのである。
寄宿舎の舎監長になると、これを直ちに実践に移した。師範昇
格の予定地（上田）約十万平方米メートルを盛岡市から借り受け、
舎生の勤労奉仕で開墾、「勤労園」と名づけた。自給自足の体制
をとったのである。

また、クリーニング機やミシン、精米機、豆腐製造機なども購
入した。豆腐製造で生じた、「おから」は、殖産部にまわり、豚
や鶏の餌にされた。これらの資金は、寄宿舎費（果補助を含
め月額十円五十銭）の剰余金を卒業期まで借り受けて充当した。
利潤はあげて寄宿舎、校内の施設充実に振り向けた。これらを運
営するために庶務、編集、衛生、図書、給与、洗濯、ミシン、炊
事、販売、食品、殖産の各部を置き、舎生全員の分担とした。当
時としてはまったく画期的な教育方式をとったのである。

さらに、寄宿舎施設の改革にも積極的であった。とかく師範の寄宿舎といえ、軍隊式で味気ないものときまっていた。まずこれを追放、楽しい寮生活を送れるように改めたのである。自給自足で食堂の献立もよくなり、喫茶店もできた。若い給仕女も置いてなかなか気分になった。

それに中古だが、フォードも備えた。毎朝夕、上田専売局―学校間を往復し、通学組や職員を、片道六銭で運んだ。夕方五時半を過ぎると、舎生を乗せて盛岡市内を一巡した。病気になるれば病院に送りどけた。車体番号「岩四十一号」をもじって、「始終悦号」と愛称したほどである。

また、井戸を掘って校庭にプールまでつくった。師範生にとって地獄から天国にのぼる思いだった。

また科学的に裏づけられた講義の魅力、人間愛、子弟愛に徹した熱情、実践を伴った理論、師範生六百余の若き魂は、これを千喜良イブムとたたえ、師弟ともに、これにとけこんで行ったのである。今を去る四十年の過去にさかのぼるが、いかにその講義の魅力的なものであったか、その一例を紹介しよう。

倫理学に於ける基本的方法の吟味

「真」の吟味について

与えられた命題が真であるか否かを知るためには、我々は論証の手段を用いる。論証には論拠即ち前提を必要とする。命題の真偽はその前提の真偽によって左右される。しからばその前提の真偽は何によって知られるか。再びその真であることを論証しようとするれば、更に第二の前提を必要とする。かような論証の過程を無限に続けることは勿論出来ない。故に吾等は最後には、最早それ

以上証明することの出来ない一命題に到着して、終らなければならない。かかる命題が真であるためには、それが自明の真理か、然らずんば経験が示す事実か、何れかでなければならない。自明の真理でもなし、経験が示す事実でも無いものに就いては、我等は最早何事も言うことは出来ない。

「善」の吟味について

善悪が自己以外のものによって、其の規準を与えられるという考え、例えば神の命又は帝王の命等が、善の規準を与えるものとの考えは、勿論成立することが出来ぬ。何となれば真の吟味の節に述べた通り、このことは自明の真理ではないから、その理由を尋ねれば、我自身の有する善の規準によって神の命又は帝王の命の善悪を判断するより外に道がないからである。善悪の規準が我等のうちになければならぬならば、我等はどうして又何拠にその規準を見出すか。或行為が善なりという時、真の吟味の場合に述べたところによって、何故に善であるかと問ひ、与えられた理由に對して更に其の理由を問えば、この過程には限りがないのであるから、結局最早其以上理由を示すことの出来ぬ或断定に到着しなければならぬ。即ち究極の規準は証明し得ざる、又証明を要せざる一命題、即ち自明の真理（先験的妥当）でなければならぬ。カントはかかる自明の命題として所謂断定的命法を主張した。我等はこれを自明の真理として受け取り得るか。何れにしても、何等か自明の原理として承認し得る命題に到達せぬ限り、我等は善悪に就いて究極の断定を与えることが出来ぬ。従って實際如何なる倫理学者も、又倫理問題を論ずる一般の人々も、明かなる言明に於いてか、又は語の裏に於いてか、何等か自明の原理なりと称

するものを掲げて、人々の承認を要求している。我々が倫理学說又は一般道徳に関する議論を研究吟味する場合には、常に其の學說又は所説が、最初の出発点として、其の理由を掲げずに承認を求めている命題を探り出し、其を第一に精細な吟味に掛け、然る後に、其の命題から出発して結論に到達する論理、および其の論理の過程の中間前提として引証されている、経験的事実の真偽をたしかめなければならぬ。

「善と意志」

善の究極の規準が、如何なる形又は命題に於いて、表現され、要求されようとも、その帰着する處は、我等の意志であることは明瞭である。我等の意志が如何にあるべきかという点に關して、道徳の理論が存在するのである。従って如何なる内容又は形式を意志に与えようとも、次のような論理の形式は真である。

(i) 我々が単独唯一の意志を有するだけならば、我々が持つ問題は、其の意志を実現するための方法手段の問題だけとなる。

(ii) 我々が多数の意志を有し、其等の意志が矛盾又は衝突する場合には、其等の意志を如何に調和統制すべきかという問題が生ずる。故に若し意志相互間の矛盾を厳密に統制し、完全にして不変なる統一を得ようと望むならば、永久不変の唯一最高の一意志（一原理）至善（The highest good）を確立しなければならぬ。若し又絶対完全且つ永久不変の意志の統一を断念し、又は其れを必要とせず、又は實際に於いて不可能ならば、至善を確立することを要せず、又は其が不可能である。

(iii) 自己と他との意志が共通した場合には、自己と他とに共通した善の規準が存在し、共通点がないか、又は相反する場合に

は、自己と他とは善悪の判断が一致しないか、又は一方が善とするものを他はこれを惡とする。故に全人類が、共通な一意志を有し得るならば、有すべきならば、又有しているならば、全人類を包括する善が存在し、存在すべきであり、又存在する。即ち善は一般普遍に妥当する。若し之に反するならば、全人類を一の善によって統整することは出来ぬ。何れにしても意志が一致するか、又は一致すべき範圍を限度として、同一の善が存在する。此規に善の妥当の遍不及び其の範圍の問題が横たわっている。

これらは講義のほんの一例に過ぎぬ。かくの如く常に格調の高い、それでいて極めて日常生活の實地、實際、實状につながった講義は、四十年後の今日、今なお心底深く刻印されていよいよ忘れられない。

昭和四十年八月十一日没。法名、「興教院毅岳英心居士。」米沢市七軒町照陽寺に眠る。

参考文献

日本教育の回顧と展望	森戸辰男
岩手教育学物語	岩手日報社
岩手教育の人物誌	長岡高人
教育學講義ノート	千喜良英之助
	（山本忠壯所蔵）
	（郷土史研究家）

人物を中心とした

宮城県教育郷土史

大村 榮

一 はじめに

明治三十年五月十二日の河北新報（初代社長一力健次郎、明治三十年一月創刊）に、宮城県の普通教育就学率が全国首位を報じた記事がある。その一節を抄録してみよう。

「誠実なる当事者及県下数百の男女教員の能く訓化の道に尽して論わらざりし堅忍と熱心のために、県下の教育制度は頃々に其面目を刷新し、去る二十九年度文部省報告によれば、普通教育の最も発達したるは全国中実に我宮城県を以て冠なりとすという報告を観るに至る、余輩は是れを読んで双手を掲げて我県下の当路諸氏ならびに男女教員諸氏の功労を深く謝せざる可らざるなり。」（新かなづかいに修正）

いま、およそ百年にわたる本県教育の歴史をふりかえり、人物を中心として、その変遷発展のあとを素描しようとする時、何よりもまず、名も無く埋れた無数の当事者、特に生涯を山間離島の子どもらにささげた教師たちの哀歎をしのび、その無形の業績を追慕しながら、この稿をつづることとする。

もとより限られた小編であるから、本県の教育者群像をのべつくすことはできない。

記述の構成も、おおまかに草創（明治初期）・整備（明治中・後期）・発展（大正・昭和初期）の三部に分け、やむを得ざる場合のほかは、できるだけ現存の人物にふれない方針でペンを進める。

また、参考図書、引用の典拠や資料など、くわしく記述すべきであるが、紙数の制限があるので、そのすべてにわたることを避ける。

る。

二 草創期の人びと

大槻文彦（弘化四―昭和三）が言海の著者として国語学界に貢献した業績は著明であるが、官立宮城師範学校（明治六年創設）および宮城県尋常中学校（明治二十五年創設）の初代校長であり、あわせて宮城県書籍館（明治十四年創設）の第八代館長であったことを知る人は少ない。

父の盤溪は蘭学の泰斗であった大槻玄沢の子で、慶応元年には仙台藩校養賢堂の第六代学頭をつとめた学者。文彦は、その次男として江戸に生まれ、幼時より学につき漢学・数学・英学を修めたといわれる。官立宮城師範学校の校長となったのは、その二十七歳の時である。



大槻 文彦

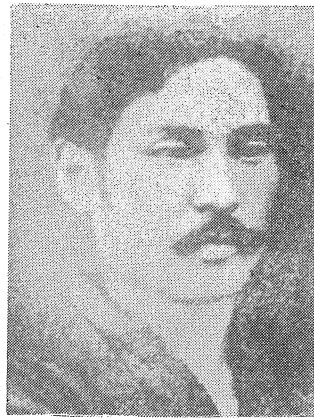
当時の宮城師範学校は、前年に開校した東京師範学校につづいて、大阪と仙台に開校されたばかりで、その学区範囲は、新潟・柏崎・置賜・酒田・若松・長野・相川・新川の八県（第六学区）と宮城・磐前・福島・山形・岩手・秋田・青森の八県（第七学区）とを合わせた広域なものであった。

盤溪は、文彦の宮城師範学校長として赴任するに際し、その壮途を祝し「師範学校」の四字を揮毫（これは額として長く師範学校の玄関にかげられていた）すると共に、「兄文彦、奥東ニ赴任スルヲ送ルノ詩」をはなむけた。その中に「設成ス五万三千校奥東億兆ノ民ヲ化セント欲ス 任ニ勝フト否トハシバラク説フコトヲ休メヨ 皇風ヲ播揚スル此ノ辰ニ在リ」の激励の句がある。これに対し、文彦は「命ヲ奉ジテ師範学校ヲ仙台ニ建ツルノ詩」をささげ、その中で「コニコレ微臣盛際ニ遣フ 奥東ノ教化 天荒ヲ破ル」と歌って雄渾壮大な決意を表明している。

しかし、その大槻初代校長も、任にあること僅かに一年半、「日本辞書」の編纂を命じられて文部省に転勤する。そのあとをつぐのが、松林義規・吉川泰二郎（のちの日本郵船社長）など、いずれも慶応義塾出身の校長であった。

この官立宮城師範学校は、西南戦役後の財政困難の影響を受けて、明治十一年には廢校になり、明治八年に設立された「小学校教員伝習学校」の後身「仙台師範学校」に移管されることになる。木村敏（嘉永三―明治四十一）は、この伝習学校創設の功労者で、その初代校長であり、県立師範学校の校祖と仰がれる人物であった。

県内桃生郡北村に景直（養賢堂助教をつとめた後、郷里に帰り私塾立教堂を経営）の子として生まれ、十九歳で会津戦争に従軍、のち官立宮城師範学校の第一回生徒募集に応じ、抜群の成績で入学、校長大槻文彦に大いに認められていたという。明治七年、宮城師範学校を卒業して職を宮城県に奉じ、仙台の第二番小学校（のち、養賢小学校と改め、その後東二番丁小学校となる）の校長となり、校務に専念するかたわら、普通教育の普及徹底をはかるために県内教員の速成をはかる必要を痛感、明治八年一月「伝習学校設立に関する建議書」を県当局に出し、その実現に尽力した。その建議がいれられ、同年八月に開校のはこびとなった。その第一回の入学者の中に、弟の木村匡（安政六―昭和十五、伝習学校卒、北村小学校長を経て師範学校教諭、東京高等商業学校教員を歴任し、文部省に入り、のち台湾総督府に勤める。



若 生 精一郎

大正十五年故山に帰り宮城県町村会長、斎藤報恩会総務となった。時に、木村敏は二十五歳であった。翌年、伝習学校は公立仙台師範学校として改組された

が、校長は引きつづいて、その任にとどまった。やがて、廃校となった宮城師範学校の校地・校舎・書籍・器具・機械が、この仙台師範学校に移管されることとなり、前にあげた吉川泰二郎校長が仙台師範学校長となり、木村敏は、教頭としてこれを助けた。当時、民選議院設立の建白につづいて全国的に自由民権運動が展開されていたが、時代の情勢を反映して教育界にも、それに応ずる活発な動きがあった。

わずか半年で退いた吉川泰二郎校長のあとに、校長事務弁理となった箕浦勝人（大分県生まれ、慶応義塾出身、のちの報知新聞社長）や、その又、後任の校長兼務となった首藤陸三（宮城県登米郡生まれ、のちの衆議院議員）などは、いずれも熱心な自由民権論者で、その校内でしばしば演説会を開催することがあった。

中でも、明治九年に仙台の培根小学校（第四番小学校の後身、のちの木町通小学校）の校長となった若生精一郎（弘化四―明治十五）は、もって熱烈な活動家であった。この人は、戊辰戦争に活躍した佐幕派の仙台藩士若生精十郎（仙台藩郡奉行、明治二年切腹、家跡没収）の弟で、宮城師範学校を卒業し培根小学校に職を奉じ、校地移転、校舎増築・校庭拡張・分校設置、裁縫科の加設など積極的な経営に当たったが、のち教職を退き、宮城日報を主宰して時事を論じ村松龜一郎（嘉永五―昭和四、本県登米郡出身、衆議院議員）らと共に政治結社「本立社」を組織し、福島県の河野広中らと共に愛国社に加盟し、国会開設の請願をしている。この木町通小学校に付属幼稚園を設置しようとのくわだてが起るが、明治十一年春のことで、これも若生精一郎在职当時（明

治十二年六月退職）のことであった。そこで教員矢野成文（嘉永四―明治二十七）が往復四十日の予定で、デビッド・モルレー等の助言によって開校した東京女子師範学校の付属幼稚園（明治九年創設）を参観し、書籍器具の見本を購入して帰っている。その年の十二月、東京女子師範学校が幼稚園保姆練習科生徒募集に応じ、同校の準訓導大津よしち（のち橋本に改姓）と相原春の二名の女教師が上京している。この付属幼稚園の開園は、両名の講習修了（七月三十日）を待たずに、翌明治十二年の六月に行なわれている。当時の記録に、「東京・京都・大阪の三府をのぞき、地方で幼稚園の開園をみた最初である」との記事があったという。

ところで、明治の初期に仙台にあった国立学校には、宮城師範学校と並んで官立宮城外国語学校（明治七年創立、のち官立宮城英語学校と改称、明治十年廃校）があった。これは、東京・大阪・長崎の外国語学校に並ぶもので、その前身になるものは、養賢堂洋学の伝統を引く辛末館（明治四年創設）があった。その教師横尾東作（天保十一―明治三十五）は、慶応元年藩命によって横浜在留の米人ジェームス・ブラウンについて英学を学んだもので、明治元年には養賢堂の英語教授となった。維新の際には、佐幕派にくみし横浜の各国公使へ檄文を送り、国内戦に介入しないよう呼びかけるなどの政治運動にしたがったこともあったが、明治五年以後は仙台に帰り、辛末館および宮城英語学校で英語教育に当たった。

その教えを受けた学生に有名な英語学者斎藤秀三郎（慶応二―

昭和四）がある。この人は、仙台藩通上方をつとめた父斎藤永頼の子でも、六歳で辛末館に入り英語を学び、のち宮城英語学校に進んだ。のち、上京して正則英語学校を開き、雑誌「英語青年」を刊行すると共に英和中辞典・和英大辞典をあらわし、英和大辞典執筆中惜しくも病氣にたおれた。

ところで明治初期の本県には、それぞれ個性をもった私塾ならびに私立学校が、前後して設立されていた。その中から、代表的なものを選んで、その創設者について略述しておく。

岡千仞（天保二―大正二）仙台藩士、江戸昌平黉に学んだ逸材、幕末の激動期には国事に奔走したが、維新後は時代に即応する人物育成の必要を痛感し、戊辰戦争の罪を問われて刑死した進歩的政治家宿老但木土佐成行の屋敷あと（現・仙台市片平丁小学校地）に隣経堂（明治二年）を開いて子弟を教育した。数年ならずして太政官修史局東京書籍館長を命ぜられ、仙台を離れた。そのあとをついだ弟の岡徳輔（天保十一―明治二十七）は、第五番小学校（育才小学校のち片平小学校と改称）の開校とともにその初代校長となった。

隣経堂からは奉天合戦の作戦参謀であったのちの陸軍大将松川敏胤、衆議院議長藤沢幾之輔、河北新報社長一力健次郎、小学校校長真山寛（真山青果の父）などが輩出し、その学風を受けて片平小学校の初期の卒業生の中からも志賀潔・田丸卓郎・相馬黒光などを出している。

朴沢三代治（文政五―明治二十八）仙台藩士であったが維新後の廃刀令が出されるに及んで、自己の趣味天分を生かして仕立業

に転身し、明治十二年には自宅に裁縫指導の松操塾を開き、五年後に朴沢松操学校（現在の学校法人朴沢学園の前身）を創設した。その多年の経験を組織し「裁縫教授用掛図」「衣服名称掛図」「裁縫教科書」などを編纂し、独得な一斉教授による裁縫指導法を確立し、大きな実績をあげた。

長谷理和（天保九―大正七）仙台藩士志賀理節（侍医）の次女、長谷家にとき夫に死別、時に維新後の大変動に会い、私塾を開き裁縫を教える。明治二十年、私立柳如学校を創設、婦女の淑徳を涵養し、家政、実用の技芸を教授し、独得の校風をそだて、朴沢松操学校と並んで広く名声をほせた。さらに、若生精一郎が培根小学校に裁縫科を加設した際、短期間であったが、招かれてその教師となった。医学博士志賀潔は、その甥に当たる。

明治十九年、松山藩士押川方義（嘉永二―昭和三、大学南校をへて横浜のジエームス・ブラウン塾に学ぶ）が、キリスト教伝道者を養成するために、米人改革派宣教師ウィリアム・ホーイとともに、仙台神学校（のちの東北学院）を創設し、わずか七名の生徒をもって発足した。つづいて、この年に押川方義・吉田亀太郎らは、私立宮城女学校を創立したが、その初代校長は首藤陸三の名義であった。

これと並んで富田鉄之助（本県出身、のちの日本銀行総裁・東京府知事）や、当時の仙台区長松倉旬が設立者となって、「各種専門学校ニ入ラント欲シ又ハ中人以上ノ業務ニ就カント欲スルモノニ須要ナル教育ヲ施スヲ目的」とする私立東華学校が創設され、その初代校長として、新島襄（天保十四―明治二十三）を同

の頃、仙台の小学校は各校孤立して有機的連絡にかけていたので、「ソノ弊風ヲノゾキ、協心戮力以テ教育ノ改良上進ヲ計ルノ公共心ヲ高メル」の必要を主唱し、「区内各小学校輪番ニ各教頭及首座訓導ノ相談会ヲ開ク」こととした。

これがきっかけになって、各校一致協力の体制がととのい、教育会結成への機運が高まって来た。そこで、明治十四年には、「教育会設立アラントノ意見書」を知事に提出し、明治十六年には同志を集め仙台教育義会を創設し、やがて明治十七年には宮城県私立教育会が生まれ、それが発展してやがて明治二十三年には県知事を会長とする宮城県教育会が創立されるのである。この教育会結成の中で仙台の小学校長のはたした役割は大きく、中でも真山寛は、終始その指導的立場にあった。

特に、上杉山通小学校から東二番丁小学校に転じて逝去するまでの十年間は、もっとも活発な活動を展開した。

中でも、明治二十五年八月六日、さきに仙台区内教育関係者の倶楽部集会所として設けた五城館（明治二十一年創設）を会場に、伊沢修二を社長とする民間教育団体国家教育社（のちの帝國教育会）の第二回懇話会において、「小学校教育国庫補助法制定ノ請願」を目的とし、「国立教育期成同盟会」を発足させたが、真山寛は小原保固・菅電司などと共に有力な発起人であった。

なお、この期成同盟会の発起人は、三府一道三十九県にわたり六百四十九人であったが、このうち宮城県は百二十九名で全体の約二割を占め、全国組織の請願代表者になったのが宮城県登米郡佐沼町平民阿部三右衛門（第三代佐沼町長、大正二年没七十三歳）

志社校長のまま兼任として迎えた。

直接の学校経営には新島校長の推薦する市原盛宏（安政五―大正四、熊本に生まれ同志社に学ぶ。のち横浜市長、朝鮮銀行総裁）が副校長として当たったが、その開校式には新島襄が、京都から神戸に出て、海路により横浜に上陸、上野から黒磯までは汽車、白河までは馬車、そのあとは人力車を用いて仙台につき、一場の式辞をのべている。

三 整備期の人びと

その東華学校も、明治二十四年には、宮城県尋常中学校（のちの宮城県仙台第一中学校、現宮城県仙台第一高等学校の前身）を創設することになり、校地校舎をそれに当てるために廃止された。

そして、この宮城県尋常中学校の創立校長として招聘されたのが、「言海」の編集著作を終えたばかりの文学博士大槻文彦であった。

職員組織も、この名校長のもとに集ったものだけに、多才なもので、その中に和達学嘉（のちの仙台市長）、今井彦三郎（のちの一高教授）、本多浅治郎（のちの早大教授、本多光太郎の実兄）、森岩太郎（のちの東京高師教授、服部撫松〔新東京繁昌記〕の著者として知られる）などがいた。

真山寛（安政元―明治二十九）は、私塾隣経堂に学び、のち教員伝習学校に入り、明治八年に同校下等小学校を卒業したが、明治十四年には仙台・上杉山通小学校の第三代校長となった。そ

であった。

ところで、創立当初の宮城県教育会は県内各都市の教育会の連合体で、その一切を統括する総理は、各都市から公選された二名ずつの議員と常置議員二〇名によって公選されることになっていたが、その第五次総会（明治二十七年）の記録によると、宮城県知事勝間田稔が二五票で当選で、次に第二高等学校校長吉村寅太郎が一一票、つづいて宮城県尋常中学校校長大槻文彦が一票という結果になっている。

このように、当時の小学校教育が師範学校と不離一体の関係にあったことはもとより、本県の場合は第二高等学校（明治二十年創設）ならびに宮城県尋常中学校と密接なつながりを持っていたのである。したがって、この会の機関誌として発足した「宮城県教育雑誌」の編集・執筆などにも、小学校訓導と並んで師範学校・中学校・高等学校の教諭・教授が参加している。

第二高等学校の初代校長吉村寅太郎が文部省参事官に転じたあとに、その第二代校長をついだ沢柳政太郎は、宮城県教育会第八回総会（明治三十年）に出席して「理想」と題する講演をおこなう。この本県の普通教育の就学率百分の七十三で全国中ことに優秀であることは喜ばしいかぎりであるが、高等教育の普及が非常に低位にあることは残念である。その向上を期したい。――という趣旨を具体的資料を詳細にあげて論じている。しかし、その任期は一年半たらずで第一高等学校校長に転じてしまうが、その後、明治四十四年には東北大学総長として仙台に來任し、これも短期間であったが本県教育に影響を及ぼしている。



若き日の吉野作造とミス・ブセル

島崎藤村（明治五―昭和十八）が東北学院中学校の作文と英語の教師として仙台入りをしたのが明治二十九年で、二十五歳の若さであった。在仙一年たらずで東京にもどることになるが、仙台市名掛町三浦屋の下宿で、新体詩集「若菜集」を脱稿している。

仙台市高等女学校（のちの宮城県第一高等女学校、現宮城県第一女子高等学校の前身）が、多くの反対論や尚早論などがあつたにかかわらず、日清戦争後の一般的風潮にささえられ、当時の仙台市長遠藤庸次、市会の藤沢幾之輔らの熱心な活躍により、明治三十年に開校した。ところで、この「高等女学校設置建議案」が、宮城県教育会総会に提出されたのは、明治二十七年で、提案理由の説明には常置委員岡五郎（師範学校長）が当たり、その中で、つぎのように述べている。

「そもそも我が宮城県は東北枢要の位置をしめ、学事の進歩教育の普及、これを全国に徴するに敢て多く譲らず、高等中学本部医学部あり、尋常中学あり、師範学校あり、農学校あり、書籍館

あり、教育諸般の施設その善く備れりと言ふべし。然れども独り女子教育の如何を見るに至りて実に慚愧たらざるを得ざるものあり……」この初代校長に国分行道（官立宮城師範学校第一回卒業、仙台出身。茨城師範校長、茨城県学務課長、仙台市会議員、宮城県教育雑誌発行人）が当たっている。

それより少しさかのぼって、明治二十七年ごろから、第二高等学校の生徒、吉野作造（明治十一―昭和八・本県出身、東大教授・評論家）・内崎作三郎（明治九―昭和二十二・本県出身、早大教授）・小西重直（明治八―京都帝大総長）・栗原基（本県出身、第三高等學校教授）らの青年たち十四名は、私立尚綱女学校創設のために仙台に来ていた（明治二十五年）ミス・アンネ・サイレーナ・ブセルのバイブルクラスに出席していた。その中には、西本願寺長老の島地黙雷の次男の雷夢などもいて、熱心にキリスト教の信仰を求めていた。そして、明治三十一年には吉野・内崎・島地の三名がそろって受洗しているのである。

後年、わが国の学界、思想界、わけても教育界に大きな足跡をのこすことになるこの青年たちには、かくも大きな影響を与えたものは何であつたらうか。

ブセル（一八六六―一九三六）の生涯と業績とは、栗原基の編著になる「ブセル先生伝」にくわしい。

彼女はアメリカのバプテスト派宣教師で明治二十五年、同労者のミス・ニードと共に仙台に入り、小さな家庭塾からはじめて尚綱女学校を創設（明治三十三年）し、その校長となつた。在仙二十八年、のち、岩手県遠野町に伝道し、教会・幼稚園を設立した

が、晩年ふたび仙台にもどり、七十歳で天に召された。

明治三十九年には、さきに仙台神学校の創設に当たって、その教授として来日したアメリカの改革派教会外国伝道局宣教師シュネーダー（一八五七―一九三八）が、押川方義のあとを受けて東北学院第二代院長になり、在職すること三十五年、多くの英才をそだて、学院発展の基礎を築いた。

このブセルも、シュネーダーも、押川方義も、ともに仙台市北山の墓地に葬られている。

中国の文豪であり思想家である周樹人・魯迅が仙台医学専門学校に学んでいたのは、明治三十七年秋から三十九年春までであつた。その作品「藤野先生」に登場する藤野厳九郎（明治七―昭和二十）は福井県芦原町に生まれ、名古屋愛知医科大学卒業の医学得業士、東京帝大医科において研究、明治三十四年解剖学の教授として仙台医学専門学校に赴任以来、厳格無比の指導で有名であつた。たまたま、中国留學生の魯迅に対し、懇切で徹底した個人指導をおこない、「先生は偉大である。たとえ、彼の姓名を知る人はすくないかも知れないが――」と感激させたのであつた。

いま、仙台市旧青葉城三ノ丸跡の魯迅の碑の前に立つと、国境を越え学問を通してふれあつた師弟の情愛の美しさに、思いをあらたにさせられるものがある。

その頃、盲啞児の教育についての関心も次第に起こり、明治三十五年には、宮城師範学校に啞生のための一室をもうけ訓導菅原通（文久二―昭和十三、宮城県栗原郡一迫村に生まれる。仙台師範学校卒、二十九歳上京、哲学館に学ぶ、のち東京盲啞学校訓

導）は、東北地方最初の啞人教育に専心したが、開設五年にして閉鎖されることとなり、私立啞人学堂を自宅に開き（明治三十九年）、休職のまま、啞生五、六名のために授業を開始している。

私立東北盲人学校（創設明治四十年）は、本県人折居松太郎（明治四―大正十三）が十六歳にして失明し、煩悶苦悩ののち順天堂病院でマッサージュ術を学び、東北学院神学部出身の牧師佐藤庸男の説教に感激し、余生を盲人の教育に当たることを決意し、東六番丁教会の日曜学校に盲人部のごときものをおくことから発足し、その熱意に共鳴する有志の後援により、いくたびか場所と機構を変え、持続発展していった。

やがて、大正三年県立盲啞学校が開設されることになり、六名の盲生を引きつれて開校式に、囑託教員として勤続すること十年、本県盲人教育の創始者として永眠した。

四 発展期の人びと

明治後期から大正初期にかけて宮城師範出身の人材が、つぎつぎに輩出し、ひとり本県教育界にとどまらず広く全国的な活躍を展開した。

まず、黒川郡大松沢出身の渋谷徳三郎（明治二十三年卒）は、本県の校長をへて視学から上京し、文部省普通学務課に入り、のち東京市学務課長として才腕をふるつた。これにつづいて、名取郡秋保出身の岡崎栄松（明治四十二年卒）は、県内で校長・視学を歴任のあと上京し、東京市社会局に入り大森区長などの要職をつとめた。



及川平治

しかも、このふたりは時を前後して本県に帰り、それぞれ仙台市長をつとめている。(すなわち、渋谷は昭和五年から昭和十六年まで、岡崎は戦後の昭和二十一年から昭和二十二年まで)

和三十三年までである。

一方、天下の三主事の第一人者として名声の高かった東京高師付属小学校主事の佐々木吉三郎(明治二十七年卒、本県遠田郡沼部出身)は、すでに明治三十四年に山口小太郎との共訳でヘルバルト派の教育学者ライン著「小学校教授の原理」を刊行し、つづいて明治四十五年には「教育的美学」を著しており、雑誌「教育研究」の毎号の主張欄を担当し雷風というペンネームで健筆をふるっていた。これに配するに、広島高師付属小学校主事の佐藤熊次郎(明治二十六年卒、本県本吉郡津谷出身)は、明治四十三年に小川正行、篠原助市との共著で「近世教育史」を著し、佐々木の才気煥発に比すれば重厚で緻密な論理で教育の根本問題を論じ、「文化と教育上の諸問題」など、すぐれた著作論文を通して教育思想界の重鎮であった。

小児児童の徳性涵養上特に注意事項並に之が適切なる施設方法」に応募して同じく入選、大正四年には仙台市通町小学校校長として支倉常長行蹟顕彰とその教材化に努力している。

戸田一男と並んで「児童の徳性涵養」についての懸賞論文に入選しているものに宮師卒業後わずか二年たらずの氏家丑次郎・白石慶治(ともに明治四十三年卒)がある。おそらく、この兩名とも前後して男子師範付属小学校にあって、前者が綴方、後者が算術の教育研究と実践に情熱を燃やしていた当時であろう。後年は、そろって、本県初等教育界の重鎮となるが、特に氏家は、大正十年に北海道庁に出向し函館師範訓導をかねて亀田小学校長となつて渡道していた期間があった。

「宮城県教育雑誌」の大正三年の各号には、綴方教育、算術教育の寄稿が多く、論説には女子師範校長小川正行、男子師範付属主事片桐佐太郎、宮城県第一中学校長宗像逸郎(東大教授宗像誠也殿父)の名が光っている。

ところで、大正五年の雑誌「宮城教育」(この年から「宮城県教育雑誌」を改題)に、富塚雄治(明治三十年卒)が「勤的教育講義要領」を連載している。これは、及川平治の講習会の筆記要項を整理し広く県内の教師にその要領を紹介しようとするもので、富塚は及川と同級生であり、在職した栗原郡視学・付属訓導・塩釜小学校長の立場を通し熱心な共鳴支援者であると同時に積極的な実践者でもあった。及川の勤的教育論を広めるに力あったものに宮城郡視学菅原新兵衛(明治二十八年卒)があった。菅原は大正六年の雑誌「宮城教育」に、「勤的教育法鼓吹者及川平治氏」

これら東西の両名主事の中間にあって、明石女子師範付属小学校という全く地方山村の小学校なみの貧弱な施設の中で、名著「分団式効的教育論」(大正元年刊)・「分団式各科勤的教育法」(大正四年刊)を通し、「なさしむる主義の教育・実験室制度・分団式教育」の三原則を立て、自学輔導主義の教育実践を天下に提唱した主事及川平次(明治三十年卒、本県栗原郡若柳出身)の存在は偉観であった。(なお、及川平治については、雑誌「学校経営」昭和四十五年四月号に拙稿をのせている。ご参照いただければ幸甚である。)

この他にも、山形師範付属主事に平賀吉治(明治三十一年卒)、青森師範付属主事に鹿島清治(明治三十一年卒)、新設された宮城県女子師範学校(大正元年創設、初代校長小川正行)の付属小学校主事になった佐々木清之丞(明治二十七年卒)が、たまたま東北教育界の三主事として名声をうたわれた時代がある。

県外にあって、このような多才な活躍を展開していた当時の、県内の動きはどのようなものであったろうか。

梅良造(明治二十四年卒)、斎藤譲一郎(明治二十七年卒)など、早くも校長、視学としての経験をかせね、やがて昭和初期における本県教育界の先達者となる器量をかかせた。特に、斎藤譲一郎は修身教育にあわせて芦田恵之助の首唱する国語教育運動に共鳴し、その強力な推進者でもあった。

戸田一男(明治三十四年卒)は、明治三十八年に宮城県教育会の募集した「県下小学校の児童をより多く能動的ならしむる法」に応募して首位で入選、つづいて明治四十五年の「本県における

を紹介し、その末尾を「青年教育家宜しく風を望みて慕進し第二第三の及川氏の続出あらん事切望に堪えざる所なり」と結んでいる。

勤的教育法を学校経営の中にとり入れて県下の模範校として知事表彰を受けたものに、当時の栗原郡瀬峰小学校校長伊藤善右衛門(明治三十七年卒、その後遠田、牡鹿両郡の視学を経て佐沼小学校長、石巻小学校長を歴任、すぐれた学校経営をし、特に後進の育成に大きな実績をあげた)がある。

また、「よいと思うことは進んでやれ、教えられる前にできるだけ自分で学習せよ」——をスローガンに積極能動自学自習の学校経営を実践したものに勝又頼治(明治四十三年卒)がある。勝又は特に理科教育に関心を寄せ、学習の成立条件としての児童の問題意識とその発達を明かにしようとして、東北大学法文学部の教育学教室、ならびに心理学教室を訪ねたが、確かな手がかりを得ることができなかったと述懐している。全校をあげて「児童の疑問調査」(昭和四年・岩沼小学校)をしていたのは、その摸索の試みだったろうか。

大正十年、宮城県教育会は「本県初等教育の現状に鑑み施設実行すべき緊要なる事項」の問題をきっかけ、懸賞論文を募集している。

世界大戦の影響と戦後経営の問題に関連し、教育の改善振興に何を望むかを、特に具体的に本県初等教育の実際にふれて問いかけていたわけである。これに応募した二十九点(内一点女教師)で、入選したのは女子師範付属訓導の千葉春雄と利府尋常高等小

学校長白石慶治であった。なお、応募の紅一点は長江みさで、のち小野さつき訓導の殉職（大正十一年）があつて、女子教員の社会的地位が見なおされたこともあつて、大正十五年に小野寺あいしと共に本県はじめての女性校長となつた。

ところで、千葉春雄（大正二年卒）は、その論文で本論を行政的部面の施設実行案と教育内容改善私案に分け、周到で説得力に富む論述を進めている。そして、「私は本県教育の振興策を約して、その創造性の踴躍燃焼を激成するに在ると断じて擲筆しよう」と結んでいる。このあと、上京して東京高師付属訓導となり、「綴り方と童謡」「私の国語教育帳」などを書いて全国的視野で国語教育の研究を推進していたが、昭和六年に退職し、厚生閣書店によって雑誌「教育、国語教育」の編集にあたり、のちには東苑書房をおこして、雑誌「綴り方倶楽部」の発行や各種単行本の刊行



四 龜 仁 遷

に手をひろげた。その事業の挫折と病気のため、昭和十八年五十三歳で逝去した。

後に逝去した。

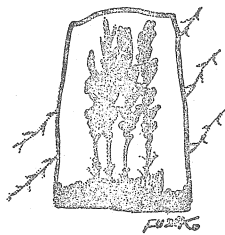
五 おわりに

青森・和歌山・鹿児島・札幌などの各師範学校長を歴任した萱場今朝治が母校の宮城師範学校長となるのが昭和八年。時局は年を追ってきびしくなり、昭和十一年には、及川平治が市長渋谷徳三郎の招きに応じて仙台市教育研究所長となり、仙台市の地域と児童に即したカリキュラム構成の研究に着手したが、惜しくも病気のため昭和十四年に没している。

さらに、清水東四郎、石川謙吾などと共に郷土誌研究ならびに郷土史教育の振興に貢献のあった第二高等学校長阿刀田令造（本県出身明治十六―昭和二十二）は、昭和十一年内田信也知事の懇請により県民修練道場としての養賢堂学頭に就任した。彼が昭和十四年に「宮城教育」に寄せた「教育日誌抄」には、「老生の自督語」として、つぎの言葉をあげている。

「学校長は上は菩提を求め下は衆生を化するの抱負を懷き、専ら修養に努むること。天下第一書を持て。共にこれ凡夫のみの心を持て、世間虚仮唯仏是真。弟子一人も持たずの心を懷け。」

（仙台市立荒巻小学校長）



地蔵（明治二十七―昭和四十五）であつた。その年譜によると、大正二年に代用教員を拝命し、大正八年には、「この頃及川平治氏の勲的教育に傾倒」、同九年には「手塚氏の自由教育に興味を生じ千葉師範付属を視察、自己の無学を痛感しひそかに一日百頁主義を誓い、がむしゃらに本をかじる」、昭和七年「本県国語教育の向上に寄与せん」とし研究誌『国語教育研究』を発行し、同八年「北日本国語講習会開催」、同十二年「栗原郡姫松小学校長拝命」、同十三年「時局に鑑み『国語教育研究』を休刊す。創刊以来、六卷二十四冊」とある。

さらに、県立盲啞学校が大正三年に創設されたことをあげた。しかし、はじめの十年間は師範学校長が校長を兼務しており、大正十四年になって、はじめて専任校長をおいた。

この最初の専任校長となつたのが四龜仁遷（文久三―昭和十六）であつた。八歳にして養賢堂に入り、九歳で水沢の立生館に学び、十三歳仙台に帰って知類小学校（のちの上杉小学校）に移り、十六歳師範学校に入学、十八歳卒業して校長（亘理郡鹿島小）となる。二十歳選ばれて音楽取調所へ特派生として入り、二十一歳卒業と同時に本県最初の音楽教師として宮城師範に就任、のち仙台一中、二中をはじめ数校の音楽教師を兼務、かたわら校歌その他の作曲依頼にも応じ、静堂と号して広く書家としても名声があつた。宮城県立盲啞学校長に在職すること十六年、後任を赤木将為にゆづつた。時に七十五歳。教育職にあること、五十七年、その生涯は全く本県教育史の縮図にも似て貴重なものであつたが、昭和十六年四月三日、小学校が国民学校と改称されてわずか二日

人物を中心とした

秋田県教育郷土史



県花ふきのとう

長谷部哲郎

秋田県の素描

秋田県が国史上にその名を現わすのは七世紀の半ば以降のこと
で、それ以前は野蕃粗暴な北蝦夷^{ホムス}の住む、異民族地帯とされてい
た。幕藩期は出羽国として、佐竹領二十万石の秋田・山本・河辺・
仙北・平鹿・雄勝の六郡が主なる地域で、加えて南部藩の一部鹿角
郡と、由利郡には本荘・矢島・亀田の三小藩があった。明治四年の
廃藩後、同年十一月にはそれらを統合して新たに秋田県が設けら
れ、県都は佐竹藩の旧城地秋田市に置かれて現在にいたっている。
地理的には裏日本の北端に近く辺在し、文化の中心から遠く離
れ、気温は一般に寒冷で、いわゆる豪雪地帯である。半年間は降雪
と、大陸から日本海をわたってくる、きびしい寒波の脅威の中に暮
らさねばならぬという、立地的に不利な悪条件の環境におかれてい
る。

県地の七十％は山林で、その大部分を占め、昔から秋田杉の林業
王国を誇ってきた。だから豊饒^{じょうごう}な広い耕地には恵まれているとはい
えない。けれども基幹産業、稲作の単作地帯として、米の収穫額は
去る昭和四十二年には六十六万トンを超えて、全国第三位という数
字が示された。これは本県独自の「三早栽培」による「健康な稲作
り運動」の奏功によるもので、県民も改めて驚異の目をみはらせら
れた。しかしこれによる農家の生産取得は県生産取得の僅か二十二
％にしか当たらないという、他産業に比べて極めて低いため、豊作

貧乏の出稼ぎ累増現象として指摘されている。

本県はかねてから農業経営の近代化と構造改善を図り、県内二十四地域を指定し、酪農導入による、儲かる農家作りをすすめてきた。一方強力に一町村一工場を目標として、工場誘致を企て、既に百工場の誘致をみている。こうして農工一体とする「秋田県総合開発計画」も着々すすんで、昭和四十年には「秋田湾地区新産業都市」の建設も政府より指定され、総合開発計画も今や第二次計画へ入っている。

また世紀の事業として、国内の注視的となってきた八郎潟の干拓事業も見事に成功して、すでに巨大なコンクリートエレベーター（乾燥貯蔵庫）も数基設けられ、アメリカ映画に見るような大規模のコンバイン（刈取機）が穂波の寄せる、広漠たる拓地で、縦横に活動している。去る昭和三十九年には大潟村も置かれ、既に入植者の集落も出来て、新農村建設の段階に到達している。小中学校や診療所などもつぎつぎと設けられ、日本の新しい農村の未来像をまのあたりに見ることが出来る。

さらに本県に美の国秋田として県内いたる所に美人と美しい自然景観がながめられる。県北には湖水美と火山活動の奇観にとむ、十和田八幡平国立公園があり、背梁山脈中には温泉群に囲まれた神秘的の田沢湖がたたえ、周辺の村々は民謡秋田の宝庫である。南部の県境には東に栗駒山、西には鳥海山がそびえ共に山岳美を誇り、国定公園に指定されている。殊に栗駒山の麓にはコケシ礼賛者のメッカ木地山高原がひらけている。日本海には県立公園男鹿半島が突出

を修め、京の古学四家としてならび称された鴻儒で、博学洽聞、特に詩文に長じていた。藩校開設の功により、佐竹藩より奉行上席の待遇をもって藩士に登用されている。御師範役として秋田にある事十余年、晩年は致仕して京都に帰った。

ところで明道館初代の祭酒（校長）は郷土人中山箒菰である。中山氏は代々医を業としたが、彼は元禄半ば上京して崎門三傑の第一浅見綱齋の門に入った。在京四年にして元禄十二年（一六九九）に帰郷し、崎門学の普及につとめ、寛政五年明道館の祭酒となって、秋田藩数学の振興に大きな足跡をのこしている。

榑亭が去ってから藩学へ最も大きな影響をもたらした儒者は折衷学派の山本北山である。北山は江戸の人で、経学は孝経をもって根拠としていた。豪邁気骨の儒者で、寛政異学の禁には起って力争した、いわゆる寛政五鬼の一人である。寛政二年（一七九〇）江戸藩邸日知館に招かれて藩主義和（九代）以下に孝経を講じている。以来多くの藩士はその学統に属し、秋田折衷学派の流祖として、藩政後半期の藩学に最大の影響を与え、その門からは多数の傑れた儒者が輩出した。さらに北山につづいて藩の数学に迎えられたのは大窪詩仏であった。彼は初め寛政五年北山に従って秋田を訪れ、その後文政八年その縁故になって、江戸藩邸の儒者に招かれているから、秋田の数学とのかなり合いは比較的に長いことになる。やはり折衷学派に属する。彼は文化文政の間江戸詩壇を牛耳り、詩聖堂詩集三十余巻と同詩話の著がある。

さて先に箒菰の死後欠員となっていた藩校明徳館二代祭酒は藩士

し、男性的な奇岩怪石の海岸美を展開し、島内の鬱蒼たる原始林を背景として、特異民俗のナマ、ハダはここを訪れる人の旅情をさそう。

人口は年々僅かながら累減傾向をたどり、現在百二十七万台にとどまっている。県民性は素朴で人情味にとみ、情緒的で、芸術的センスが豊かであるといわれる。これは半年間も雪にうずもれて冬を暮す秋田人の内向的な感情性の沈潜して形成されたものであると心理学者はいつている。むかしから秋田県人は自然に対しては随順と忍従と諦めしか知らなかった。反面、合理性や積極的な覇気に乏しく、理否の態度が曖昧で、自己主張が拙劣であるといわれる。

近世から明治

以上秋田の素描をこころみただのであるが、みぎのような秋田県の風土にいかなる数学が開けたのであろうか、さかのぼって近世の数学の面から眺めてみることにする。

秋田藩の数学は十一代將軍家廟のとき、桑翁の寛政改革の文治政策が直接の動機となって、寛政元年（一七八九）明君佐竹義和はかねて召抱えていた京都の儒者村瀬榑亭の協力を得て、「藩校明道館」（後明徳館と改称）を創設した。次いで藩内主要の地十か所へ分校として郷校も開設し、ここに秋田藩教育制度の基盤が確立されたのである。

榑亭はもと武田梅庵に師事し、皆川淇園、柴野栗山と共に古義学

金岳陽である。北山の門弟で、名は秀実といい、宇平治と称した。寛政年間藩庁にあって、諸奉行を歴任した能吏であったが、故あって後、政務を離れて藩校に席をおいた。北山の学説を継いで、藩学の教育に当たって、折衷学派をおし広めた第一人者である。著書には孝経義があり、多くの子弟を教育し、文化、文政、天保にわたる秋田藩の儒学は大方、岳陽系折衷学派の人々によって占めた観があった。黒沢四如、北村五嶺、小川鷗亭、野上楢山など、いずれも明徳館の文学（学館職名）となり、祭酒の席についた者もいる。その後藩政末期の平元謹斎、藤長、西宮端斎などもやはり岳陽の流れを汲んだ儒者である。後に述べる根本通明もその一人であったといわれている。

こうして岳陽門下から多くの有名無名の多数の学者がでた。思うに、秋田藩では藩校開設の当初から林家の学統でない藩儒を迎えたことは、藩内の学問の傾向が官学の朱子学でない、別のものを求めようとしていたからではなからうか。また他領にあって活躍した折衷学派に属する人には館天籟がいる。天籟は佐竹藩士で、江戸の北山塾に修学を積むこと十余年、太田錦城（加賀大聖寺）朝川善庵（江戸）とともに北山門三才子と称され、江戸で学名をあげた。師北山の長女雲章は天籟の妻となった女儒者である。夫妻で上州桐生や足利に塾を開いたが、文政年間藩の招きによって帰朝、藩校明徳館の教授となったが間もなく病没した。天籟と同郷大館から狩野良知が出ている。文政十二年の生まれ、藩政末期、明徳館より拔擢されて京の佐藤一斎の門に入り、後さらに江戸昌平校に学んだ。帰郷

後、藩校明德館の教壇に立って、安政四年攘夷論の沸騰した当時、外交論「三策」を著わし開港論を世に問うた。たまたま吉田松陰の目にとまり、松下村塾が版元となって「三策」は広く刊行された。松陰が安政大獄によって没する二年前のことである。良知は維新後明治七年内務省に出仕書記官となり、十九年退官、明治二十四年「支那教学史略」を著わした。同著は支那の教学の発展過程を彼地の文献によってまとめたもので、後年上海から翻刻された。日本でも古典的名著として東洋史学者の必携とされている。

良知の子が狩野亨吉である。旧第一高等学校長や京都帝国大学文科大学長の席についた傑物で、文学博士にして理学博士である。一高時代は夏目漱石を熊本の高倉から引抜いて東大に連れて来たり、



西宮 藤 長

あった。

さらに藩校明德館からは明治期一代の碩学根本通明が輩出している。彼こそはまさに藩学最後の輝ける星である。戊辰戦後、秋田藩教学の最高責任者となって、教育制度の確立に奔走し、漸く軌道にのった頃、明治五年の学制頒布となった。その後明治七年大蔵省に出仕している。明治十六年宮内省御用掛に就任し、同十九年正月、明治天皇の御講書始めの儀には御進講を仰付けられ、彼の蘊蓄である周易の中から「泰封」を講ずる光栄に浴した。彼は易学者として内外にその名をはせ、明治二十七年から東京帝国大学の講壇に立って、三十二年には文学博士となっている。挙措極めて謹厳で、常に酒煙草は喫しなかった。「夷狄の袋」といって、洋服を嫌い、いつも鉄扇を手ばさみ、最後まで古武士的な姿をくずさなかった。同僚のケーベル博士が例の「ケーベル小品集」で「日本人の中に、最も毅然とし、最も古武士の感あるは根本教授なり!」と述べている。「周易象義弁正」の大著を始め、易学関係の権威ある多数の著書の外に論語講義、詩経講義、老子講義などもある。彼の蔵書三千冊は現在秋田県立図書館に根本文庫として保存されている。

ところで近世の秋田からまた極めて特異な学者も出ている。それらの人々は封内の学問にその系譜を引くことなく、みな藩外に出て名をあげた。秋田の教学の進歩には直接貢献しなかったが、全国的に大きな足跡をのこしている。国学四大人の平田篤胤と農政経済学者佐藤信淵の二大学者はその人である。

篤胤は佐竹藩士大和田氏の出で、少年期の一時期、前に述べた中山

京都帝大の時には内藤湖南の実力をもって、在野の新聞記者から創設の東洋史講座へ迎えるなど、アカデミックな官学へ新風を送った異色の教育者であった。博士は生涯めとらず、昭和十七年八十歳の天寿を全うした。蔵書三万冊は現在東北大学に狩野文庫として保存されている。博士の功績は安藤昌益を発見したことである。昌益は「自然真實道」で人間性をゆがめた封建社会の悪を徹底的にえぐった人物で、博士の紹介によって大東亜戦後脚光をあびた。終戦直後、日本民主化に当たった極東委員会のノーマン博士（マッカーシー旋風の犠牲者）も狩野亨吉の昌益論に拠って「忘れられた思想家」を岩波新書で出し、ベストセラーとなったことは広く知られている。

前にも触れた藩政末期の平元謹斎は名は重徳といい貞治と称した。戊辰戦争の当時は藩庁の要職のかたわら、明德館の祭酒として重きをなし、二十二史類纂や詩経私記など多くの著書がある。高弟西宮藤長も明德館教授として、藩校が閉鎖されるまでその教職にあり、後明治十五年秋田女子師範学校長として、文明開化の教壇に返り咲いている。これは当時の石田英吉県令が本県女子教育の不振を歎き、その挽回策として、師範学校の女子師範伝習科を一举に独立せしめ、懇望して西宮を校長に据え、彼の教育熱に期待した。西宮はそれにこたえて、女子の就学を容易ならしめる現実的な「女子小学教則」を編んでいる。西宮の門人神沢素堂は秋田折衷学派の植尾を師る教育者で、家塾實善学舎を開いて、本県の中等教育機関不備の明治前期、千人を超える門弟を育成し、明治二十六年大日本教育会よりその功績を表彰された。当時として全国的にも稀有のことと

青我に学んでいるが、青年期には江戸へ出奔している。寛政末期に備中松山藩士平田篤胤の養子となり、板倉氏に仕えた。宣長に傾倒し没後の門人となって、宣長の古道説に社会的発展の方向を与え、実践化へ導いたのは全く篤胤の功績である。文政から天保へかけて、彼は多くの国学についての著書で、名声は全国にあまねくなっただ。六十六歳の天保十二年（一八四一）幕府からいらまれて江戸追放となって郷里秋田へ帰った。これは篤胤の高足生田国秀（万）の柏崎騒動事件や著書「天朝無窮際」についての疑など直接の原因であらうが、篤胤の唱える古道そのものが幕府の忌むところとなったものであるといわれる。帰郷後は実家の甥大和田盛胤のもとに落ちついたが、藩当局も郷土の学者もこの碩学にふさわしい処遇を与えず、僅かの縁故者に支えられて間もなく天保十四年六十八歳で没した。門人は生前没後とも加えて千三百余人におよんで、本居家にも劣らず、著書も大小百余種に上っている。著書と版木の大部分は県立秋田図書館の平田文庫に保存されている。

佐藤信淵もまた郷里に容れられなかった学者である。その点については篤胤以上に甚しかった。信淵は明和六年（一七六九）現羽後町に生まれた。信淵まで五代相続いた学者の家柄である。しかも家学は実学の研究が主で、殊に三代の父祖信景には有名な「土性弁」「山相学」の著がある。現代でも鉱山学の権威書として、高く評価されている。父信季は年少の信淵を伴って、北海道や足尾銅山など各地を遍歴して、農業、鉱業の指導をしてあつた。これについては旧国定教科書に所載されて大方の記憶にあろう。

信淵は長じて後、江戸へ出て蘭学者宇田川玄隨や大槻玄澤に従って、本草学、天文学、地理測量などを学んでいる。このほか渡辺華山、高野長英、江川太郎左衛門、林子平等の著名な交友があった。そして青年期より五十歳代にいたるまで、長らく諸国を巡歴し、実学の調査研究はやむことなく、その間経世済民学者として、和漢蘭を混合した独自のエンサイクロペディア的な学問体系を作りあげたものであろう。著書には「農政本論」を始め、経済や産業改善についてのものがあるかと思えば、国家体制論の「宇内混同秘策」や国防、軍事、造兵等にいたるまで、広範囲にわたって、驚くべき健筆を振るっている。それゆえに彼は多くの為政者の顧問的な存在として迎えられる。国内に足跡はあまねくわたっている。弘化二年（一八四五）時の老中水野忠邦に「復古法概言」を上呈して商業の国営専売法を説いたのを始めとして、さきの「農政本論」は藤澤藩へ、「物価余論」は宇和島藩など、その他大小諸藩の求めに応じて、各種の献策をしている。

ところが出身地の秋田藩では彼は少しも用いらなかった。かつて文化年間、佐竹藩政を慷慨し、痛烈な批判と財政打開策や社会政策を藩老西田定常へ上申したが一顧だにされなかった。彼は著名となつてから西三度も帰省しているが、秋田では初めから信淵を認めなかったという事実がある。彼は晩年江戸で不遇の中に八十三歳で没した。生涯の著書は三百部無慮八千巻の多数に上るといわれている。近年出身地羽後町では信淵文庫を特設して遺著の保存と収集に当たっている。なお秋田経済大学も信淵の再認識のため全学的規模

この数字は同時に発足した、秋田市五校の二倍を越える圧倒的多数で、金県の首位を占めていた。かく目覚めた教育の中心地はやはり現十和田町毛馬内であろう。泉沢氏と内藤湖南父子三代の学者家系は、あまりにも有名である。法務省が昭和三十八年戸籍法施行九十年記念に全国優秀家系二百五十戸を選んで、戸籍を永久に保存することになった。内藤湖南一家もその中に入れられた。湖南の祖父天爵は若い頃江戸の折衷学派朝川善庵の門に学び、天保年代に一時、南部藩世子の侍講をつとめている。同郡の学者は大方天爵に脈を引いた人々である。

湖南は名は虎次郎、慶応二年（一八六六）十和田町毛馬内に生まれた。明治十八年秋田県師範学校卒業後、青雲の志を掲ぎ上京、始め大内青巒の「日教新誌」の編集を手伝い、その後三宅雪嶺の「日本人」に移って、明治二十年代からジャーナリズムの世界に入った。さらに大阪朝日や万朝報などの論説委員となって筆陣を張った。その間東洋史の研究を深め、三十年代には数回にわたって、支那や滿洲を歴遊し、東洋史家として次第に頭角を現わしていった。

明治三十九年新設の京都帝大文科大学の初代学長となった。狩野亨吉の懇望によって、翌四十年創設の東洋史講座を担当した。この時在野のしかも学歴不定の湖南の採用について、アカデミックな学閥の横槍があったが、狩野学長は断固として反対を説き伏せた。あくまでも湖南の該博なる東洋史の学殖をかったのである。間もなく四十三年京都帝大は湖南の実力に対して文学博士を授けている。

大正以降は中国についての学識の広大無辺な權威として、世界の学界に重きをなした。中国史については哲学、文学、美術等の各分

で、「信淵研究会」を組織し、年々研究紀要を出している。

さらに秋田藩内で庶民階級の青少年教育に大きな業績をのこした赤津寺子屋を紹介しよう。既に旧東京文理科大学教授故乙竹岩造博士のライフワーク日本庶民教育資料や近年はまた埼玉大学遠藤泰助博士の「天神信仰の教育史的的研究」によって詳細に紹介されている。同寺子屋は久保田本町四丁目（秋田市）にあって、代々父子相承、明治期におよんでいる。三代赤津盛孝（号如水）とその子盛理夫妻が一家をあげて指導に当たり、極めて整備充実した経営がいとままれた。屋舎の規模は間口四間、奥行二十五間という、大きな二階建てで、階上には女子、階下は男子を学ばせ、最盛期には寺子が四百五十人を数えたと言えられている。如水はその人と為りは誠実で、子盛理はまた詩々として寺子を導き、寒暑風雪一日も教場に臨まぬ日がなかった。盛理は文久三年（一八六三）五十一歳で死去、久保田大悲寺に葬られたが、埋葬当日は遠近の寺子や父兄の会葬者が千人に達し、みな悲痛の余り涕泣したことが語り草となっている。

話はかわって県北十和田湖の近く、旧南部領鹿角郡に移る。ここは昔から学問の水準の高かった所である。出身の碩学内藤湖南が洛陽の紙幣をたかめたといわれる名著「近世文学史論」で安永、天明（一七七一—一七八八）の頃は四書、五経、唐詩選の類が「僻陋三家の村におよんだ」と述べている。これは生まれ故郷の鹿角郡の村をさしているものと思われる。昔から数多くの学者を輩出した土地柄である。明治七年秋田県が学制を実施したとき、本郡の花輪、毛馬内、又新、久保田の四小学校で一挙に約八百名の就学をみている。

野にわたって研究をすすめる、中国史の発展について独自の見解を示し、世界の学界に貢献した業績は大きい。大正十五年には学士院会員を仰せ付けられ、昭和六年一月御講書始めの儀には唐の宰相杜佑の「通典」を進講して光榮に浴した。また独自の書風と豊潤な詩藻によって結ばれた書友には西園寺公望や大養木堂などがあつた。昭和九年六十九歳をもって京都で没した。

さて筆は県南亀田藩に移るが、亀田には幕藩期、藩校長善館があつた。秋田藩にさがけて天明六年（一七八六）、六代藩主岩城隆愨の創設にかかわる。隆愨は盲目の碩学塙保巳一について学んだ。亀田にはそれ以前から好学の氣風がみなぎって、四代隆愨などに士庶の倫理道、「春心帖」を自らかいて藩士に示している。「春心帖」はその後ながく、亀田教学の理念となつて、藩士は写本をとり服膺しおの心を律したといわれている。天明年間幕府の巡検使に加わって、この地を訪れた紀行家古河松軒（備中・岡松）の有名な「東遊雜記」に「花はみよし野、人は武士とやら、婦人小童上方にもおとらぬ人物多し云々」と亀田の氣品の高いことをたたえている。

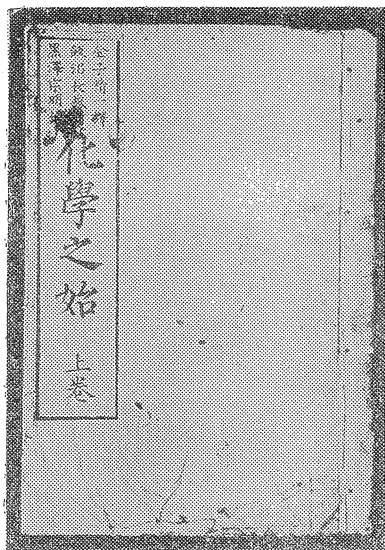
亀田藩の学者には梅軒佐藤憲欽をあげる。江戸安積民斉の門人で、弘化年間長善館の学正に任ぜられ、最後の藩主隆邦の侍講で、戊辰戦争には藩論に孤立して勤王を主張したが容れられなかった。明治期には郷先生として、私塾「育嬰塾」を開き努力した本県の最後の儒者である。明治二十六年没した。由利郡教育会は彼の業績に對して一等功績章を贈って報いた。梅軒の孫は大正期の奈良女子高等師範学校教授真田幸憲で、明治三十年の秋田師範出身の教育学者。校長横山崇次の秋田師範時代からの愛弟子であつた。さらに龜

田の教育人には鳥海弘毅と中田薫がいる。鳥海は明治の府藩県時代に藩の貢士として、東京大学南校に学び、明治の中期、本県の学務課長となった。当時本県は全国有数の馬産県で、産馬改良は本県の重要課題の一つであった。その時彼は全国にさがけて獣医学学校の創設を企て実現した。さらに秋田県教育会も彼の手腕によって組織された。そして同会の事業として英語専修所を開いたが、それにも鳥海の力が大きく働いていた。晩年は京都にあって、大日本武徳会を創立し、幹事長として同会を日本武道の総本山の地位においた功労者である。中田薫は法学博士。日本の山林や水利等の入会権の研究学者で、その学説は学界では今日最も權威あるものとされている。文化勲章と学士院賞を授けられた。東京大学名誉教授で、著書には「村及び村の入会権」「王朝時代の莊園に関する研究」などがある。

なお龜田では丸山修一郎をあげる。明治四十四年秋田師範卒。直情径行の人である。大正デモクラシーの波にのって、青年教育同志会を組織し、旧態の初等教育界へ反逆し、雑誌「主張」を発刊して発渾たる新風を送ったリーダー。後に県視学を勤め、日華戦時中は北支派遣軍付となって、北京第一小学校長となる。戦後民主国会の第一回衆議院議員となった。

明治から昭和

明治五年文明開化のさきがけとして、わが国に始めて学制がしかれて全国いっせいに小学校が設けられ、国民へ平等に教育の機会を



「化学之始」

の出身であった。こうした措置を取ってとった、国司権令と金子の方策はあくまでも新学制を新進氣鋭の若い世代で実施しようという意気込みであったことは疑いがない。こうして秋田県の近代教育の基礎は県政の始期に青壮年層の指導者によって築かれたのである。

やがて初等教育も軌道にのり、明治十九年各種学校令もしかれて、次第に本県の進学率も向上し、特に日清戦後は中等教育の志望者が激増して中等学校の拡張氣運にあった。ところが県の財政事情は容易にそれを許さなかった。加えて明治三十一年十二月の秋田県会は解散の不祥事となって、本県政界には暗雲が低迷していた。そうした渦中へ十二代武田平代三郎知事が赴任してきた。ところが武田知事は県の政界とは非常にうまが合い、三十三年県会は全員起立で武田知事の万才を唱和して、いわゆる万才県会の名を今に伝えている。のみならず県の各界の人気を集め、そうした人気をバックアッ

均等に与えることとなった。その時二十八歳の若い秋田県権令国司仙吉は、いわゆる旧習一洗、これまでの寺子屋や私塾を断固として禁じた。この時他県などでは寺子屋師匠を直ちに小学校教育へ横すべりさせて、寺子はすぐ学童に切り替える方策をとった。ところが国司権令は新時代の教育にはやはりそれにふさわしい教育を養成することが先決であるとして、徒に急いで学校を作らず、明治六年十月旧秋田県師範学校の前身である、伝習学校を設けたのであった。これが今の秋田大学教育学部に脈を引くものである。この国司仙吉について亡くなった福島学芸大学長玖村敏雄氏から聞いたところによると、吉田松陰の門下生で、村塾末期の俊才五生の一人として松陰に指折られた人物であったという。なお五生の中には明治の元勳山県有朋の腹臣として活躍し、特にわが秋田県が誇る偉大なる老農石川理紀之助翁を天下に紹介した品川弥次郎もその一人であった。

ところで国司権令が新学制を実施するに当たって、実際の行政を推進した人は金子精一という県官であった。金子はもと上州藩士で、秋田へ赴任するまでは大学小助教として東京大学や大阪の理化学所で化学を教えてきた科学者で、すでに「化学の始」という本を著わして、わが国の科学史にその名をのこしている。この金子が若い権令の下で、秋田県の教育行政を担って、学制の実施に骨折ったのである。彼はさきの伝習学校を設けるに当って、その教員の大部分に、かつての教え子を郷里の上州から呼び寄せている。当時の秋田県として、碩学老儒がいなかった。佐竹旧藩校の教授を二三人申しわけに採用したに過ぎなかった。金子が招いた教育の殆んどは二十歳代の青年教師で、いずれも当時の最高学府、大学南校

プして、秋田県へ始めて高等女学校（秋田北高校）を設けるやら、現在の鳳鳴、横手、本荘の三校を新設している。さらにそれまで長く休館中の県立図書館の復活開館をして教育知事の名声をあげた。彼はまたスポーツマンで秋田県教育雑誌へ「近代走法のトレーニングの理論と実技」について連載し、また本県へ始めて端艇を導入している。現在本荘高校の端艇だけは当時から伝統を伝えて、しかもその実力は国内でも指折りの地位にある。また情操の豊かな人で、ことの外音楽を好み、作詩作曲もやれば、自らバイオリンやアコーディオンもかねて、時には師範学校の音楽研究会などに臨んで、自作の合唱曲へ伴奏をつけたりなどして文化知事として喝采を博した。なお郷土の人材育成のため、財団法人の秋田県育英会も彼の方によって組織せられ、特に在京学生のため育英会館を建設した功績も没されないであろう。

明治三十年十月師範教育令が施行された。たまたま時の秋田県師範学校校長は教育学者横山栄次であった。彼は在任中、教育の新思潮をつぎつぎと紹介し、本県教育界の啓蒙にあたった功績はきわめて大きい。特に秋田県師範学校は彼の指導によって学究的な活発な学園の雰囲気をつくり、同校の発展期として一時期を画した。彼の薫陶をうけた教え子には後年すぐれた教育者として世に名をはせた者が多い。その一人和田喜八郎をあげる。彼は明治三十三年東京高師を卒業後、秋田師範の教諭と附属主事を兼ね、その後大正期には函館師範の初代校長となった。その時郷里の本県から大量の生徒や教職員を呼び寄せて、北海道立秋田師範学校の創設があったと、当時の教え子は語っている。和田は函館師範を去ってからは沖繩師範や宮城第一高女の校長を経て、大正十三年再び母校秋田師範へ校長となっ

て戻ってきた。当時秋田師範は前年のストライキの余燼がまだくすぶっていた。彼は先輩とし、また校長として校風の抜本的刷新を気負い、着実な学校経営に当たった。そして彼の誠実で大らかな抱容力に富んだ人柄によってストライキの芽も枯れつきた。彼の在任中、校舎は二回も怪火に見舞われて烏有に帰した。にもかかわらず不思議と彼を責める者がいなかった。全く彼の人徳である。昭和七年引退したが、県各界の衆望によって県教育会長に就任し、本県教育界の大御所となったが、昭和十一年六十五歳で没し、県教育会葬をもつて弔われた。

大正期に日本の学校体操に最も大きな影響を与えたものは、スエーデン式学校体操である。この教育体操をわが国に紹介し、自らも熱心にこれを指導し、かつその普及に力を注いだ人は井口あぐり女子である。井口は明治二十三年に秋田県女子師範を出ている。さらに二十五年東京女高師に進み、明治三十二年文部省から体育研究のため、アメリカへ留学を命ぜられた。マサチューセッツ州のノーサンブトン・スミス大学、さらにボストンの体操専門学校などで、生理学や体操を専攻し、三十六年帰朝、東京女高教授となった。翌三十七年には文部省の体操遊戯取調委員となつて、スエーデン体操を力説鼓吹して、学校体操へ導入し、日本の体操へ、一時期を画せしめ日本体操史にその名をとどめている。

さらに大正期も第一次世界大戦後のいわゆる大正デモクラシーの波のうねりが教育界へも草薙氣運を盛りあげて、八大教育思潮こよばれるものがあつた。千葉資吉もその中に指折られた存在で、彼の思潮を端的に表わした「一切衝動皆満足」という奇抜なモットーで全国の教育界に広く名をはせた。明治三十九年秋田師範卒。本県小

学校訓導から奈良女高師附小を経て、大正九年広島師範付小主事となった。その間「創造教育の理論及実際」を著わし、例の「一切衝動皆満足論」を唱えて注目をひいた。彼は、大正十一年ベルリン大学に留学して文化教育学のシュプランガー教授のもとで独創教育学を研究した。ドイツから帰朝後、独創学概論、教育現象学などを著わしたが、大正の末期は新教育運動もすでにそれぞれの位置に定着して千葉の教育論も空転の感があつた。

さらに「浜辺の歌」の作曲者成田為三も音楽的教育者として、また作曲家として全国にその名をはせた。彼は、大正二年の秋田師範卒。さらに東京音楽学校を経て、大正十年ドイツに留学して作曲生活に入った。彼の歌曲は上品で、叙情性にとみ、「歌を忘れたカナリヤ」のような教育的なものが多い。「浜辺の歌」は大正五年彼が二十三歳のときの作曲である。彼はこの歌曲によって人々の美しい心の中に永遠に生きている。

最後に本県の農村教育に画期的な足跡をのこした児玉庄太郎をあげる。本県は大正四年農村振興を目的に秋田師範学校へ農村附属小学校を設け、児玉を主事に配した。彼はかねてから本県の偉大なる老農石川理紀之助を尊敬私淑し、石川の精神主義を体し、独自の農村教育を実践した。彼は農民を愛し、農村小学校を今村敦化の中心として勤儉力行をもって貫く独自の農村教育カリキュラムを作つて実施した。彼は主事として教壇生活の晩年、十数年を農村教育に奉げている。農村教育は即農村救済であるという信念と気概をもつて、実践躬行、本県農業教育の発展に大きな業績を挙げた。著書には「石川翁の事業と言行」がある。

(秋田県史編纂室)

人物を中心とした

山形県教育郷土史

堀 口 正 俊

はじめに

明治五年以前の本県の教育は、落学・家塾（寺子屋）および学制頒布直前の中等教育の三つの系統に分けて考えることができる。落学は、興譲館（米沢藩）、致道館（鶴岡藩）、一貫堂または黒仁堂（松山藩）、明倫堂（新庄藩）、養正館（天童藩）、立誠堂（山形藩）、明新館（上山藩）、郷学校（高橋陣屋）の七校で、それぞれ幕末時代に盛衰があった。家塾（寺子屋）は、山形県教育会の昭和六年の調査では、明治初年に、全県に六三一あり、そのうち生徒数が三〇人以上の大きなものも一四六あったという。また、中等教育施設としては、明治二年創設された酒田の学而館、本沢竹雲を師とする天童市貫津の格知学舎および明治四年興譲館内に設置された洋学舎などが主要なものであった。

本県における初等教育は、明治三年二月の「大学規則並中小学規則」の公布から、既存の教育施設の転換という形で、胎動があり、明治四年には、荒砥、小国、長井、宮内、小松に五つの小学校が開設されているが、これらはいずれも、旧藩学たる興譲館の分館がきり換えられたものであった。学制が頒布された明治五年には置賜県でさらに小学校五校が開設されたにすぎなかったが、八年には、山形県内二三三校、置賜県八五校、鶴岡県一一一校、合計四二九校となり、三県合併後の山形県では、十一年現在、合計五二〇校という驚異的な伸びを示している。これは初代県令となった三島庸庸氏の行政力の賜であった。

三島氏は、明治七年十二月、本県が山形、置賜、酒田の三県に分かれていたころ、酒田県令に任ぜられ、九年八月、三県が統合

して山形県となったとき、その初代県令に榮進し、十五年一月、福島県令を兼ね、同七月、福島県令専任となって本県を去った。鹿兒島県士族の出で文部卿森有禮とも親しく、剛毅果斷の人といわれているが、本県に残した文書、記録の示すところ、非常に綿密細心で、本県における学校教育の基礎づくりには、素晴らしい指導力を発揮している。とくに、初等教育を飛躍させるための師範教育（いわゆる教員伝習学校）については、九年、伝習校を山形県専称寺に開設したほか、鶴岡（十年）、西村山郡楯南（十一年）、西置賜郡宮村（十二年）、高島（十二年）と順次拡充している。三島県令はかねてから県内一郡一中学校を設置するという信念をもち、鶴岡中学校を手はじめに開校させたが、その理想の實現を待たず本県を去ったのである。

本稿では明治・大正・昭和を通じて、本県の教育を支えてきたとみられる人々をあげ、その業績の一部を紹介することにした。

まず第一に、わが国の教育界の指導的地位にあり、本県教育の向上に直接間接に大きな影響を与えた代表的な方々としては、槇山栄次、吉田熊次、小西重直、稻毛金七の四氏があげられるであらう。

一 槇山栄次

慶応三年四月、米沢市上花沢仲町に生まれ、明治二十四年、高等師範学校文学科を卒業し、教職につき、三十年十月、若冠二十五歳にして秋田尋常師範学校長に任ぜられた。三十八年から四十二年まで文部省の留学生となって、ドイツ、アメリカに留学し、

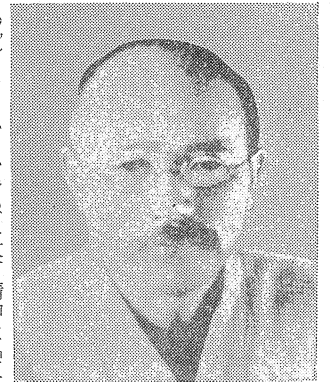
教授法の研究に専念し、帰朝後は、文部省視学官、東京女子高等師範学校教授、奈良女子師範学校校長などを歴任し、その間、専ら教授法の理論の解明に努力した。本県教育界に強く影響を与えた著作は、三十九年出版の「教授の段階に関する研究」および四十二年の「教育教授の新潮」であるといわれている。

二 吉田熊次

明治七年中川村中山に生まれ、三十年東京文科大学哲学科を卒業し、大学院では実践哲学を研究し、さらに、倫理学・教育学へとすすみ、三十七年教育学研究のための留学生として、ドイツ・フランクフルト・イギリスに派遣され、四十年帰朝の後は東京帝国大学で教育学の講座を担当し、わが国の教育学を確立した。氏は、草創期におけるわが国教育学会の第一人者であったが、頗る郷土愛が強く、絶えず、本県の教育実践家を指導し語り合うことを楽しみとし、本県の教育界に大きな影響を与えた。氏の多数の著作のうち、教育に関する主要なものは、系統的教育学、本邦教育史概説、西洋教育史概説、社会的教育学講義、教育学原論、訓練論、教育目的論、教育方法論、民主主義教育論、現代教育学説、ソ連邦の教育改革と教育の思想、最近教育思潮、実験教育学、教育史綱要、教育学綱要、陶冶と価値、教育教授、女子教育の理念、教育及教育学の本質、社会教化論などである。

三 小西重直

明治八年、米沢市山上通町に生まれ、三十四年東京文科大学を卒業し、広島高等師範学校教授、文部省視学官、第七高等学校長を経て、大正二年京都帝国大学文学部教授となり、文学部長を経



小西重直

昭和八年、京都帝国大学総長となつた。氏は幼名を代吉といったが、学生時代、杉浦重剛・中村正直両氏に私淑して重直と改めたように、儒教的世界観と西欧近代教育思潮との融合をはかり、つねに教育精神は「至誠真実」に尽き、この発露が「敬愛信」であつて、これこそが教育作用の本質であると説いた。氏が恩師の教えを尊んだ逸話が多いが、またよく子弟を愛し、七十年の全生涯を通じて、ただひたすらに人を愛した。著作は非常に多いが、主なものをあげれば、教育思想の研究、教育の本質観、精神生活の振作、労作教育、教育の原理と自由、小西博士全集、教育精神の研究、国民教育の基本的研究、民主教育の本質などのほか、「鷹山公と平州先生」があるが、これは氏が、とくに郷土の教育実践家のために筆をとつたものであるといわれている。

四 稲毛金七

明治二十六年、京置賜郡漆山村に生まれ、苦学して早稲田大学哲学科を卒業し、大正二年教育雑誌「創造」を主宰した。十三年から三年間ドイツに留学し、昭和二年から母校で、教育学、教育史、倫理学、心理学を講じた。氏は、中学校にも師範学校にもいかず、独学をもつて大学を卒業したが、その著「若き教育者の自

覚と告白」は、全国の青年教育の共感をよび「創造教育」は全国に弘布した。氏の著作の主なもの、生の創造と道徳、教育者のための哲学、教育哲学の研究、日本文化の創造と教育および教育学概論などである。

第二に、本県における塾風教育の風土を培つた方々としては、加藤完治、結城豊太郎および松田甚次郎の三氏をあげることができ。

五 加藤完治

明治十七年東京村に生まれ、四十四年東京帝国大学農学科を卒業し、大正二年愛知県立安祥農学校教諭となつた。氏は石黒忠篤、山崎延吉、那須皓、橋本伝左エ門等の同窓で、農業の将来に定見をもっていたが、とくに寛克彦の熱烈な愛国主義を信奉し、実践躬行による農村青年教育を主唱していた。大正四年、山形県では、大正天皇の御大典記念事業を計画するに当たり、小田切知事は、デンマークの国民高等学校になつた教育機関の創設を企図し、県立自治講習所を設置し、県理事官藤井武の推薦により、加藤完治を招聘して所長に任じた。自治講習所は、はじめは県内市町村の吏員の教育、または、将来市町村自治の中核となる青年を育成することを目的としていたが、加藤所長は、単なる知識や技能を授けるだけではなく、広く農村の指導者となるべき人物を養成しなければならぬとして、勤労、鍛錬を主体とする精神教育を実施した。加藤氏は大正十一年から三年間、デンマーク・ドイツに留学するが、この前後から開拓のための教育をめざし、南朝



結城豊太郎

鮮への移民、最上郡の開墾などを行なうようになった。氏は山形県上山市を中心に、十四年十二月まで農民教育に努力した後、茨城県に国民高等学校を建て、これを基地として満州開拓事業にとりかかるのである。山形県立自治講習所は、はじめは定員四〇名、年齢二五歳以上で、修業年限は一年であつたが、第四年目から年齢を一六歳以上、学歴資格を問わないことになり、講習生はすべて寄宿舎に収容し、職員がともに宿泊して生活を同じくする塾的な教育機関となつたものである。

六 結城豊太郎

明治十年赤湯町に生まれ、東京帝国大学政治学科を卒業して直ちに日本銀行に入り、財界人として順調に栄進し、昭和十一年東京商工会議所会頭となり、十二年大蔵大臣兼拓務大臣、企画院総裁、日本銀行総裁などを歴任した。氏は愛郷心が強く、郷里の赤湯実業公民学校の名誉校長となつて、子弟の教育に尽力した。昭和九年、赤湯町の旧宅を、みづから風也塾と命名して公民学校に

寄付し、風也塾に学ぶ者の修養の鑑として風也塾土規七則を草して子弟に誦せしめた。これは、立志・修身・齐家・公民・勤勉・工夫・実践の七項目から成り、朝夕、塾生に誦唱さ

せ、師弟同行による実践的な塾風教育の指針となつた。氏はつねに、郷土の発展は青年の修養にあるという信念をもち、昭和九年、東北地方が冷害にあえいでいるとき、今年は稀有の凶作で、体の糧を獲かねて困っておられる人も多いが、私は聊か心の糧を差上げたい」とのべ、「公民学校協の地所に図書館を建て、自分の蔵書や友人から貰つた本を移して、町の青年に読んでもらうことにしました」と、図書館設置の計画をたて臨雲文庫を創設した。蔵書冊数約一万六千、土足のまま入れる閲覧室、足踏み式の米つき機の装飾など、氏の勤労実践教育の理想がよくあらわれている。臨雲とは、氏の雅号をかりて命名したものである。氏はこの文庫を愛し、郷里に帰れば必ずここに起居し、訪ねてくる旧友や青年といろりを囲んで談笑するのを楽しみとした。臨雲文庫の門は、島津公の江戸屋敷にあったものを、井上準之助氏から貰いうけ、「維新の志士が出入した門を、町の青年学徒が通つたら、無言の教育になろう」と、移築させたということである。

七 松田甚次郎

明治四十四年最上郡鳥越の生まれで、昭和二年盛岡高等農林学校を卒業し、宮沢賢治、小野武夫両氏から、農民精神の薫陶を受け、故郷の鳥越に帰り、三年から農村文化運動に挺身したが、七年、近郊の同志とともに、最上共働村塾を開設した。開塾の趣旨には、「村塾は現在の学校教育の弊を徹底的に矯正した人格教育であり、勤労教育であり、生活訓練の場である。一定の教科書とか、入学試験とか、授業料などに関せず、唯々真に人類と祖国を愛し、村を愛し、土を愛し、隣人を愛し、永遠に真理を探究し

ていく純潔な若人達と、全生活、勤勞を共にし、出来得る限り、各目の個性・能力を確認し、以って自家の職分と生活の合理化、経営の改善に努力し、社会生活の何物なるかを明かにしたい。こうした人格的な努力奉仕から、やがてわが國民文化の建設、農民道の確立がみられると確信する」とし、「おのおのの立場を意識的に分担し、お互いに信じ、共働し、隣保し、以って日本農村を以て全人類に先駆する正しいものにつくりあげる」と述べている。教育理念の支えは、デンマーク國民高等学校の教育思想を独自に日本化したものの、宗教教育、開拓のための予備教育および実益本位の短期教育であった。氏は自分の実践を、昭和十三年、羽田書店から「土に叫ぶ」と題して出版したので、全国的に多数の共感者があらわれ、村邊の火災後の再建資金にも浄財が集まった。十七年、戦争が激化する中で、「続土に叫ぶ」が出版されたが、胸を病み三四歳で天逝した。最上共働村邊の実践の内容は、前記の二書に詳かである。

第三に、本県の中等教育を支えた方々としては、佐々木忠蔵、渡辺徳太郎、居駒永雄、鈴木吉郎、千喜良英之助、木村芳三郎、杉浦良助、佐々木俊光、加藤元助、五十嵐正治、結城喜美、佐藤剛、為木自治雄、荻野忠事など一四氏を考えることができるが、紙数の関係もあり、前記四者にしぼって載せることにする。

八 佐々木忠蔵

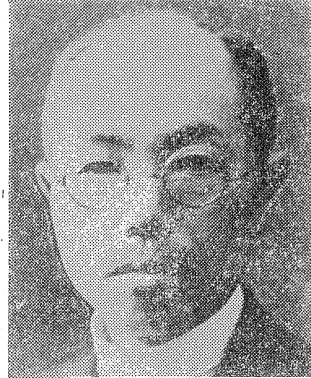
元治元年天童藩の儒者の家に生まれ、明治十四年師範学校を卒業し、天童小学校等で教職についたが、二十年、志を懷いて上京

し、明治法律学校を卒業し、山形日報編集長を経て官吏として台湾に渡り、大正五年台中庁事務官を退職するまで二十二年間、台湾にあった。帰郷当時、天童小学校は校長を欠き、人選に悩んでいたが、大正八年、五六歳で一躍天童小学校長となった。氏は就任早々、女子教育の重要性を説いて有志とはかり、町当局を動かして天童町立実科女学校の創設に尽力し、大正九年、その初代校長となった。氏はまた、織田藩の顕揚につくし、志士吉田大八の伝記の編集や天童小学校長谷部広吉訓導の小伝や維新当時の幸女野田鶴子の伝記などを刊行したほか、天童特産の将棋駒の由来を研究するなど、各方面から郷土の開発に努めた。

九 渡辺徳太郎

明治三年山形市に生まれ、三十年、東京高等商業学校を卒業し、山形尋常中学校および師範学校に勤務し、英語や商業を担当した。氏は大正七年まで二十年間、山形中学校に勤務し、郷土史の研究や図書館に関する研究を新聞雑誌等に発表し、地方文化に貢献した。氏は私立山形図書館の創設に尽力し、四十二年十二月、これが行啓記念山形県立図書館として面目を改めるとともに初代館長に任命された。また、市立山形商業学校が新設されると同時に、初代校長となり、昭和八年九月まで十五年間校長として勤務した。氏は研究心が強く、商業教育、郷土史、図書館などに関する多数の研究論文を発表しているが、とくにわが国最古の図書館である「芸亭」の研究(大正七年十月、図書館雑誌掲載)は、当時図書館史の研究としては画期的なものであった。

十 居駒永雄



渡辺徳太郎

明治二十八年北村山郡大高根村に生まれ、大正五年師範学校を卒業し、八年、検定試験により師範学校教員免許状を得、十一年、母校の教諭に迎えられた。律動遊戯、体育ダン

の中学校における職業教育は振わなかったが、氏は卓越した指導力によって、作業による勤勞精神を鼓吹した。また、学校農場を得るため、鬼面川の荒蕪地二町歩の開墾を行ない、教育上の効果はもとより、食糧増産の国策にも貢献した。二十二年大石田農芸女学校校長に補せられたが、二十三年には母校の興譲館の校長となり、さらに、電賜農芸高等学校長に転じ、二十六年まで農家の子弟の教育に挺身した。「二畝々々が国をおこし、君等の生活を創り出す」と説く氏の教えは、依然、電賜地方に生きている。

第四に、私学関係の女子教育を支えた方々としては、伊藤鶴代・椎野詮・九里とみ・渡利アイ・森谷たま・富沢カネの六氏をあげねばならないが、紙数の都合により、前二者の業績を紹介するに止める。

十二 伊藤鶴代

明治元年鶴岡市に生まれ、三十八年以来、裁縫を通じて女子教育を実践し、氏の薫陶を受けた子女は千数百名に達している。氏はとくに裁縫に造詣が深く、奥田式を学んで、さらに研究し、独自の伊藤式ともいふべき方式をつくり出した。四十三年鶴岡高等女学校教師を退職して自家に伊藤塾を開き、大正十四年、鶴岡裁縫女学校を開校し、昭和六年、校舎を移転増築した。氏は八年九月病没するまで六十六年の全生涯を女子教育にささげ学校創設にとりくんだ。氏の人格の高潔さと教育者としての実践力は、現在にいたるまで、庄内女子教育の母として尊敬されている。

十三 椎野詮

スをはじめ体操の研究に没頭し、また、本県中等学校体育連盟の企画に参与し、その創設に尽力した。氏はオリンピック、ベルリン大会を機に、文部省から派遣されて欧州各国の体育事情を視察し、帰国後は県下体育指導の中核的存在となった。師範学校勤務は二十四年間であったが、昭和二十一年、青年学校令による山形実践高等女学校長を命ぜられ、女子のための昼間定時制を創始したり、山形県青年学校協会を組織したり、定時制高等学校への移行期に数々の業績をあげている。

十一 鈴木吉郎

明治二十九年米沢市外広幡村に生まれ、大正七年東京帝国大学農学実科を卒業し、十年母校米沢興譲館の教壇にたち、以後二十四年間同校に勤務した。その間、担当教科はもろ論とくにめづまれない生徒に対する特別教育に力を注ぎ、自ら学資を補助して卒業させたり、性行不良のものを氏独得な精神教育によって更生させ適当な職業を与えて社会に送り出したりした。第二次大戦前

明治二十年米沢市に生まれ、三十九年結婚生活に入ったが、大正四年、夫君の死にあい、単身上京して東京制憲女学校に学び、さらに茶道・礼法・染色等を修めて帰郷した。七年、米沢市に椎野家政塾を開き、「勤労を通して婦道を実践し、日本伝統の婦道精神を高揚する」ことを理想として女子の教育にあたった。十一年文部大臣から実業学校としての認可をうけ、米沢女子職業学校を創設したが、昭和二年、校名を米沢高等家政女学校と改め、教育内容の充実をはかった。氏は校務の余暇を利用して社会教育に尽力し、婦人会や女子青年団の会合の講師として広く県内をまわり、農村婦女子の教育に貢献した。また、終戦の混乱期には山形県婦人連盟の理事長として、米沢市婦人会長として活躍したが、二十二年、六十一歳で急逝した。

第五に、本県における初等教育を支え、功績顕著として文部大臣から選奨を受けた現場の方々は、小泉政勝、遠藤茂作、斎藤健重、市川徳太郎、高梨利雄、五十嵐三作、高野甚太郎、船山辰治、敷地嶽彦、斎藤七郎、末野義四郎、大川重吉の一二氏があるが、今回はとくに小泉、五十嵐、高野、末野の四氏の業績を紹介する。

十四 小泉政勝

万延元年鮑海部松嶺町に生まれ、明治十五年師範学校卒業と同時に西置賜郡草岡小学校訓導となったが、翌年師範学校訓導に迎えられた。草岡村民の要望により十七年再び草岡小学校に移り、以後十二年間同校に勤続し、同校の名を県下に喧伝させた。二十

九年寒河江尋常高等小学校長に栄転したが、当時の寒河江小学校は県下屈指の大学校で、教職員が多く意見がまとまらず、行政当局はつねに不安を懐いていた。氏の徳望と教育技術は、よく職員の一統をはかったもので、職員はよるこんで氏の指示にしたがい、児童の訓練の優秀さを一般が認めるまでになった。その職員や児童に及ぼした感化は、その学区内にも浸透し、青年の風紀が矯正され、従来懦弱であった悪習が跡を絶つようになった。氏は、厳禁にも酷暑にも、夜間必ず校舎を巡視してから帰宅するのを常とし、多年の間、一日も廃したことがなかった。氏はまた、小学校教員に満足し、他の職に招かれても固辞してうけなかった。三十九年十一月、天長節に文部大臣から選奨されたが、これが第一回目の選奨で、全国を通じて、わずか三名であった。

十五 五十嵐三作

慶応三年鶴岡に生まれ、明治二十二年師範学校を卒業し朝賜小学校訓導となったが、三十年十月、山形県属に任ぜられ、専ら教育諸法規及び教育行政を担当した。当時は本県教育の整備期であったから、本県の教育関係諸法規は大方、氏の案によったといわれている。三十三年五月、酒田小学校長に任ぜられた大正十五年依願退職するまで、同校校長として功績をあげた。氏は教育行政に通じ、教育情勢を察知する認識力があり、公平な立場をとり、教育の全分野に誠実懇切な指導を惜しまなかった。急いだし、おしつたりすることなく環境を調整して機会の到来を待った。氏は単に所管の小学校教育に関してばかりではなく、酒田におけるすべての教育行政に参画した。私立酒田幼稚園の設立や酒田高等

女学校の募集難の解消や酒田商業補習学校の創設などは、すべて氏の尽力に負うところが大きかった。

十六 高野蓋太郎

明治元年米沢市に生まれ、二十二年師範学校を卒業し亀岡小学校訓導となり、後、高島小学校に転じた。二十七年師範学校訓導となり、三十二年、三二歳の若さで山形市第三区小学校長に栄転し、さらに第一学区小学校長となり、四十一年山形高等小学校の設置の際は、その初代校長に任ぜられた。氏はその後、昭和二年退職するまでの二十年間を同校校長として勤続した。氏は、大正四年文部大臣の選奨を、九年には帝國教育会長の表彰を、十三年実業補習教育功労者としての表彰を、十四年には、ペストロッテ百年祭に際して国民教育奨励会の表彰を、それぞれうけている。氏は部下に対して寛大で親切であったが、少しの油断も与えなかった。部下には、その人を信じて特長を発揮させ、功をその人に帰し、罪を自ら負うという態度であったから、各自思いきって職務に励むことを喜んだ。氏は、明治・大正を通じて、本県初等教育界の重鎮であった。

十七 末野義四郎

明治八年山形市木実小路に生まれ、三十年三月、高島小学校訓導となり、東置賜郡小学校准教員養成所の講師を兼任した。氏は新進の意気にもえ、国語・数学・地理・体操等を担当したが、一年間で全生徒が准教員の検定試験に合格するという優秀さであったので、引き続き養成所の講師を命ぜられた。三十三年師範学校訓導に招かれたが、ここでは主として地理・国語の研究にあた

り、教生の指導に素晴らしい能力を発揮した。四十一年、三三歳で山形市第三小学校長に抜擢され、教員の研修を奨励した。大正四年、大正天皇の即位記念として書庫、閲覧室をかねた児童文庫を設置し学校図書館運動の先駆者となった。五年山形市第一小学校に任ぜられたが、当時、木造校舎であった同校は狭隘で破損がひどく、校地の買収や鉄筋改築の難事業ととりくみ、昭和二年落成式をあげたが、その間心魂を傾けて工事の監督にあたるとともに、分散授業中の教師や児童を激励するなど、その完成に心身を捧げた。改築記念として計画したプールと、大正天皇即位記念の校庭の植樹は、いまにいたるまで同校に大きな恩恵を与えている。

第六に初等教育に功績ありとして県段階で表彰された方々は、昭和二十七年までにつぎの三一氏である。伊藤清助、今田直己、鈴木キク、金沢長吉、油井忠之助、鈴木吉四郎、渡辺シズ、石沢清太郎、今野喜平治、斎藤正市、余語重雄、石井於鈴、大浦米蔵、松田義太郎、佐藤正教、斎藤広治郎、富塚富蔵、高橋俊一、石川泰三、能登山勝太郎、阿部広直、白旗源治、三宅喜一、赤井運次郎、佐川伝吉、高橋堅治、堀正、鈴木佐一、鈴木孝治郎、井上勝夫、仙場真四郎。今回はとくに鈴木キク、松田、能登山、阿部、白旗、赤井の六氏にしばってその業績を紹介する。

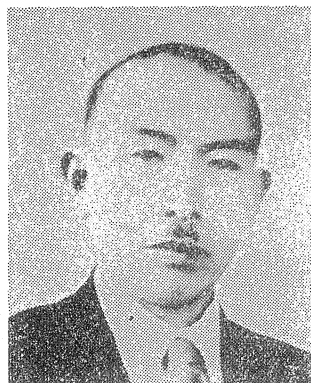
十八 鈴木キク

明治二十九年西村山郡白岩町に生まれ、大正二年白岩小学校に勤め、西山、沼山の各小学校を経て、昭和二十五年三月退職した。

氏は尋職三十七年間、終始一貫低学年指導に専念し、その間健康に恵まれ、病気のための欠勤は一日もなかった。長い経歴から生み出された低学年児童の取扱いと指導技術は、文字どおり「妙」といわれた。こうなるまでには氏が、最も困難であるとされる低学年の担任を進んで希望し、人知れぬ苦労と努力を続けた結果であった。氏が西山小学校在職中、一年生の男子の精薄児を、いろいろの方法で指導し、遂にその効をあげたことは有名な逸話である。氏は小学校教育に努力したほか、地域社会の教育振興につくし、とくに婦人の地位の向上をはかるため、自ら進んで婦人会活動の指導にあたり、組織の充実と専断の推進につとめ、郡連合婦人会長に推され献身的に活躍した。

十九 松田鶴太郎

明治二十八年新発田市に生まれ、大正四年本県師範学校を卒業して亀岡小学校に勤務した後、上京して向学心をみたしたが、七年、父の死を機に本県に帰り、真室川を中心として、初等教育に尽力した。氏は昭和三年、大豊小学校が組合立を廃して各村独立した時、豊田小学校の初代校長に抜擢され、豊田の学校がまだ竣工しない間、両校の寄台世帯を、円満な人柄と穏



松田 鶴太郎

に尽力した。氏は昭和三年、大豊小学校が組合立を廃して各村独立した時、豊田小学校の初代校長に抜擢され、豊田の学校がまだ竣工しない間、両校の寄台世帯を、円満な人柄と穏

健な手腕でまとめあげた。氏はこの後、真室川・金山・沼田の各小学校長を歴任し、二十一年再び真室川の校長となった。氏はここで、敗戦による社会の混沌の中で、地域の意向をとりいれ、地味に着実に、教育の復興に努め、他に転出しようとする野心も懷かず、ただひたすらに郷里の教育に身を捧げた。しかし、この後氏は懇望されて新庄小学校長となり郡の小学校会長となったが、小手先や口先だけの仕事をやれない氏の性格は、円満な人柄と相まって接する人々に温さと親しみを与え、信望が極めて厚かった。

二十 能登山勝太郎

明治十年鮑海郡中平田村に生まれ、三十三年師範学校を卒業し、中平田小学校長を経て昭和十九年酒田裁縫女学校を退職するまで、四十五年間にわたって教育界につくしたが、その中の三十四年間は中平田小学校長としての勤務であった。氏は、学校教育の振興は社会環境の整備充実にあるという信念をもち、学校中心の社会教育を目標として、着実な実践を積みあげた。教育者の使命は、単に在学児童のみに終ってはいらない、村の中堅は青年であるから、これにおいては村の振興はありえないとし、日露戦争直後、中平田文庫を開設して青年に提供し、補習教育によって青年の研究熱を培い、校地校舎を開放し、学校に備品を設備した場合、必ず展覽会を開いてこれを普及し、栄養講習や生活改善の講習会を開催するなど、常に学校との関連において村民の啓蒙に努めた。とくに実業教育については、実習の成績によって収穫物を分配して勤労の成果を榮しませ、女子には養蚕、養鶏、養蠶等による副業の指導にまで手をさし延べている。

二十一 阿部広直

明治二十七年鮑海郡北保村に生まれ、大正五年師範学校を卒業し、左沢小学校、師範学校訓導、琢成小学校長を経て山形県視学となった。十九年三月、山形市第一国民学校長に任ぜられ、五年間、終戦前後の困難な時期に学校経営にあたった後、山形市学務課長となり教育行政を担当した。六三制による学校計画の実施、災害にあった第二小学校、鈴川小学校の復旧、第四中学校の新設、モデル第五中学校の建設、組合立第六中学校の新設をはじめ、戦時中に荒廃した各校の施設、教師の改善および学校給食施設の整備など数々の業績を残して、二十七年学務課長を辞した。

二十二 白旗源治

明治二十三年藤島の生まれで、大正元年師範学校を卒業し、狩川、藤島、横山各小学校訓導を経て十二年押切小学校長となり、ついで、渡前、藤島、大山、藤島の小学校長を歴任した。二十年藤島町長に就任のため退職するまで三十四年間教職にあった。氏は学校経営にすぐれた手腕を発揮したほか青年教育に力を入れ、補習学校、青年訓練所の刷新に努力し、ことに勤労青少年のための定時制高等学校設置の機運がおこると、藤島町ほか一〇か村の意向をまとめて協力会を組織し、藤島高等学校にこれを設置し、入学の勧奨や教育企画に参加し尽力した。

二十三 赤井運次郎

明治十年米沢市に生まれ、三十五年師範学校を卒業し、長井、米沢興譲各小学校の訓導を経て米沢市東郡小学校長となり、西部小学校長、高等小学校長を歴任し、昭和八年、退職するまで三十

二年間教職にあった。氏は米沢市教育課長として六年間、教育行政を担当した後、十四年、推されて米沢市立図書館長となり、十一年間、同館の運営に尽力した。氏はつねに笑顔をもって人に接し飾るところなく、天真らんまんであった。この性格が先輩に愛され信頼され、後輩に尊敬された理由であろう。学資に苦勞してゐる有名な青少年があると、早速、郷土の先輩、富豪の門をたたき、出資或いは履備を願うなど、援助した例が非常に多い。

おわりに

山形県教育史の編纂は多年の懸案であり、昭和五年、山形県教育会が「山形県教育史編纂委員会」を組織し、末野義四郎、五十嵐清蔵、白田金兵衛、橋本寿松、今野小一郎、岡野徳右エ門、小関貞次、上倉裕二の諸氏が資料を収集したことがあったが、遂に完成をみなかった。戦後そのとき収集した資料の散逸が心配されたが、山形県教育研究所が設立されると、前記の資料によって、上倉氏を中心として、ともかく「山形県教育史」二巻が出版された。また、戦後の教育についても、同研究所がとりあげ、菊地清助氏を中心に「戦後教育実践の史的研究」二巻が四十二年にできあがった。山形県における教育史関係の図書はいまのところこの二種類だけしかない。従って教育史を人物中心に扱うとすれば、これらによる以外に方法がないので、本稿が社会教育その他に欠けることがあるのは、叙上の理由によるものである。本稿はとくに上倉氏の「山形県教育史」人物篇によるところが大きく、山形県教育研究所と上倉氏の労を謝し、敬意を表するとともに、今後の研究を期待するものである。

(山形県立図書館長)

人物を中心とした

福島県教育郷土史



果花……ねもとしくなげ

菅 田 宏

はじめに

戊辰戦争の悲劇的な終末をもって明治維新をむかえた福島県は、それまで十一の本藩と十四藩の飛領および幕府直轄領とから成り立っていた。維新後、廃藩置県を経て福島・磐前・若松の三県が置かれたが、明治九年、三県が合併しほぼ現在の行政区域の福島県が誕生した。

藩政時代は、藩独自の教育方針と伝統を維持した藩校があった。おもに武士の子弟を学ばせたが、農民・町人の子弟を教育する私塾や寺子屋もあって、ともに幾多の人材を養成したが、明治五年、学制の公布によって、会津藩の日新館、白河藩の修道館、中村藩の育英館、三春藩の明德堂、平藩の佑賢堂、泉藩の汲深館、湯長谷藩の致道館、二本松藩の敬学館、守山藩の養老館、石岡藩分領の興風館、福島藩の講学館などの伝統ある藩校や私塾・寺子屋までつきと姿を消していった。

しかしながら、幕末・維新の激動期に育った人びとのなかから近代教育の先駆者として、また本県教育界の礎を築いた人材が生まれたことも見のがすことができない。

今年は、わが国が近代国家として出発してから一〇〇年を迎える。この間、本県はもちろん全国的にも教育界の発展に尽力した人びとあるいは学問研究の分野に活躍した人びととその業績について、(一)本県教育界の先駆者たち、(二)本県師範教育に尽力した人々、(三)郷土教育の実践者たち、(四)本県出身の学者とその業績の四項目にわけて紹介してみたい。

(一) 本県教育界の先駆者たち

わが国の教育制度は、明治五年の学制公布をもって、その出発点としているが、実際には、明治二年二月五日、「府県施政順序」が制定され、そのなかに府県は小学校を設けるべきことを明示された。しかしながら、戊辰戦争によって戦火にみまわれた本県土では、学校の設立、教育の普及をはかるなどの余裕はなく、もっぱら藩政時代の私塾・寺子屋などに依存していた。しかし学制公布以後は私塾・寺子屋などが禁止されたので、全国あがて学校造りに取りかかるようになった。このころ、福島県に四二〇校、若松県に四二〇校、磐前県に一六四校が設置を予定されたが、実際には、磐前県をのぞいて福島県二一〇校、若松県九七校しか設置されなかった。

この時期、本県教育界の先駆者として、まずあげたいのは、明治五年六月、三県分立時代の福島県権令として着任した安場保和である。安場は、旧熊本藩士で横井小楠の門に学び、明治元年の錦旗東征には東海道鎮撫総督府参謀として参加した。維新後、胆沢県権大参事、明治三年熊本県大参事から大蔵大丞に栄転した。明治四年十一月、岩倉具視特命全權大使に随行して欧米訪問に出発したが、翌五年五月、單身北米より帰朝し、翌六月本県権令として着任し、十月県令となった。以来三年二か月間在任した。この間、県の行政区画改正、殖産政策の推進に力を注ぐが、とくに教育政策では、自ら先頭に立って区または町村吏員に小学校の設置と男女児童の就学奨励を命じ、県下全域の学齢児童の調査を実施

するなどみるべきものがあつた。一方、県都福島には、福島小学校を設立し、学務主任杉本正徳に命じて、同校教員二宮直躬、門馬尚経、岡倉巳おおよび学務係員数名を上京させ、東京師範学校の授業を参観させまた東京府小学講習所に依託して授業方法を伝習させた。明治七年四月、文部省にたくに要請して東京師範学校上等学科得業生久米由太郎を迎えることに成功した。福島県常光寺におかれた仮講習所は同年九月、新築落成した福島小学校内に移し、教員養成を目的とした講習所として開設された。これが福島師範学校の前身であつた。

また翌十月には、時代の趨勢にこたえるべく洋学校を開校して英語を教授した。これより先、明治五年二月には、須賀川に福島医学学校の前身須賀川医学所を開設した。安場は、かつて胆沢県権大参事であった時、同県庁に給仕として出仕していた少年後藤新平を見いだしてめんどろをみたが、ようやく文明開化の息吹きを感じさせる福島の町に、後藤を呼び寄せ洋学校に学ばせ須賀川の医学学校に入学させたのである。杉森久英の小説「大風呂敷」(毎日新聞社刊)は、後藤新平の波乱の生涯を描いているが、少年時代の新平と安場の心のふれあいが暖かく描きだされている。本県教育の創業期に、安場のような開明的な県令を迎えていたことは、その後の本県教育の発展にも大きな影響をあたえた。

安場の懇請によって着任した得業生久米由太郎は、小説家久米正雄の殿父である。着任と同時に三等訓導・教場監事に任じられ、教育諸規則の制定と仮講習所の開設準備に奔走した。

明治七年四月、福島常光寺に開設された仮講習所に、管内各

区の小学校教員を集め、授業法を伝習することから始められたが、明治八年一月、小学校教則講習所を開校し、入学試験の結果二十二名を入学させた。修学期間は七か月とし、教官は、はじめ久米と堀江半峯の二人で、久米は読書、算術、教授法を担当し、堀江は漢字を教授した。久米はその後長野県に移り、上田女学校に奉職したが、同校火災で御真影を焼失した責任をとって割腹自殺をとげた。人格・識見ともに当時一流の教育者であった。「阿武隈心中」「学生時代」「受験生の手記」で一世を風びした久米正雄は、父の任地上田で生まれたが、遺児となって母とともに母の郷里郡山で過ごし、安積中学から一高、東京帝大を経て作家となつたのである。

久米とともに講習所で漢籍を教授した堀江半峯は、二本松藩に生まれ、安積良斎、佐藤一斎の門にはいり秀才の名が高かった。藩校敬学館の教授をつとめた。維新後、福島に移住し作新塾を開いて子弟を教育していたが、仮講習所の教官にむかえられ、明治二十一年七月七十歳の高齡で没した。

また福島県より伝習生の一人として東京に派遣された二宮直朝は、熊本第五高等学校教授、福島中学校長を歴任し、明治四十年、若年三十八歳で初代福島市長に就任した二宮哲三の厳父で、父子二代本県教育界の発展に尽力した。二宮と同じく派遣された門馬尚経、岡倉巳あるいは講習所の教官に任命された海野信幸、錦織穠清、阿部秀正などの業績も忘れることができない。また元白河藩士で測量術の大家市川方幹は、磨藩置県後、福島県史生となり、明治七年六月、講習所の教頭となっている。田村郡三春で

庸軒塾を開設し、門弟二千人をこえたといわれた最上流和算家佐久間健、磐城平藩儒神林復所の子で大須賀家を継ぎ、明治十二年「磐城郡村誌」「磐城史料」をまとめ、相馬郡長、福島師範、仙台第二高等学校教授となった大須賀鈞軒、明治五年、教科書として広くもちいられた「内国史略」の著者でのもち東京帝大教授となつた旧会津藩士南摩綱紀、元下手渡藩主で明治十年初代学習院長となった立花種彦、女性では、戊辰戦争直後、幼学校を創立し、社会事業に一生を捧げた瓜生岩子、会津若松の生まれで横浜のフェリス女学校を卒業後、助教として母校の教壇にたち、また女流翻訳家として「小公子」「イノック・アーデン物語」の名訳をのこした若松賤子、会津藩砲術師範山本権八の娘として生まれ、のち新島襄の妻となつて同志社の創立に尽力した新島八重子、大山巖元帥の妻捨松の妹で、東京高等女子師範学校の名舎監とうたわれた山川二葉など初期教育界で活躍した人として忘れることができない。

(二) 本県師範教育に尽力した人びと

学制公布以後もたびたび教育制度の改変がおこなわれたが、師範教育の面でも幾度か改革がおこなわれた。

明治九年一月、講習所から師範伝習所と改称され、翌十年二月には、福島第一号師範学校となり、同時に第二号師範学校は若松、第三号師範学校は平にそれぞれ分立された。明治十一年三月、若松、平の両師範学校を併合して福島師範学校が誕生した。その後、福島県尋常師範学校、福島師範学校と改称された。

こうしたなかで、明治十八年十月、福島師範学校長として着任したのが能勢栄である。能勢は、嘉永五年旧幕臣の子として江戸に生まれ、漢学者松原心齋の門に入り、維新後十九歳の時、ハワイ領事に随行してアメリカに渡り、パシフィック大学を卒業して明治九年帰国した。岡山師範、岡山中学校、学習院などに奉職したあと長野県師範学校長となった。

長野から福島師範学校校長兼中学校長、学務課長も併任するといふ、文字どおり本県教育の最高責任者となった。時の文部大臣森有礼の教育方針に共鳴しその実現をはかった。わずか一年三か月の在任期間であったが、本県教育界にあたえた影響はきわめて大きかった。

能勢は、教育の權威をたかめ普及をはかるため県議會をうごかし、当時としては破格の予算を獲得して全国まれにみる規模の師範学校を建設した。また山形・栃木・千葉・東京・新潟・神奈川・長野などの各地から優秀な人材を招いて配置し、本県教育界の重要な位置は、ほとんど他県人に占められる様相を呈した。これに対して、師範学校書記でのもち安積中学校に転じた斎藤政徳らは、本県教育界や師範学校に学ぶ者に、「福島県の教育は、本県出身のわれわれが引き受けるという氣概を持とう」と訴えた。このように、能勢校長の教育刷新の影響とこれに対する本県教育陣の一大奮起が実を結び、やがて「教育は長野か福島か」といわれるほど全国的にも教育界として注目をあつめ、多くの人材を世に送った。また能勢は、福島に本格的な西洋料理をとりいれ、洋服着用を宣伝するなど福島文化史上にも忘れることができない。



浅岡

しかしながら、このころ、長野県を全国一の教育県に育てあげようとした人こそ本県出身者であったことはあまり知られていない。元二本松藩武器奉行浅岡段介の四男浅岡一と段介の三男で渡辺家を継いだ渡辺敏である。浅岡は、明治十九年、長野県尋常師範学校長となり、学務課長を兼任し、信濃教育会長の要職にあつて、因襲打破、科学的合理主義を全県に浸透させるなどの業績をのこし、明治三十九年、学習院を退職した後、会津中学校長に迎えられた人である。一方渡辺敏は、明治八年、東京師範学校を卒業し、筑摩県三等訓導に赴任、その後、小学校長など歴任して明治二十九年長野高等女学校校長となり、郷土研究、長野地学研究の拠点として同県教育界に尽力すること前後四十年におよんだ。昭和五年二月、八十四歳で病没したが、長野高等女学校に



根本莞爾

は、同校長の業績をたたえた銅像が立てられた。

この当時、福島師範の教壇に立った人びとには、旧福島藩士で遊蓮と号し、「草書習字帖」「楷書千字文」を著した高橋純蔵、旧二本松藩士でのも「二本松藩史」の編纂に参画した戸城伝七郎、福島の本内に鎮座する小楯八幡神社の神官の出で「福島県史談」をまとめた木口弘記、このころすでに県内遺跡の調査と発掘を手がけ、「東京人類学会雑誌」に論文を発表していた山形県士族の犬塚又兵、明治十九年から三年間、龍勢校長の招きで教壇に立った植物学の権威根本莞爾等がいた。

根本は、万延元年、仙台藩領本吉郡大谷村の生まれ、維新後、仙台の宮城英語学校から東京師範学校に学び植物学を専攻した。松本師範を経て本県に赴任したが、英語や博物の授業をもち、か

たわら助手中原源治をしたがえ、県内の山野をくまなく歩いて植物の採集と研究に励み、多くの新種を発見し学界に発表した。明治二十一年三月、上京して東京帝大にかよって植物学の研究に専念、のち牧野富太郎博士とともに不朽の名著「日本植物総覧」を完成した。根本の教えをうけたなかから田代善太郎、小松山農天雄など本県植物学界に貢献した優秀な研究者が輩出した。

また旧二本松藩士の家にも生まれた宇田三郎は、福島師範を経て東京高等師範学校に入学、明治十九年十月同校卒業後、福島師範に迎えられ、のち長野県に転出したが、明治三十年四月、福島第一尋常高等小学校長として着任し、福島商業補習学校、福島幼稚園の設立、訓育学校の創設にも尽力した。近藤節太郎・藤井利普・野地清学・吉村五郎・渡辺文弥・天野助治・須田赫二等は皆その訓陶によくした人たちである。

明治二十年から三十年ごろになると福島師範卒業生から教育界で名をあげた人たちがかなり輩出した。二本松出身で考古学者小此木忠七郎(明治十七卒)、明治二十三年卒業には、「小野圭の英語」で有名な小野圭次郎と同校卒業生で最初の福島師範学校長となった木野崎吉展がいた。小野圭次郎は、明治二年漢方医小野良寛の子として常磐湯本近くの下船尾に生まれた。父のすすめによって英語を専攻し、福島師範から東京高等師範に進み、卒業後、土浦高女、九州小倉中学、松山の北予中学、松山高商等で教鞭をとった。「小野圭の英語」は戦前の受験生のバイブル的存在であった。福島師範のライバルであった長野師範学校校長、静岡師範学校校長を歴任した会津出身の星菊多(明治二十四卒)がおり、また大正か

ら昭和初期、日本の教育界とくに小学校の重鎮となったのが渡辺文弥(明治二十五卒)である。渡辺は明治二年相馬郡福田村の生まれ、棚倉尋常高等小学校長、沼津小学校長、福島第一高等小学校長、須賀川第一小学校を歴任し、この間、県小学校長会長、全国小学校会副会長の要職にあった。福井師範、函館師範の校長を歴任したいわき出身の本多忠綱は、明治二十五年福師を卒業して東京高等師範にすすんだ。福師の教師となつて「福島県地誌提要」をまとめた宇津木勢八(明治二十六卒)、明治二十七年から十八年卒業者のなかには、馬上幸太郎、鈴木元美、藤井利普等福島師範の秀才がおり、つぎつぎに東京高師にすすんだ。馬上は、明治六年現いわき市小名浜町の生まれ、明治三十二年高師卒業後、秋田師範学校校長横山栄次に招かれ秋田師範に奉職し、同師範の黄金時代を築きあげ、のち高師教授、女子学習院教授を歴任した。鈴木もいわき市の出身、明治三十二年の高師卒で、女子学習院教授となった。藤井は、やはりいわきの出身で、明治三十四年高師卒、東京女子高等師範教授でのも東京市教育局長を歴任した。昭和初期の十年間、この藤井教育局長を中心に、東京の教育界を掌握し、世に言う福島時代を現出したことで知られている。

明治の終わりから大正期には、戦争とその後の経済恐慌などが相次ぎ、教育制度も小学校から師範学校・大学まで時代の影響をうけた。

とくに第一次大戦後の経済恐慌に遭遇し、これらの事態に対処する教育方針と学校制度の樹立のため、政府は、「臨時教育會議」(大正六年六月)を招集し、翌七年三月、「義務教育費国庫負担

法」を制定し、市町村財政の救助と教員優遇の措置をとったが、その反面教育にたいする国家権力はますます強化されたことも事実であった。しかしこうしたなかにも、大正デモクラシーの影響をうけて、欧米の新しい教育思想や教育運動がつつぎと紹介された。

こうした時期に福島師範を卒業して活躍した人びとには、先に紹介した馬上や藤井とともに高師にすすみ、のち「福島の茗溪十傑」にえらばれている真船民伊・宗像鴨四郎、秋葉馬治等がいた。

また現いわき市小川町の出身で、アメリカに渡って成功し、ライスキングと称せられた国府田敬三郎も福島師範簡易科を明治三十五年に卒業した。戦前、「福島教育会雑誌」などに論文をかかげ、当時の本県教育界で重きをなしていた人たちの多くは、明治末期から大正期の卒業生であった。須田赫二(明治三十五卒)水野末治(大正二卒)菅野圓蔵(大正七卒)星正治・近藤景助(大正九卒)また戦後の混乱期に県教育民生部長などの要職を歴任した坪井實寿(大正十一卒)等がいる。

また今はそれぞれ故人となったが、郷土教育ととりくんだ木口昇(明治四十四卒)、福島県の俳諧史研究に生涯をかけた須賀川の矢部保太郎(明治三十六卒)、会津文化史をまとめた喜多方の二瓶清(明治三十九卒)等の業績は、いまでもさんざんと輝いている。

戦後、学制改革によって、福島師範学校は、昭和二十五年六月、福島大学学芸学部として開学したが初代学芸学部長栗村虎雄をはじめ美術の山川忠義(大正十一卒)地質学の三本杉巳代治(大正十五卒)、地理学の安田初雄(昭和三卒)等かなりの教師

は、福島師範の出身者でしめられていた。また福師、福大の卒業生で組織する「吾輩会」は、なんといっても本県教育界の中心的存在となつてゐることは言うまでもない。

(三) 郷土教育の実践者たち

第一次世界大戦後、あいついでおこつた経済恐慌によって、不況のどん底におかれた農村を、いかにして自力更生させるかが大きな社会問題となつてゐた。「郷土教育」は、荒廃した農村を教育の面から建て直すということから出発している。

文部省は、昭和五年、予算節減の方針にもかかわらず、各道府県の師範学校に郷土研究施設費を補助し、郷土教育の講習会を主催するなどの熱意を示したが、それだけに当時の農村不況がいかに深刻なものであつたかを物語っている。

昭和六年七月、「郷土科学」の巻頭文に掲載されている「郷土教育と学制改革」には、「教師は先ずもって児童・青年の父兄らとともに、それぞれの立場から現在の社会生活を研究し、批判する協同学習の意義を体得する。そのためには、郷土研究や郷土調査が一番必要であり、この研究と調査との協力が生み出す社会的自覚こそが、これらの教育方針を発見し、実施する根本基準である」と述べられている。

福島県師範学校には、昭和四年四月、文部省訓令に基づいて郷土室の新設が決定され、文部省からは、五、九六〇円の奨励金が交付された。当時郷土室主任には木口昇、副主任には川島武治両教諭が任命された。

新設の郷土室では、古文書、書籍、書画をはじめ農産品、農産加工品、工業製品、土器石器等考古学的出土品、民俗・民具資料等を県内各地より収集展示し、さながら郷土博物館の様相を呈した。

郷土室の主任木口昇は、福島師範創設期に教壇に立っていた木口弘記の息子で、明治二十二年生まれ、明治四十四年の福島師範卒業である。大正十二年、三十五歳で同校教諭となつて国語、漢文、歴史の各科を担当した。とくに郷土資料の収集と後進の指導と文字どおり本県郷土教育を実践した第一人者である。

当時、福島県師範学校長は及川弥平、女子師範学校長は前田恒治とともに郷土教育には熱心であった。とくに前田は、「福島県郷土誌」「福島県碑文集」などを在任中にまとめて発刊した。ま



木口昇

た同校で教諭をとつていた池内儀八は、本県最初の「福島県郷土史」を著わした。

福島県教育会でも「郷土教育」の実践を重視し、機関誌「福島県教育」には「郷土教育特集号」を掲載したほどであった。この特集号には、師範学校教諭をはじめ同校出身者など教育界の第一線で活躍していた人たちの郷土教育に関する研究論文を掲載した。その主なるものを紹介すると、菅野圓蔵「郷土教育の着眼」大木喜代之進「農村開発に対する郷土教育の意義と方法」、紺野勝治「郷土史年表について」小林金太郎「福島県下の玩具」、村越豊一「郷土教育の重要性と其の基礎」、山口弥一郎「郷土の地域概念」木口白癸郎「福島師範の郷土研究」等であった。

また郷土教育の重要性とりわけ郷土研究を広く一般県民に啓蒙するために、女子師範校長前田恒治、木口弘記をはじめ「安達憲政史」「二本松寺院物語」の著書で知られた平島三郎（明治十八福師卒）、「下手渡藩史」をまとめた吉村五郎（明治二十一年福師卒）、田島敬一郎等師範学校関係者は、福島県知事伊藤武彦、福島県学務部長諸橋漢、福島市長佐藤沢をそれぞれ会長、副会長、評議員にむかえて、昭和十年十一月、岩磐郷土研究会が創設され、機関誌「郷土研究岩磐史談」を発刊した。これによって、一般県民の郷土に対する認識をたかめまた郷土史を研究する人たちに発表の機会をあたえることに役だつた。

福師郷土室の木口門下からは、現在福島県史編纂委員として活躍している梅宮茂、佐藤堅治郎をはじめ最近ベトナムの戦災孤児の救済に奔走している禅僧吉岡棟一等がおり、また岩磐郷土史研

究会員として直接間接に木口の学恩によくした人々には、現福島大学教授で福島県史編纂副会長の要職にある庄司吉之助、元堀町長で県史編纂委員でもある金沢青友等とその数も多い。

このように郷土教育の実践活動のなから新しい郷土史研究の方法がみだされ、戦前・戦後を通じて本県の郷土史研究、地方史研究を推進した多くの研究者を育成されたことは大きな収穫であったと言えよう。

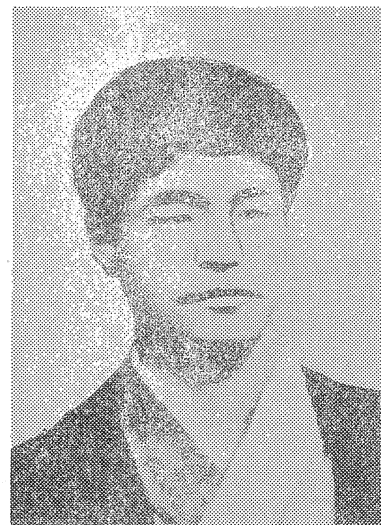
(四) 本県出身の学者とその業績

明治維新後、薩摩、長州など西国雄藩の出身者にくらべて、本県諸藩の出身者は、かなり不遇な立場におかれていた。官界・政界・実業界・軍人などで出世コースをすすむことは容易ではなかった。一例をあげれば、旧会津藩士山川浩は、戊辰戦争で西軍と戦い、明治維新になつてから陸軍少尉に昇進したが、突如として退役を命じられ、男爵、貴族院議員となつたが、「このまま会津人を將軍にしておけば薩長雄藩出身による主導権がくつがえされるかもしれないと懸念されたからである」といううわさが伝わったといわれている。

こうしたためか、自分の実力のある程度正當に評価される学問・研究の道にはいった人が案外多かつたようである。その人たちのなかから野口英世や朝河貫一のような世界的な学者をはじめ、わが国の学術振興、教育文化の発展に貢献した逸材が輩出した。

黄熱病の権威として知られた野口英世博士であるが、いまだら紹介するまでもなく、日本人の誇りの一つとして語られる人であ

る。磐梯山麓の寒村、翁島村の貧農に生まれ、苦学して世界的な医学者となった人である。東西比較法制史、中世封建制度史の權威で、エール大学名誉教授となった朝河貫一博士は、昭和二十三年アメリカで病没されたのち、わが国でもその業績の偉大であったことを知ったほどで、一般にはあまり知られていなかった。明治六年、旧二本松藩士朝河正澄の子として二本松に生まれ、福島尋常中学校を経て早稲田大学の前身東京専門学校文科に学び、明治二十八年首席で卒業した。同年渡米してダートマス大学、エール大学大学院を卒業した。母校ダートマス大学で「極東史」を教え、三十五歳の時、エール大学で「日本文明史」を教えた。以後三十余年間、東洋封建制度史、西洋中世史の研究に精進した。この間、エール大学図書館日華部長、同大学評議員などの要職につ



朝 河 貫 一

き、停年後、同大名譽教授となり、専攻の集大成として「東西比較法制史」の研究に没頭し昭和二十三年八月、パーモント州ウエスト・ワーズボロの別荘で七十六歳の生涯を終えた。「入来文書」「莊園研究」などの名著をのこしているが、博士の業績について、最近ようやく元駐日アメリカ大使ライシャワー博士、ミシガン大学のジョン・ホール博士、東京大学堀米庸三教授等によって、高く評価されるようになった。

本県出身の学者で大学総長・学長の要職についた人では、まず東京帝大総長に二回就任した山川健次郎をあげねばならない。山川は、安政元年七月、会津藩家老山川尚江の二男として生まれた。兄浩はのち陸軍少将、男爵で貴族院議員となった。また妹の捨松は、女性としてわが国最初のアメリカ留学生となり、のち大山巖元帥の夫人となった。もう一人の妹は、東京女子高等師範の名舎監として知られた教育者であった。山川は明治三年プロンヤに留学し、翌四年アメリカに渡りエール大学で物理学を専攻した。同八年帰国し東京開成学校、東京帝大理学部で教授にたち、明治二十一年理学博士となった。明治三十四年から三十八年、大正二年から同九年までの二度、東京帝大総長をつとめ、また初代九州帝大総長、京都帝大総長（兼任）等を歴任したが、本県の生んだ教育界の第一人者であった。

「群解漢和大辞典」（富山房）の編者として知られている服部宇之吉は、漢学者・東洋哲学の權威として、その学識は、当時の清国にもひびき、アメリカの名門ハーバード大学で教壇に立つほどであった。二本松藩士服部藤八の三男として慶応三年四月生ま

れ、生後まもなく母を失い、戊辰戦争では父が戦死するという不幸を味わったが、生涯を学問一筋に貫き、大正三年京城帝大総長に就任するなど数々の業績をのこして昭和十四年七月病没した。会津出身の新城新蔵、小西重直は、相前後して京都帝大総長に就任した。新城は、明治六年八月、代々酒造業を営む商家に生まれ、明治十九年、当時まだ福島町にあった福島中学校に入学した。同級生には、「滝口入道」の著者高山樗牛がいた。二高から東京帝大物理学科に入学、明治三十六年、ドイツ留学、帰朝後、京都帝大教授、理学博士の学位をうけた。この間同大学に宇宙物理講座を新設し、その主任教授となった。昭和四年から八年まで同大学総長に就任した。退任後、上海自然科学研究所長として中国に渡った。重力の測定また中国古代天文学の權威で、昭和十三



新 城 新 蔵

年八月、南京の病舎でなくなった。新城のあと京都帝大総長となつたのが、奇しくも同郷の小西重直である。小西は、旧米沢藩士寓所幸吉の長男であるが、母方の親戚である小西馬之允の養子となつて会津若松に移った。明治二十七年福島尋常中学校を首席で卒業、仙台の二高を経て東京帝大に入学した。明治三十四年同大学卒業には恩賜の銀時計を授与されるほどの秀才であった。教育学研究のためドイツに留学し、帰国後、広島高等師範学校、第七高等学校校長を歴任し、大正二年京都帝大教授となり、文学博士の学位をうけた。昭和八年三月同大文学部長から総長に就任した。この間、同大学法学部滝川幸辰教授の著書が官憲より発売禁止処分をうけたことから端を発したいわゆる滝川事件では、大学の自治と学問の自由を守るため、京都帝大の大学官制にもとづいて、滝川教授の休職要求は不当であることを時の文部大臣鳩山一郎に訴えたがはたさず、この事件の責任をとって辞職した。また小西は、教育学者としてヨーロッパの新教育思想などを積極的に紹介し、自らも敬・愛・信の三ヶ条を終生の信条として実践し、日本のペスタロッチと仰がれ、多くの教育者、教育学者を育てた。

明治二十年伊達郡深川町生まれ、英文学の權威齋藤勇は、東京帝大名譽教授、東京女子大学学長をつとめた。理学博士で福島市出身の渡辺万治郎は、昭和三十一年から秋田大学学長を二期つとめた。地質学の研究一筋に生きた人で秋田県文化功労賞をうけ、本県にとっては、福島県総合開発委員として只見川電源開発を提案した功労者でもある。埼玉大学学長をつとめた古生物学の權威遠藤隆次また植物の色素の研究で知られ、岡山大学学長もつとめ

た服部静夫はともに須賀川市の出身である。前青山学院大学長は、白河出身の古坂崑城^{かきじょう}、鈴木貫太郎内閣の文部大臣をつとめた二本松市出身の太田耕造は、亜細亜大学学長である。東洋法制史の権威で矢吹町出身の会田範治と齒科レントゲンの権威で医学博士、会津柳津町出身の鈴木勝は、ともに日本大学学長をつとめたことがある。富山大学学長には、薬学一筋に研究を続けた会津若松出身の横田嘉右衛門がえらばれた。

すでに故人となったが、各分野の権威者となった人には、会津若松出身でベネクトロッチの研究で名高い教育学者高嶺秀夫、橋梁学の権威、福島出身の原竜太、蒙古史研究の筋内亘は、白河市の出身である。わが国のマルクス経済学を確立したいわき市小川町出身の櫛田民蔵、片山哲内閣の司法大臣をつとめた白河市出身の鈴木義男等があげられる。また現在ユニークな研究で学界の注目を集めている本県出身者には、「国史大系」の編纂を完成させ、「昭和の靖保己」^{しやうのせいほお}と称された千葉大学教授の丸山二郎（猪苗代町）をまずあげなければならない。言語学者で国立国語研究所長岩淵悦太郎（白河市）、憲法学者で静岡大学教授鈴木安蔵（相馬郡小高町）、福島市金谷川の生まれで、教育史の権威で知られる尾形鶴吉、経済史の尾形龜吉兄弟博士、「国分寺の研究」など古代史の権威、大阪市立大学教授角田文衛（桑折町）、交通史の研究で知られる九州大学教授新城常三（会津若松）、民俗芸能史の権威で早稲田大学教授本田安次（本宮町）、東大教授で交通政策で有名な今野源八郎（相馬市）、現代英文学研究の第一人者、福島中学出身で東北大学教授村岡勇、柳田賞にかがやく民俗学の岩崎敏夫は、現在東北学院大で教えている。女性経済史学者三瓶孝子

は、福島市の生まれ、「日本綿業発達史」「日本機業史」をまとめ、「ある女の半生」は学問の道をきびしく生き抜いた三瓶の自叙伝である。自然科学・工学の分野では、九州大学名誉教授渡辺恵弘がいる。船舶工学の権威でいわき市勿来の生まれである。探鉱冶金学で知られる斎藤平吉は早稲田大学理工学部教授、機械力学では工学院大学学長もつとめた猪苗代町出身の野口尚一^{しやういち}がいる。医化学の権威金沢大学名誉教授岩崎憲（喜多方市）、氣象史学の荒川秀俊（白河市）も有名で氣象研究所長である。

地元福島大学の教授陣も地味な研究活動をしているが、福島市の出身で小学校卒業だけで農学博士の学位をえた庄司吉之助は、異例の存在、同市第三小学校卒、新聞社や、電気試験所の事務員ののち、福島高等商業の事務職員となった。生来の歴史好きが近世・近代史の研究に取りくむようになった。昭和二十五年、福大経済学部講師、同二十九年助教授、同三十八年教授となった。この間、県内くまなく史料調査をおこない、その綿密な史料調査と実証分析にもとづいた研究は、戦後における近代史研究のうえで全国的にも注目された。「米騒動の研究」「世直し一揆の研究」「明治維新の経済構造」「政社政党発達史」等の著書があり研究論文も多い。昭和三十六年、「近世養蚕業発達史」が東大で認められ、農学博士の学位が与えられた。

以上、人物を中心とした本県教育郷土史の概要を紹介したが、ここにそのすべてをのせることができなかった。教育一筋に貫いた有名無名の多くの人たちこそ、本県の教育をささえてきた人たちであることを付記しておきたい。

（福島県立図書館司書）